
世界間のボーダーライン

武道家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界間のボーダーライン

【Nコード】

N2689K

【作者名】

武道家

【あらすじ】

異世界トリップ系の魔法と戦闘の学園ファンタジー。

古武術を祖父から習う小学生、久我幸人は、技を使う事を祖父に禁止され、学校でイジメの対象にされていた。

世界は面白くない。イジメを受けた日の下校時にそんな事を思っていた幸人の目の前に、全身真っ黒でフードを被った異形が姿を現し、不思議な指輪を押し付けていく。

それから数年後。一通の手紙が幸人に届いた事から物語は動き出す。

現在、第二章を執筆中。

序章（前書き）

目を通して下さる皆さん。はじめまして？お久しぶりです？
武道家です。

これは半年ほど前に書いたプロローグです。

DREADNOUGHT

（The faith that is not broken）

の息抜きに書いて行こうと思っています。

どうぞよろしく願います。

序章

世界間のボーダーライン

序章

世界はどうして、こうもつまらないのだろうか？

小学六年生が考えるには重すぎる事を考えながら、久我幸人は机へ書かれた陰湿な手口で書かれた辛辣な言葉の落書きを消していた。

幸人は自分が世間一般で言っいじめられっ子に入っている事は理解していた。友達が居ない訳ではなく、遊び友達はしっかり居るが、ただ運の悪い事に今から一年ほど前に、力が有り余る馬鹿野郎に目を付けられていた。

目を付けられた理由は簡単。気の弱いクラスメートを庇ったら、矛先が幸人に向いたのだ。それ以来、幸人の靴がまともにゲタ箱に入っていた事は無いし、机から様々な落書きが消えた事も無い。ただ幸人自身、それに苦痛を感じた事はない。また、イジメられていると言う感覚もない。何せ、幸人が力で訴えれば、その馬鹿野郎《いじめっ子》程度ならばどうとでも出来るのだから。

「お前の机、汚いんだよ！」

力が有り余っている馬鹿野郎、一般的にはガキ大将と呼ばれる、小学生にしてはガタイが良い少年が朝からうるさく絡んでくる。絡まれる事自体に苦痛を感じる幸人ではないが、毎度の事となるとストレスも溜まる。

「汚くしたのはお前だろ？」

幸人が興味なさそうに呟いた一言にガキ大将は驚いた表情を顔に浮かべるが、それはみるみるうちに怒りの表情へと変わる。

「はあく？ 俺がやったって証拠あるわけ？ 言いがかり付けてんじゃねえぞ！」

周りの迷惑も考えずに幸人の机を右足で思いっきり蹴り飛ばしながら、ガキ大将は幸人に向かってそう言った。

思いっきり蹴り飛ばした机が周りに恐怖を与えた事を感じ取ったのか、馬鹿なガキ大将の顔には優越感にも似た感情が浮かんでいた。自分が他者を圧倒してる事に浸っているのだろう。

けれど。

幸人はそんな矮小な感情に一喜一憂する同年代の子供程度に圧倒されるほど、小さくはなかった。

「うるさい」

幸人はそう低い声で言い放つと、蹴り飛ばされた机を元に戻す。バカなガキ大将はその一言で動けなくなった。

人間に僅かに残っている防衛本能によって、危機を察知したのだ

ろう。

そんなガキ大将の膠着はクラス担任の登場で解除された。

やはり世界は面白くない。

幸人は黒いランドセルを背負い、ため息を吐きながらいつも下校コースを歩いていった。

全く個性が無く、周りに流されるだけのクラスメイト。自分の力を過信して、小さな優越感に浸るバカなガキ大将。イジメられている生徒を知っていながら助けない、体面ばかり気にする教師。

全てが面白くない。

一体どうしたら、このつまらない世界を面白く出来るのだろうか。中学に入れば変わるのだろうか。

幸人はそう思い、直ぐに頭を振る。

中学に入った所で大して状況は変わらない。

子供なクラスメイトも、大人の卑怯さを持つ教師も、それこそどこに行こうと変わりはない。

「この世界はつまらないままで」

幸人はそう呟いて、下校コースの横を流れる濁った流れの速い川を見る。

一層のこと、自殺を試してみるのも一つの手か。
そんな事を考えた幸人は、土手を身軽に降って、流れの速い川の
近くまで来る。

「死ねば世界も少しは変わるか？」

「残念ながら、死んだ所で世界は変わりやしないさ」

幸人はいきなり返ってきた声に勢いよく後ろを振り向くが、そこ
には誰もいなかった。

「空耳か……」

「残念。空耳じゃないんだなあ……夢でもないがな」

「どこだ!？」

「どうだ少年？ 世界はなかなか面白いだろう？」

幸人はゆっくりとその声のした方を向く。そこには、真っ黒な服
の上に真っ黒なダボダボのコートを着て、同じく真っ黒なフードを
被った人型のモノが“川の上”に立っていた。

幸人は思わず周りを急いで見渡す。驚くべき事に川の流れが、い
や、そのほか全てのモノがその動きを、否、時間を止めていた。

その場で動くのは唯一、その黒い人型のモノと幸人だけだった。

幸人はその異常さに関わらず、意外なほど冷静にその原因である
う黒い人型のモノを注意深く観察していた。

先ほどの声は女性にしては低くすぎた為、多分性別があるならば
男であろうが、幸人はその黒い人型のモノから出る雰囲気、自分
と同じ人間のモノとは思えなかった。

「……人間か？」
「なかなか鋭いな。その質問には『昔は』と答えておこう」

幸人はそれを聞いて身構える。過酷な修行で身に付けた危機察知能力の鐘がさつきほどから鳴り続けているのである。

この『異形』は危険だと。

「ふむ。警戒を解けとは言わないが、会話はしてくれよ？その為になんぞこんな世界の果ての異国に来たのだから」

「……どう言う意味だ？オレに会いに来たのか？」

「半分正解だ。正確には、求めていた素質ある人間に『ピツタリ』だったのが君と言う事だ」

「怪しすぎる……」

幸人はゆっくり呼吸を整えながら、異形にそう返した。異形は楽しげな声で、時間の止まった川を歩いて幸人に近付いた。

「否定はしないさ。だが、このプレゼントは受け取ってくれ」

男はそう言うと、ダボダボのコートのポケットから黒い指輪を取り出して、幸人の手に握らせる。

「もう少しお喋りを楽しみたい所だが、どうやら時間らしい」

「どう言う意味だ？」

「そう言う意味さ。その指輪はエンシエント・レリック 古代の遺失物 って代物だ。そしてお前はその所有者に選ばれた。使い方は一緒に渡した紙に書いてある」

幸人は自分の手の中を見る。確かに黒い指輪と一緒に何度かに折られた白い紙が手の中にはあった。

「ちょっと待て！」

去ろうとする異形に向かって、幸人は声を掛ける。

「なんだ？」

「あなたは一体何者なんだ？」

異形は少し考えた風に首を捻ると、多分、笑いながら呟いた。

「お前の“味方”さ。あと、覚えとけ。人に世界を変える事は出来ないが、違う世界に行く事は出来る」

その声と共に幸人の前から異形は消え、止まっていた世界は動き出していた。

そして、この時から幸人の世界は確かに動き出し、面白くなり始めた。

家に帰った幸人は、自分の部屋で早速渡された黒い指輪と、説明書を見ていた。

「これは意志持つ指輪で、嵌めれば勝手に喋る。何だよ……説明になってねえよ」

黒い指輪をいじりながら、紙に書いてある文章を読んで幸人はた

め息を吐く。

渡された指輪は小さいが黒い宝石が付いており、シンプルながらなかなか良いデザインをしていた。

得体は知れない物ではあるが、幸人は取りあえず真つ黒な宝石が付いた黒い指輪を恐る恐る嵌めてみる。すると指輪の宝石部分が一度光って、どういう原理か分からないが喋り出した。

『主が私の所持者か？』

「うわっ！！ 本当に喋ったよ……」

『はじめましてと言っておこう。我が名は絶無。古き者達に造られた意志持つ魔具だ』

「言ってる事が全然分からないんだけど……」

『ここはガイアか？ ならば知らぬも当然』

一人と言っていていいか分からないが、自分だけ納得する絶無と言う指輪に困惑しつつ、しかし、と幸人は疑問を絶無にぶつける。

「オレが所持者？」

『如何にも、素質ある者でなければ、我を眠りから覚ます事は出来ない。故に今代のマスターは主だ。久我幸人』

「えっ！？ 名乗ったっけ？」

『私の個人情報だけ調べさせて貰った』

どうやらこの指輪には隠し事は出来ないらしい事が発覚し、幸人は何とも言えない非常に微妙な顔をする。

『では、契約と行こう。契約せねば、我はまた眠らなければならぬのでな』

「えっと、契約!？」

『頭に流れてくる言葉を言えば良い』

「ちよっ！ 心の準備が……！！」

『さあ行くぞ！』

絶無がそう言うと、幸人の体が光り始める。そして幸人は促されるままに、頭に流れ込んでくる契約の言葉を口にする。

『古より存在する太古の剣』

『神威の力を模した剣よ』

『我は自らの心の下に宣誓しよう』

『神威の力をこの手で扱う事を』

【問おう。名は？】

『久我幸人』

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。
変わるかもしれない。

主人公設定

久我幸人・ユキト・クガ・12歳〜15歳

日本の静岡県出身の少年。

久我家は古くから続く久我心明流と言う古武術を使う武芸者の家であり、幸人も幼い頃からこの武術を教え込まれた。

その為、かなり高い身体能力を誇り、近接戦闘能力ではずば抜けている。

世界はつまらないと思っており、学校では可もなく不可もない空気のようなであろうとしていたが、世界は面白いと感じるようになった。

魔力はあまり高くはないが、魔法の効率的運用とコントロールの良さ、更にトリガーワードのみの詠唱破棄の安定さから、高速戦闘を得意としている。

属性・風

武器

絶無

指輪型戦闘魔具。

謎の人物が幸人に渡したエンシエント・レリックで、人格を持つ。

その人格が認められた者しか使えない。幸人は人格をゼツと呼び、自分の良き友としている。

能力は魔法の吸収と放出であり、指輪に魔法を当てる事で発動する。

第一章 第一話「学園への招待状」(前書き)

とりあえず一話を投稿します。

駄文ですがお読み頂ければ幸いです！

第一章 第一話「学園への招待状」

世界間のボーダーライン

第一章「もう一つの世界」

第一話「学園への招待状」

日本のある町の朝、黒いジャージで川沿いの道を走る少年が居た。

短く刈り上げた黒髪に幾つもの汗の粒をまわりつかせながら、少年は黙々と走り、ふとした瞬間に止まり、かなりの高さがある土手を二度のジャンプで降りきる。

少年はそこで目を瞑り、精神を集中させると、祖父に連れられ、様々な場所で戦った人間達を思い浮かべる。

最初の敵は高名な実戦空手家。

少年は体を相手に向かって斜にすると、両手の指を軽く曲げ、左手を顎の先に、右手を腹の横にそっと構える。

左足には全体の三割ほどの体重を残し、残りは後ろ足に掛ける。

準備が整った所でイメージの実戦を始める。

空手家の左正拳突きを前に出した左手の手首の返しで自分の右側

に受け流し、鳩尾みそおちを守っていた右手で相手の顎を正拳で狙う。

顎への一撃は相手の右手でガードされるが、突きにいった勢いのままに、少年は左の前蹴りを相手の鳩尾に蹴り込む。

鳩尾を蹴られた為に一瞬起こった相手の硬直を少年は見逃さずに、右手を腰だめにし、顔をガードしている相手の右手を左手で払いのける。

鳩尾を蹴られ、浮いてしまっている相手の顎に向かって、足首の捻り、膝の内側への入れ込み、腰の回転、肩の入れ込み、肘の捻り、手首の押し込みを加えた、体全体を使った掌底を食らわせる。

技が完璧に決まったイメージを持ちつつ、止めに相手の腹に右前蹴りを入れて吹き飛ばす。

「久我心明流・螺旋」

少年はそう呟くと、次の相手をイメージする。

次の相手は祖父の知り合いの中国武術家の弟子で、後の先を得意とするかなりの使い手。

先程と同じように構えるが、今度はこちらから攻める。

後の先を得意とする相手に苦し紛れの攻撃を打つと、こちらに何倍にもなって返ってくる。その為、少年は自分から相手を崩しに行った。

だが、左右の突きのコンビネーションも、足を絡ませた上下のコンビネーションも、向こうはゆっくり動いているのに面白いように流され、捌かれる。

このまま攻めても埒があかないと判断した少年は、バックステッ

ブで一度相手から距離を取り、ミドルレンジからの蹴りによる攻撃を始める。

点の攻撃ならば捌かれるが、線の攻撃ならば捌かれる事はない。その少年の思惑通り、確かに捌かれる事はなかったが、左右の回し蹴りも、下段への前蹴りから中段への変則蹴りも今度は全てを避けられた。

攻勢を仕掛けていた少年の汗の量が一時を境にどつと増える。猛烈な攻勢は、終わった瞬間に圧倒的な劣勢へと変わる。

ゆったりとした動きで、間合いに入ってくる相手に主導権を握らせないように少年は攻撃するが、相手はその全てを後の先で返してくる為、結局主導権は握られたまま、先ほどから同じ事が繰り返される。

自分の間合いに入れないように放つ攻撃を上手く利用され、先程から何度も攻撃を受けている。

回し蹴りは回転して避けられ、回転した勢いで向こうは裏拳を放ってくる。

正拳突きを放てば、肘を決められかけ、慌てて引く羽目になる。

攻め切れない少年をよそに、相手はあくまで冷静にゆったりとした動きをしていた。

そんなジリ貧な状況に少年は舌打ちすると、一か八かで、距離を取って助走を付けた突進気味の右正拳突きを放つ。

しかし、相手は少年の単調で直線的な速い攻撃を意にも返さずに左に避け、少年の横腹へ攻撃を加える。

だが、少年は相手が左足で横腹を蹴りにくるのをは分かっていたかのように、右肩回りに回転して、相手に右の回し蹴りを食らわせる。

後の先の最大の利点は、相手が攻撃した瞬間、つまり、一番無防備な状態を攻撃出来る点にある。

あまりにもハイレベルな相手になれば、必ず単調な攻撃は返される。返されると分かっているならば、攻撃が分かっているならば、そこで後の先の利点は無くなる。

少年は後の先に対して後の先を仕掛けたのである。

右の回し蹴りを腹部に食らい、よろけた相手に向かって、好機とばかりに少年は追い討ちの回転軸をそのまま連続回し蹴りを繰り返す。

少年の右回し蹴りが相手の顎を跳ね上げ、そのままの回転で左後ろ回し蹴りが首をくの字に曲げる。

荒い息で着地した少年は、何とか自分がイメージした相手に勝利した事を確認して、呟く。

「久我心明流・駆旋」

少年“久我幸人”は、朝の稽古の締め括りであるイメージによる実戦を終了し、ここから一キロほどの家へ流しながら走り出した。

幸人はこの町の中学の三年である。

1月現在で、未だにどこの高校に行くか決めていない幸人は、担任の心配の種であった。

帰りのHRが終わり、担任に呼び止められた幸人はまたか、と思いつつ、担任の話を大人しく聞く。

「久我君。進路どうするの？」

「うん。適当に考えときます」

「その前も似たような事を言ったよ？ とりあえず、今の成績で行ける高校とかを書いておいたから、選んで置いてね！」

若くやる気のある女性の担任の熱意に押された訳ではないが、幸人は担任が置いていった紙を見る。

「……普通に無難な中堅校ばっかかよ」

あの担任教師は真面目で評判も良いのだが、イマイチ捻りを加えると言う事を知らないらしい。

もう目を通さないとは思いながらも、大人しく鞆にそれをしまい、幸人は帰り支度を始める。

だが、ビククリするぐらい空気の読めない男が居た。

「おい！ 久我。てめえなに帰ろうとしてんだよ！」

160後半の身長で細身な幸人と比べて、身長は10センチ程度の差なのに、横の差がかなりある男が幸人に近づいてくる。

「悪いかよ。菊池」

「悪いね。今日、お前は俺と一緒にゲーセンへ行くんだよ」

「お断り。何が楽しくてお前と遊びに行かなくちゃいけないんだ？」

幸人はそう言うと、鞆を持って教室を出ようとするが、腕を掴まれてそれは妨げられる。

菊池が嫌な笑顔で幸人の腕を掴んでいたのである。

「何だよ？」

「じゃあ財布だけ置いてけ」

「意味が分からないね。そんなに前のお前は貧乏だったか？」

「なにい？」

菊池と呼ばれた男は明らかに怒気を孕んだ声で幸人を脅してくるが、武道、武術家同士の戦いに慣れている幸人にとって、それは子供が睨んでくると大差は無かった。

「手を放せよ」

底冷えする声で逆に菊池を脅す。

菊池はとっさに手を放して、数歩後ろへ後ずさる。

小物をあしらった幸人は、恐怖を顔に張り付けた菊池に全く興味を示さずに教室を出て行った。

幸人が家に帰ると、郵便ポストに一枚の封筒が幸人宛てに届いていた。

その封筒が少し気になった幸人は部屋に戻って開ける事にした。

「ただいま」

『帰ったか、幸人。今日の学校はどうであった？』

「いつも通り。変わり映えがしなくて嫌になるよ」

『人はその変わらぬ日常を平穏と呼ぶ』

「良いこと言ってるのは分かるけど、オレにとって、学校は平穏とは言い難いんだよ。あんまり楽しくないしさ」

机に置いてある黒い指輪“絶無”に幸人はそう言い返す。

四年前に起こったあの不思議な出来事後、幸人は絶無から様々な異世界の知識を聞いた。

異世界があるだけでもかなりドキドキではあったが、絶無が存在した世界は更に魔法と言う超技術が発達しており、色々な世界と交流を持っているらしい。

刺激を求めている幸人にはとても魅力的な話だった。

その絶無が居た異世界に行き、魔法を使う事が、幸人の当面の目標であった。

「あゝ進路どうしようかなあ……」

『む！ 幸人……その紙から魔力を感じるぞ』

「えっ！？ マジで!？」

『しかもかなり大きい……用心して開ける』

「あ、ああ」

幸人は緊張しながら、震える手で封を開け、中に入っていた一枚の手紙を取り出す。

「これは……？」

『驚いた……アルカーディアからの入学招待状だ……』

「アルカーディア？ 入学招待状？」

絶無の言葉に幸人は疑問符を頭の上に浮かべる。

『ああ、前にこの世界はガイア、我が居た所はエル・ドラドと呼ばれていると言ったな？』

「ああ」

『アルカーディアとは、エル・ドラドでは有名な魔法学園の名前だ。入学招待状とは、各世界へ居る魔法の素養がある人間を招く為のモノで、下に書いてある魔法を唱えれば、アルカーディアの指定された場所に飛ぶ』

「えっ！？ ってことは！！」

『念願の異世界へ行ける上に魔法が学べるぞ。だが、普通はこんな交流の無い世界の人間に招待状など送らない筈なのだが……』

「そんな事はどうでも良いから！！ 行こうぜ、異世界！」

幸人は絶無を右の人差し指に嵌めると、手紙の一番最後に書いてある一文を読む。

「当方への興味がある場合は、下の呪文を唱えて下さい……え」と

【アン・シール】

幸人が手紙に書かれていた呪文を唱えた瞬間、幸人は光に包まれ、部屋から消えてしまった。

第二話（アルカーディア魔法学園）

世界間のボーダーライン

第一章（もう一つの世界）

第二話（アルカーディア魔法学園）

光に包まれ、部屋から消えた幸人は石造りの巨大な空間に来ていた。

光が差している訳でも、ライトがある訳でもないのに、優しい光に包まれていたその幻想的な空間に幸人は魅入られていた。

「わあ〜お。すごいな。そう言えば、ゼツ、どうやってここに来たんだ？ オレは魔法なんて使えないぞ？」

幸人は腕を組んで首を捻る。

そんな幸人に絶無は幸人が持っていた手紙について説明する。

『その手紙に転送の魔法が封印されていたのだ。幸人、主のような魔力を持つ人間が封印解除のトリガーワードを呟けば、こちらに来れるようになる』

「それってつまり、誰かが手紙に込めた魔法を使わせてもらったってことか？」

『当たらずも遠からず。魔力自体は主のじゃから、主が魔法を使っただのと大して意味に変わりはない。まあそんな事より、向こうから

声が聞こえる。行ってみる』

幸人は絶無の言葉に頷くと、多少名残惜しそうにしながらも、強い光が漏れ出る、この空間に存在する唯一の出入り口へ向かって歩き出す。

幻想的な空間を抜けると、多くの年若い、幸人と同世代程度の少年、少女が先ほどの空間よりも更に巨大なフロアにたむろしていた。

「これは……」

『主と同じ他世界からの入学予定者だろう。しかし、これは……わざわざ他世界から招待するだけあって、皆、様々な素養を持っている』

「素養？ 例えば？」

幸人は壁に寄りかかり、腕を組んで絶無を顔の近くまで持つてくると、周囲を見渡しながら小さな声で喋る。絶無が声を小さくしていたからだ。

『あの赤毛の少年。膨大な魔力を持つておる。あと、あの栗毛の少女はマルチ・シンクが得意なようだ。今も会話をしながら、もう一人、別の人間と念話で喋っている』

「マルチ・シンク……つまり、お喋りしながら人を毒づくのが得意な奴って事か」

『凄まじく偏った考えだな……まあ別々に事を考え、行う事が出来る人間の事だ。あと、あの黒みがかった金髪の少年は、この場に居る誰よりも魔法を扱う術を知っている。あの年で、しかも学園入学前の時点で既に魔法を手足としている事もだが、何より、あれは努力の賜物と言う所が驚愕だ』

絶無はそう言うと、沈黙する。

幸人は絶無がそこまでベタ誉めする少年に興味を持ち、キョロキョロと辺りを見渡して探した。

その少年は直ぐに見つかった。身長は幸人より少し小さく、瞳は深い青色だった。だが、少年を直ぐに見つけられたのは別にあつた。その少年の服装が全身真っ黒であつたからだ。

「随分とまあ……黒が好きなんだな」

『そう言う訳では無いと思うが……どうした幸人？』

「友達が必要だろ？」

幸人はその少年の近くまで行き、少年の肩に手を置いて一言呟く。

「やあ、真つ黒黒助君」

「……君は僕に喧嘩を売ってるのか？」

少年の肩に手を置いた幸人は、ヘラヘラした笑いを顔に浮かべながら、少年に自己紹介をする。

「オレは久我幸人。全く魔法が関係無い所から来たんでね。友達を強制募集中だ」

「何で友達の募集が強制なんだ……まあいい、僕はカイル・グランディオ。とりあえずこの世界出身だが、色々あつて招待枠に入ってる」

「へへまあ、友達成立を記念してちょっとしたお願いを聞いてくれる。こっちの質問に答える」

「それはお願いでは無く脅しだ」

「何を言う、過激なお願いだ」

「ソフトな脅しと変わりはない」

『いつまで漫才をやってるつもりだ？ 質問するなら早くしろ』

永遠に続きそうな幸人とカイルのやり取りに、辟易しながら絶無が割り込む。

「インテリジェンス系の魔具か……」

「インテリ……何？」

「インテリ、ジェンスだ。自立思考型の事さ。珍しいんだが……君はどこでそれを……」

カイルが珍しそうに絶無を覗き込みながら言うが、そんなカイルを気にせず幸人は絶無に言う。

「ゼツ。実はお前は凄かったんだなあ」

『何度も言っているだろう。我は凄いと』

「人の話しを聞け！」

カイルのツツコミを受けて、幸人は肩を竦めて質問に答える。

「話しは聞いているよ。右から左に流してるだけで」

「聞いてないじゃないか……」

『我の入手方法についてだ』

両肩を落としてうなだれるカイルを哀れんだのか、絶無が助け舟を出す。

幸人はそんなカイルの様子を一通り笑ったあとに、真面目な顔で言う。

「貰った」

「嘘をつけ」

「事実だぜ？」

「じゃあ誰からだ？」

「知らない人」

「知らない人からモノを貰っちゃいけないと教わらなかつたのか…

…？」

「勝手に押し付けて、指輪を嵌めれば分かるって言われたから嵌めたら契約する事になった」

そんな事を平然と言う幸人のいい加減さに、カイルは軽く引きながら顔をひきつらせた。

それから10分ほど幸人は真面目なカイルに笑いながら冗談を振りつつ、楽しく話しをしていた。

「へーじゃあカイルは5歳から魔法を習っていたんだなあ」

「母や父は優秀な魔導士だったからな」

「カイルの魔法の力は才能じゃなくて努力だってゼツが言ってたけど、本当？」

「……努力はしたよ。僕は才能がなかつたからね」

「努力出来るのも才能だと思うけどねえ。まあこれからの新しい生活に強力な助っ人が居るってのは心強いから良いけどな」

頼る気満々な幸人の態度に苦笑をもらしたカイルだが、直ぐに顔つきを真剣なモノへと変える。

「よつやくのご登場？」

「ああ、アルカーディア魔法学園の教頭“クレタ・ドゥーエス”先生だ」

カイルの視線の先に存在する白髪の初老の女を見て、幸人は背筋を凍らせる。

「ありやマズいな……次元が違う」

『あの女の装飾具……全て自らの魔力を抑えるものだ』

「マジか……抑えてあれじゃあ本気はどんなんだよ……」

ドゥーエスはホールの少し高い位置から、ホールに集まった招待枠の生徒達を見つめ、あまり大きくはないが、良く通る声で言う。

「各世界から来られた皆さん……初めまして、学園教頭のクレタ・ドゥーエスです。遙々世界を越えて、アルカーディアへようこそ」

ドゥーエスはそこで言葉を切ると、後ろに控えていた男に場所を譲る。

「第一学年、つまり君達の学年の主任になる予定の“デビッド・ホーキンス”だ。君達にはこれから魔法についての説明や、教師達との面接、並びに魔法の検査を行ってもらおう。魔法を使用出来ない者もいると思う。だが、心配はしなくていい。君達は当方が資質ありと判断した人間達だ。魔法を知らなくても直ぐにモノにできる」

そう断言し、こちらの優秀さを力説するホーキンスを見て、幸人は周りにバレないように下を向いて小さくため息を吐いた。

だが、そんな様子を、最も見られては行けない人間に見られていた。

『幸人。あの女に見られているぞ』

絶無にそう注意され、幸人は下を向いていた顔を急いで上げる。

だが、それが良くなかった。
顔を上げた瞬間、ホーキンスの斜め後ろにいたドゥーエスとバツチリ目を合わせてしまった。

嫌な汗が体中から吹き出るのを感じつつ、幸人は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなっていた。

かなり長い時間が経ったかも知れないし、意外と短かったかも知れない。

幸人が人の心の奥を見透かすようなドゥーエスの目から解放されたのは、ホーキンスの話しが終わり、皆が一斉に動き出してからだった。

「ユキト？ どうしたんだ。固まって」

「蛇に睨まれてた」

「??？」

声を掛けたカイルは、幸人の言葉が理解出来ずに、頭の上に疑問符を幾つもの浮かばせていた。

移動の最中、幸人はドゥーエスと目があってしまった、話を全く聞いていなかった為、カイルに頼んで手短かに話してもらっていた。

「今から資質を調べるんだ。どの程度魔力があるか、魔法への順応力、想像力、そして、魔法への適応力なんかをね」

「どうやって調べるんだ？」

「さあ、普通は専門の施設に行くんだが、ここではどうやるかなんて分からない」

「確かに……」

幸人は気だるい頭を動かして、何とかこれからの試験紛いな事に挑む準備をしようとするが、先ほどのドゥーエスの圧迫感に耐える際に精神力を大量に消耗した為、とても集中出来る状態ではなかった。

「ヤバい。頭が働かない」

『安心しろ。頭が働こうが働かまいが、主の結果は最下位だ』

「才能が無いとは思うけど、やる前からそれは酷くないか？」

『ここに居る奴らは言うならばエリート。わざわざ世界間を越えて引き抜かれて来た人間達だ。ガイアの人間にしては魔力がある主も、流石にこの場では劣等生になり下がる』

「それが世界間の違いと言うか、ボーダーラインか……まあやる事は変わらないけどな」

前向きに、ポジティブにと心を入れ替えた幸人は、隣で難しそうなお顔をしているカイルに声を掛ける。

「どうしたカイル？腹でも痛いのか？」

「何で腹痛が出てきたのか分からないが、君がここに来た理由を考えていた」

「オレが来た理由？」

「ああ、言っただけは悪いが、交流が無い世界の人間を引き抜くからには、それ相応のメリットが必要だ。君にはそのメリットが無い。君は確かにそこそこ魔力もあるし、適応力も高そうだが、わざわざ交流の無い世界から引き抜くほどじゃない」

カイルの言葉に幸人は頭を捻る。

確かに、幸人は魔法の才能と呼べるモノは無く、地球の人間にしては魔力はあるが、別世界では並程度である。

それは魔法と関係の無い世界の住人と関係のある世界の住人との

ボーダーライン。まさに幸人はそのボーダーラインの真ん中に居るのである。

そんな半端な幸人がアルカーディアに呼ばれた理由。

「ゼツの所有者だったからじゃないかな？」

「魔具の？」

「うん。ゼツつてオレでも分かるくらい凄いから、ゼツも含めて、久我幸人を呼んだんじゃないかな？」

『それは無くも無い話だが……言っていて悲しくならないか？』

「うん。すつごく……」

隣でズーンと落ち込む幸人を尻目に、カイルは、幸人の推測でとりあえず納得する事にした。

例えばどんな理由があるかと、横に居る久我幸人が気の良い人間で、自分の友人になった少年に変わりはないのだから。

どう言う原理か分からないが、大きな部屋でモニターのようなモノを使って魔法について簡単な説明を受けた後、幸人達、招待枠の生徒は様々な機械がある場所に連れて来られていた。

素質調査と呼ばれる事は、幸人が想像していた試験のようなモノでは無く、身体測定のようなモノだったのである。

「これって良いのか？ 悪いのか？」

様々な検査を受け終わった幸人は白い服を着た女性に手渡された紙に書かれた様々な数値を見ながら、首を捻ってそう呟いた。

「ユキトも終わったのか？」

あと残っているのは教師との面接の為、会場である少し離れた部屋まで歩いていると、手に紙を持ったカイルが近寄ってくる。

「ああ。そう言えばカイル……コレってどうなんだ？」

「うん？ああ、結果か……ほくユキト、君は総合B評価の判定をもらってる」

「見れば分かるって……あれ？　そう言えば言葉とか文字が何で通じるんだ？」

今更ながらに重大な問題に気付いた幸人は、カイルに聞く。

「ああ、言葉が通じるのは、この学園全体に言葉を翻訳する魔法が掛かっているから、文字が読めるのは、紙に持ち手の文字へ変換する魔法が掛かっているからだ」

「じゃあ、それがなかったら……」

「僕は両方使えるから問題ないが、君は僕が合わせない限り、会話が成立しない」

「……はは、魔法学園は伊達じゃないって事か……」

衝撃的な事実にしたがった笑い声をあげる幸人を気にせず、カイルは紙について説明し始める。

「さてと……まず、これは様々な資質をおよそで数値化したモノなんだ。鵜呑みにするのはどうかとは思っけど、参考くらいにはなる」

幸人はそれを聞いて、自分の紙に書いてある様々な数値を見る。

魔力数値

魔力保有総量・52万・評価B
瞬間最大放出量・5万・評価C
魔力回復量・毎時・1万3千・評価B
魔力維持時間・20秒・評価B
魔力反応速度・2秒・評価A

魔法適性

属性・風・

魔力光・緑

魔法性質・鋭く脆い

技能適性

マルチ・シンク・2・評価C

圧縮系・評価A

縮小系・評価C+

収束系・評価B+

放出系・評価C

固定系・評価C

制御系・評価B+

評価の下に注意書きや特性などがズラリと機械的な字で書かれているが、まず幸人が最初に気になった事は。

「Cが多いな……」

「その分、AやB+がある。オールBよりは特化しているモノがあった方が僕は良いと思うけれど」

「ちなみにカイルは総合で何？」

「AAA+」

「グレよつかなあ〜」

「僕と君とでは年季が違うんだ。大体、こんなモノの評価は大して役に立たない事をみんな知っている」

「何で？」

「どれだけ数値が高かろうが、使えなければ意味は無い。魔法はどれだけ精密に早く行えるか……僕は自分の師匠にそう教わった」

その言葉を聞いて幸人は、昔、稽古中に祖父に教わった事を思い出した。

『例え力が強かろうと技が速かろうと、強いとは言えない。強い奴の条件は、大事な時にどれだけ正確に自分の強さを出せるか、だ』

「自分の強さか……」

「うん？」

「いや、何でもないさ。サッサと面接にいこうぜ」

「分かったから引つ張るな！」

祖父の言葉を思い出した幸人は気持ちを入れ替えて、カイルと共に教師が待つ筈の面接部屋に向かった。

絶対絶命と言う言葉を使つなら、正に今の幸人に使うべきであろう。

ヘラヘラ笑いで入った面接部屋には、あろうことか先ほど幸人の

ことを、人の全てを見透かしたような目で見て来た教頭のドゥーエスが居た。

あんまりなサプライズに、流石に幸人のへらへら笑いもすぐさま凍り付いた。

「座りなさい」

「は、はい！」

幸人はドゥーエスに促され、慌ててドゥーエスが使っている机の正面に用意された、試験者用の簡素な椅子にすぐさま座る。

「今から3つの質問をします。よく考えて答えなさい」

「は、はあ……」

ドゥーエスはそう言うと、直ぐに視線を机に落とし、こちらを見ようともせずに質問してくる。

「一つ目、あなたがこの学園に来たいと思った理由は？」

「え〜と、つまらない自分の周りを面白くしようと思ったから……です」

「二つ目、魔法を使えるようになったら何がしたいかしら？」

「え〜と、こっちに来た時に使った世界を渡る魔法みたいな事をしたいです」

良く考えるようにと言われたが、幸人自身が明確な答えを持っている質問の為、トントン拍子で答えてしまう。

「三つ目……これは良く考えなさい。この質問で、あなたはこの学園に入学出来るでしょうか決まります」

「はい……」

未だにこちらを見ようとしもないドゥーエスの態度が気になりながらも、椅子の上で姿勢を正して、幸人は最後の質問に備える。

「それでは最後の質問。あなたの手にナイフが握られているとします。その手にあるナイフと魔法は何が違いますか？」

「え〜と、最後の質問ですよね？」

「ええ、幾らでも考えて結構ですよ」

「いや、大丈夫です。オレの答えは“何も変わらない”です」

その答えを幸人が口にした瞬間、ドゥーエスがゆっくりと顔上げて、先ほどと同じように、人の全てを見透かしたような目を幸人に向ける。

「理由を……聞いても良いかしら？」

「はい。ナイフも魔法も使い方しだいで、凶器にも便利な道具にもなります。世の中にあるモノって例外を除いて、使い方しだいでいいじゃないですか？」

ドゥーエスはそんな幸人の答えを聞くと、僅かに眉を動かす。

「そうですね。では退出して結構です」

「あの〜質問して良いですか？」

「手短かに」

「はい……え〜と、何でオレを呼んだんですか？」

「……詳しく話すと長くなります。ただ、ある著名な方があなたを推薦したんです」

「著名な方？」

自分を推薦してくれるような知り合いどころか、こちらの世界に知っている人間自体が居ない為、幸人は思わず聞き返す。

「質問には答えました。退出しなさい」

「あ、はい」

ドゥーエスにそう言われた幸人はしぶしぶながら、部屋から退出する。

そんな幸人が部屋から退出したのを見届けたドゥーエスは、椅子の背もたれに体重を掛け、ゆっくり息を吐く。

「全く……凄いのか、そうでないのか、判断に困る子ね」

ドゥーエスは机に置いてある二枚の紙を見る。

一枚には幸人の回答を、もう一枚は、ある人物の回答を書いている。

「彼が言った通り、一致したわね……」

二枚の紙を見比べながら、ドゥーエスは久我幸人と書かれた重要書類の性格判定の欄に、良好と記入した。

第三話「入学前」

第一章「もう一つの世界」

第三話「入学前」

春。3月31日。

遠いイギリスへの留学が決まっていた幸人は大きな荷物を持って、祖父と挨拶を交わしていた。

「それじゃあ、行ってくるよ」

「気をつける。鍛錬は欠かさずにな」

「うん。じゃあね」

淡泊な挨拶を交わし、幸人は荷物が詰まった鞆をスポーツバッグを右肩に担ぎ、小さな小物などが入ったスーツケースを右手で引っぱり、バスに乗る。

この小さな町ともお別れかと思うと、何故だが様々な感情が。

「全くこみ上げて来ないな……せいぜい爺ちゃんと別れるのが惜しいくらいか？」 あっけらかんとあんまりな事を言う幸人は次のバス停で降りると、駅に向かって歩く素振りを見せつつ、人の気配が周りに無くなったのを見計らい、森の中に入る。

「やっと行ける……」

『世界間移動も楽では無いな』

「本当だよ。さて、行きますか」

幸人は小さな紙を取り出して、書かれている魔法を呟く。

【アン・シール】

光に包まれて、幸人は荷物を持ってどこかへと消えた。

幸人は自分の荷物がしつかりある事を確認すると、場所の確認に移る。

置いてある物から推察するに、アルカーディアの寮の自室である事が伺える。

「よし、成功！」

『失敗する要素があつたか……？』

「ノリだよノリ」

幸人はそう言うと、各部屋に配置されているモニター通信付きの電話で、カイルに連絡をとる。

「もしもし」

『何だ？ もう来てたのか？』

「ああ、イギリスへ留学してくるって言って出て来た」

『イギリスがどこだか知らないが、ロクな嘘じゃない事は分かつたよ』

モニター越しに呆れるカイルを気にせず、幸人はカイルを遊びに誘う。

「ちよつと外に出ようぜ」

『街の見学も兼ねてか……よし、行こう』

「オーケー、そう来なくっちゃ！ じゃあ15分後にロビーでな」
『分かった』

幸人は電話を切り、着替え始める。

幸い、言葉や文字は違っても、服装自体は大した差は無く、向こうで使っていた服はそのまま使える。文字が多すぎる服は少し目立つが、日本で英語の服を着るくらいのレベルな為、大した問題にはならない。

幸人は持つて来た服の中から、黒のVネックとGパンを引っ張り出して着ると、肌寒さを感じた為、赤と黒のブロックチェックのネルシャツを上から着る。

荷物はあまり持つて行つてもしょうがない為、財布をGパンの後ろのポケットへ入れ、右手を顔の近くまで持つて来ると絶無に問い掛ける。

「ゼツ。忘れ物は？」

『MPTは持ったか？』

「忘れてた」

幸人は魔法粒子端末へ Magic Particle Termi
nal 通称“MPT”をGパンのポケットへ入れ、忘れ物が無
いかを再度チェックし、部屋を出る。

幸人が持っているMPTは、アルカーディアの生徒に支給された

超高性能なMPTで、魔法を記録、分析する機能を持ち、しかもロブ(魔力生成服)を記録しておく機能もあり、一々魔力から構成しなくても良いと言う素晴らしい機能があった。

幸人はそんなMPTをいじりながら、常に魔法陣が浮かび上がっているワープポイントへ向かい、ホールワープで一階のロビーまで向かう。

「便利なんだけど、行き先を考えないと行けないのはどうにも面倒なんだよな」

『魔導士は少なくも2つの物事を考える事が出来るから、頭でスイッチを押すワープは便利なのだろう』

「オレはマルチ・シンクは苦手なんだ」

幸人は絶無にそう言うと、ロビーを見る。

ロビーには予想通りというか、15分後と言ったのに5分前に到着している真面目な友人が幸人を待っていた。

「待たせたな」

「いや、2分前に来たばかりだ」

「嫌みなのか……いや、悪意はこもってない。素か」

「??」

そんな軽口を叩きつつ、幸人とカイルは寮を出る。

「それにしても……寮ってかホテルだな」

「学園都市アルカーディアの“ホテル”だからな」

「なに？」

「いや、だから、ホテルだぞ？　ここ」

「寮じゃないのか？」

「寮は別にある。ここは寮分けが住むまでの仮住まいだよ」
「なんと……！！……じゃあ寮はどこにあるんだ？」

幸人は寮だと思っていた場所がホテルと発覚し、意気消沈して肩を落としながらも今、沸いた疑問をカイルに投げつける。

「北に第一寮。東に第二寮。南に第三寮。西に第四寮。順番は余り関係ないさ。それぞれ霊獣を寮の旗に掲げている」

「旗って……寮なのに旗があるのか？」

「寮同士の競い合いが激しいんだ。夏に行われる寮対抗の体育祭は……凄いらしい」

「今のタメでヤバいって事は理解したよ……で？ どうやって決めてるんだ？」

「僕に聞くな。ただ、特殊ではあるらしい」

カイルの曖昧な情報に、幸人は思わず空を仰ぐ。

最悪の場合、全く誰も知らない寮で三年間を過ごす羽目になる。

「カイル。何とかオレと一緒に寮になつてくれ！」

「どうして僕がお前に合わせること前提なんだ……」

幸人の他力本願な申し出にカイルは肩を落としてため息を吐いた。
主に、この少年と三年間友達でいられるのが心配だが。

ホテルを出た二人は学園都市と呼ばれるアルカーディアの名物ス

ポットを歩き回っていた。

「うおっ！ 杖が売ってるぞ！ 杖が！」

「お前の魔具と一緒にだ。形状が杖で、魔法の詠唱を簡略化する特性があるけど、基本的には魔導士の補助道具と認識しておけば間違いはない」

「なあ……補助道具なのに何で剣の形をしてるんだ？」

「魔導士は職場によっては凶暴な魔法生物と交戦したり、犯罪者と戦ったりする。そんな魔導士たちは自分なりの戦闘スタイルを持っていて、強化魔法で接近戦って人間も結構いるんだよ」

「なんてアグレッシブな魔法使いだ……」

カイルから明かされた驚愕の事実には、幸人の中の魔法使い像が脆くも崩れ去っていく。

幻想を打ち碎かれ、ショックを受けている幸人を呆れ混じりに見ながら、カイルは一つのシヨップを指差して言う。

「お前のローブを作りに行かないか？」

「ローブって何か魔力で作る服だろ？ 指定の型じゃダメなのか？」

「指定の型を見たのか？」

「いや、えっ？ みんな指定のまんまじゃないのか？」

「指定の型は基本的に誰でも使えるようになってる反面、ユキトのような特化型には対応してないんだ」

「え〜と、つまり？」

「ローブは自分でデザインし、魔力の配分やら何やらを決めた方がいいってことさ」

カイルにそう言われ、幸人は大通りの向かい側にある、先ほどカイルが指差したローブ屋へ入る。

店は表で見た時は小さいと思ったが、中はなかなか広く、様々なデザインサンプルが並べられていた。

「いらっしやーい。どういったご用件かしら？」

「ローブを作りたいんですけど」

幸人が物珍しそうに店の中を見渡していると、カイルがさっさと女性の店員に用件を伝える。

「あんまりキヨロキヨロするな」

「いや、でもさあ」

幸人は店の中に並ぶ様々なデザインを見て、顔をあっちにやり、こっちにやりたりと大忙しであった。

子供のような幸人のため息を吐きつつ、よく考えれば、子供の頃に初めてローブ屋に入った時は自分も似たようなモノだったと思出し、カイルは急に恥ずかしくなった。

「ご注文はどうなさいますか？」

「あゝ、MPTに彼の適性が記録されてるので、機能はそれに合わせて最適化を、デザインは、色はどうする？」

「黒一色だとカイルと被るしなあ」

初めてカイルを見た際の真っ黒黒助ぶりを思い出し、自分には一色は無理だと幸人は判断した。

「白を入れる……かな。出来るだけ動きやすい格好がいいな……え」と、黒のTシャツと黒のパンツ。白のロングジャケットを長さは膝裏。で、チャック式で、お腹の辺りから止められるようにして下

さい。細部にラインを入れたいんですけど……」

「かしこまりました。直ぐに用意しますので、細部の調整はセットする際に、イメージをMPTが読み取り行いますので、イメージをしっかりとセットしてください」

「あ、はい」

幸人は直ぐに出来ると思っていなかった為、多少驚きながら、店員の作業を見ていた。

店員の女性は幸人からMPTを受け取ると、PCのような機械にMPTを繋ぎ、色々と何かをうち込んでいく。

「はい。終わりました」

五分も待たずに返ってきたMPTを見て、幸人は本当に注文通りになってるのか不安になりつつ、店員に聞いてみた。

「もう大丈夫ですか？」

「はい。とりあえずシューズなどは今履いてらっしゃるモノを写し取ります。ご希望がありましたらお伝え下さい。あと、音声入力式ですので、MPTに“ローブセット”と声をお掛け下さい」

笑顔で言う女性の店員のその笑顔に不安になりつつ、ゴーサインが出た為、幸人は取りあえずMPTにローブ生成の合図を告げる。

「ローブ・セット」

【ローブ・アップ】

幸人の声を受け取ったMPTは、一瞬、幸人の周りに光を発せさせると、先ほどの注文通りの服を幸人に身に付けさせた。

「こりゃあまた……」
「似合ってるじゃないか」

黒パンツに黒いシャツの上から、細部の黒いラインと袖の黒以外は白のロングジャケットが身に付けられた。

ロングジャケットは下腹部辺りからチャックで上は閉じられ、下は左右に流れ、膝裏まで伸びている。

「デザインはイメージ通り……性能は？」

「お客様の得意な特性、圧縮、収束、制御に支障をきたさないように、周囲への魔力干渉は皆無です。その為、ロープの強度は、御自身が注がれる魔力に左右されますので、ご注意ください」

「はい。後は？」

「属性が風の為、空気抵抗などを考慮した作りです。強化などによる急激な加速や圧力にも耐えられ、速度も結構変わると思います。

ロープを解除する際は、ロープ・リリースと言って下さい」

「了解。ロープ・リリース」

【ロープ・アウト】

幸人の言葉に伝えて、光の後に幸人の身を包んでいたロープは消え、幸人は普段着に戻った。

ロープに満足した幸人は店員にお礼と代金へ招待枠の特別金を払い、カイルと共に店を出た。

「いや〜いい買い物だったあ」

「僕の助言を聞いて良かっただろうか？」

両手を上に上げ、体を伸ばしながら、満面の笑みで言う幸人の横

で、カイルが軽く笑いながらそう呟いた。

「全くだ。サンキューな」

「気にするな。さてと、そろそろ夕暮れ時だ。帰るとするか」

「ああ、そうするか」

2人は笑い合いながら、アルカーディアの学園都市のメインストリートを歩いた。

第四話「入学初日」

第一章「もう一つの世界」

第四話「入学初日」

アルカーディアの入学式は、基本的に普通の学校と変わらないらしい。

アルカーディアの制服の“一つ”である茶色のブレザーと白のシャツを着込み、ブレザーと同色のズボンを履き、エンジのネクタイを締めた幸人は、そんな事を思いつつ、周りを軽く見渡して、ため息を吐いた。新生が八八四人、更にざっと見て在校生側も各学年一年生に負けないくらい多い。その人数を入れても尚、余りある大ホールの広さにも驚愕しつつ、ここまで人が多いと気が滅入ると、幸人は心の中で呟いた。

また、この学校の個性的な面は人数や部屋だけでは留まらず、制服にも表れていた。

アルカーディアの制服の色は選択可能で男子の場合、上はブレザーで一三色からの選択で、下はズボンで同じく一三色からの選択、ネクタイは自由といったモノだった。

幸人の横に座るカイルは案の定と言うか、予想通りと言うか、上下黒を選択し、中には白のシャツを着込み、紺のネクタイをしている。

基本的には全てに合うように作ってあるのか、似合ってはいるが、第一印象が決まってしまうようで幸人は遠慮したいと思った組み合わせである。

他にも様々な組み合わせがあるが、皆、着られてる感が否めない。

それを考えれば、着こなしているカイルはすごいのだろうか和幸福は一人苦笑する。

一方、男子が一三色に対して女子はブレザー、プリーツスカート
の組み合わせで上下とも九色からの選択で、リボンも自由であった。
辺りを見渡すと、着こなしている子もいれば、まだ着られてる子
も居る。こちら辺りは成長が早い女子とは言え、男子と変わらないら
しい。

周りをそんな風に観察していた幸人は在校生挨拶の所で新入生た
ちのざわめきを聞くと、聞き流していた話を聞く為に正面を見る。

「……うわぁ〜綺麗な人だなあ」

「見惚れるのは勝手だが、彼女は高名な魔導士の一族で、本人もと
んでもない魔力の持ち主だ」

「魔力があるうと無かろうと、美人は美人だろ？」

「お前の考え方は凄まじく偏ってるな……」

何故カイルに呆れられたのか分からず、幸人は疑問符を浮かべな
がら首を捻りつつ、前に立つ少女へ視線を移す。

肩に掛かる程度の金髪に透き通るような赤い目を持つ少女は、白
いブレザー、赤いプリーツスカートに赤いリボンと、かなり定番な
組み合わせの制服をしっかりと着こなして、柔らかく笑いながら喋
り始める。

「様々な思いを持って、この学園へやってきた皆さん。初めまして。
私は今代の生徒会長を務める“クレア・ハーヴェイ”です。私たち、
アルカーディアは皆さんを歓迎致します」

幸人は最後に新入生に微笑んだクレアを見て、カイルだけに分かるように呟いた。

「あゝありゃ無理だ」

「ん？」

「笑い方を知ってる。爺さんに鍛えられたから、そういうのが分かっちゃうんだよなあ」

酷く残念そうに呟く幸人に対して、カイルは少し驚いたような顔で言う。

「何だ。紹介しようと思ったのに、もう本質に気付いたのか？」

「知り合いか？」

「幼なじみだ」

「……マジか？」

「マジだ」

「大変だっただろう？」

「……良く分かるな」

「分かるよ。あの人は間違い無く、人を振り回す人だ」

出来る限り関わらない方が穏やかな学園生活には良いと判断した幸人は、サツサとこの話題を終わらせる。

その後、教師陣の紹介などがあつた後、新入生たちには緊張の間である寮分けが行われる事が告げられた。

「どうやって決めんのかなあ？」

「さあ？ 僕はどこでも構わないさ」

「冷めてるなあゝそう言えば、霊獣を旗に掲げてるんだっけ？」

「ああ、第一寮はユニコーン、第二寮はロン 龍、第三龍はフェ

ニックス、第四寮はグリフォンを旗に掲げてるし、制服に取り付ける寮章にも小さく彫られている」

「……どれも霊獣だけあって、まともな動物は居ないな」

「まともじゃないから霊獣なんだ」

「違うない」

カイルの言葉に笑いながら同意して、話しを続けようとした幸人は一瞬、今まで感じた事が無いほどの圧力を感じて、真剣な顔で正面を見た。

幸人が見た正面には一人の黒い長衣に身を包んだ長身な老人が立っていた。

「アルカーディアの校長、稀代の魔導士“セオドル・クリフォード”」

カイルの稀代の魔導士という言葉に幸人は納得する。何せ、あのドゥーエス以上の存在感をあの老人は持っているのだから。

だがクリフォードはそんな圧力を一瞬で霧散させると、先ほどまでの圧力を感じさせない好々爺ぜんとした笑みを浮かべつつ話し始める。

「さてえー、皆も知ってる通り、この学園には昔から四つの寮があり、必ず生徒はそこに属する事になっておる。今からその寮分けを行うのじゃが、大した事はない」

クリフォードは一旦、言葉を切り、両手を二回叩く。

すると、新入生一人一人の前に、小さな黒い穴が生まれる。

「その穴に手を入れ、中から寮章を引き抜けば良い。その寮章の寮が、皆の寮じゃ。さあ選ぶが良い！」

幸人はクリフォードの言葉を聞いて、目の前に存在する自分の顔程度の黒い穴をマジマジと見つっ、横のカイルに聞く。

「どこが良いって候補は？」

「そうだな。しいて言うなら」

「「第二寮」」

二人は意見が一致した事に苦笑をもらすと、恐る恐る黒い穴の中へ手を入れる。

幸人は穴の中に入れた左手を動かすが、全く寮章らしくモノは見当たらない。

周りの生徒もそうらしく、皆、慌てた表情を浮かべている。

そんな周りを見てみるとカイルと目が合う。先程の校長の話し通りならば。

「引き抜けば良い……ねえ？」

「多分正解だろう」

二人は笑いながら、穴から手を引き抜いた。引き抜いた瞬間、手の中に小さなモノが入った事を確認し、幸人はそつと左手を開く。

手の中には金に龍が彫られた第二寮の寮章があった。

幸人はすぐさまカイルを見る。

「とりあえず、三年間よろしく頼む」

「ああ！」

カイルが見せてきた寮章にも龍が彫られており、二人は空いてる手で拳を作り、二人で拳を打ち合わせた。

そんな二人の名を、前に並んで座っていたドゥーエスが呼ぶ。

「カイル・グランディオ、ユキト・クガ……第二寮」

良く通る声で宣言されると、多分、第二寮の生徒達が、歓声をあげる。

そんなバカ騒ぎを見て、二人は小さく笑った。

入学式も無事終わり、とりあえず寮へ向かう事になった新入生は、各寮の寮長について行く事になったのだが、そこで問題が発生した、第二寮の寮長が来ないのである。

もう他の寮は皆、大ホールを出て行き、もう大ホールに残っているのは僅かな教師と生徒会の面々だけであった。

「まさか……」

カイルが青い顔をしながら、頭痛を堪えるように眉を寄せる。

幸人は足音が聞こえた為、後ろを見ると、カイルへ心の中で黙禱を捧げた。

「待たせてごめんね。第二寮の寮長のクレア・ハーヴェイだよ。みんなクレアって呼ぶからみんなもそう呼んでね」

音符でも付きそうなお機嫌具合を見て、幸人はカイルに小さく咳く。

「そのまさかだ」

「そんな……胃薬を飲む日々がまた……」

カイルの幼少時代は凄まじく子供らしくない事が発覚したが、あ

まりの悲嘆の暮れように、幸人は突っ込むに突っ込めなかった。

クレアの案内で、無駄に広い学園内の複雑な道を歩き、たどり着いたのは、淡い青色のカーテンで分断された部屋だった。

「このカーテンは、寮章を持つ人間を寮まで飛ばす転移の魔法陣が書かれてるんだよ。寮章を持たない人間にはただのカーテンなんだけどね」

クレアはそう説明すると、手際良く新入生を寮へと転移させて行く。

そして残ったのはカイルと幸人とクレアだけになった。

二人でサツサと行こうとしたのだが、クレアの無言の圧力で動けなくなったカイルを置いて行く事も出来ず、この結果に繋がった。敗因はカイルのクレア・ハーヴェイへのトラウマを甘く見た事だろう。

「うーん、やっと喋れる。久しぶりね。カイル」

「あ、ああ、久しぶりだね。クレア」

再会の挨拶を棒読みでしか言えないカイルを哀れみながら、胃薬を買いに行くのを手伝おうと決意した幸人だった。

「その子はお友達？」

「う、うん。ユキト・クガだ。招待枠で集まった時に友達になったん……だ……クレア？」

「ふう〜ん。招待枠で来てたんだ……それなのに挨拶もしてくれないのはどう言う事？」

クレアは笑顔だった。けれど後ろでは何かが召喚され、目は色を無くし、効果音が出そうな圧力をカイルと、巻き込まれる形で幸人に加えていた。

「いや、その、これには訳が……」

「どんな訳？」

（多分、会いたくなかったんだろうなあ）

「そ、そう、母さんと出掛ける約束をしててだなあ」

「あら？ リディアさんと？ へえ、流石は“マザコン”ね。まさか幼なじみと母親を天秤に掛けて、母親を選ぶなんて、本当に“マザコン”ね。でも安心して、例えばカイルが“マザコン”でも、私が“マザコン”の幼なじみと思われても、私は気にしないから。だって“マザコン”は、母親を大事にしている証拠だもの」

マザコンと呼ばれる度に、カイルの心に矢が刺さっていき、最後の一撃でブロークン・ハートした映像を幻視しつつ、幸人は、カイル相手に“ワンターンキル”のワンサイドゲームをしたクレアを見て、この人との1対1での戦争《舌戦》は回避しようと心に決めた。そうでなければ、両手を床に突いて、うなだれている少年のように、心に深い傷を負ってしまう。

「ユキト君。行きましようか？」

「は、はい……」

言われるがままに、幸人はカイルを引っ張って寮へと轉移した。

カイルが立ち直ったのは10分ほど後の事だった。

寮での部屋や、過ごし方の注意、そして決まり事を説明された新入生は、今度は夜に行われる歓迎舞踏会に出席する為に、てんやわんやする羽目になった。

「なあカイル……」

「何だ？」

「オレ、ダンスなんて踊れないんだけど……」

「僕も踊れない。一番確実なのは誘われないように壁へ寄りかかる事だが……クレアが居る時点で無理か……その場で覚えるしかない」「嫌みじゃないのが憎たらしい……」

カイルはかつこいい。それは確実だろう。容姿的に見ても、幸人が会った事のある年代ではトップクラスであり、何より落ち着いている。

女の一人や二人は黙っていてもよって来る筈だ。しかも横には引き立て役の幸人もいる。

一方、幸人は、どんなに頑張っても良い評価をしてもらっても、中の上であろう。普通に見れば、普通の日本人の顔。
顔を劇的に変えるメイクの方法なんて知らない幸人には、どうする事も出来ない問題だった。

世界間で容姿の差があるのかと悩んだ幸人だが、もしかしたら美的感覚が違うかも知れないと、ポジティブに納得した。あとで深いダメージを負う事になる予感がしたが。

諦めたところで、やはり幸人も周りの目は気になる年頃の男の子。いつの間にか用意されていた燕尾服のホワイトタイを鏡で直し、チラッと横を見る。

「こういった服はやっぱり背がないと、どうしてもな……ん？　ど

うした？」

「いや、突き詰めればどんなモノでも良い味を出すんだな〜と…」

初めて、黒が似合うカイルを純粹に羨ましいと思つた瞬間だった。横でうなだれる幸人を尻目に、何とか納得の行く形で、燕尾服を整えたカイルは、ちよつとした疑問を口にする。

「そう言えば、さつきから気になって居たんだが……」

「ん？」

「僕の部屋に何しにきたんだ？」

「おお！ 今更か」

幸人はカイルの突っ込みの遅さにびっくりしつつ、指を三本だして言つ。

「理由は三つ。燕尾服の着方、ダンスの仕方、会場でのマナーを聞きに来たんだが、後半二つはダメだった」

「僕に聞く時点で間違っているんだ。父や母は舞踏会には何度か足を運んでいるが、僕自身、行く機会も気もなかった。大体……僕は女性に気を使い、気の聞いた言葉を言ったりするのは苦手なんだ」

「あら、さいですか」

肩を竦めておどける幸人にため息を吐きたくなるが、幸せが逃げてしまうと思い、カイルは堪える。既に幸せとは別方向にベクトルが向いている為、大して意味はないが。

それから程なくして、部屋がノックされた。

そろそろ行かなくてはと思つていた時の事だった為、二人は同時にドアへ近付き、固まった。

ドアが勝手に開いて、ドレスを纏った一人の少女の姿を映し出した。

正確にはドレスを纏った少女が“許可も無くドアを開けた”で、あるが。

そんな些細な事は、カイルは勿論、幸人の頭からも抜きでていた。少女は二人の反応、と言うよりカイルの反応に満足したのか、上機嫌で言った。

「舞踏会がそろそろ始まるわ。寮の談話室に降りて来て」

幸人のアルカーディアで出会った人の、美人ランキングで現在トップを独走するクレアが、悪戯っぽく笑ってそう言うのを聞きつつ、美人は何を着ても似合うと言う言葉の正しさを、幸人は理解した。

薄い青色のイブニングドレスは、床に届きそうなくらいに裾が長く、露出もかなりあったが、彼女は全く持って問題無く着こなしていた。色も赤い目と対比しているが、上手く調和しており、とても似合っていた。白いドレスグローブやあちこちに派手すぎない程度の装飾を施しているのも、それに拍車を掛けている。

「こりゃあ反則だ……」

「わかった。談話室に行けばいいんだな」

直ぐに切りかえたカイルは、幼なじみで見慣れていたからだろう。とても幸人にはそこまでの切り替えは無理だった。

「ほら、ユキト行くぞ！」

「何でそんな必死なんだよ……？」

「理由は特にない！！！」

クレアを視界にいれないようにしているカイルを見て、幸人は、心の中で先ほど思った事を訂正した。

そんな二人のやり取りを面白そうに見ながら、クレアは、どちらを最初のパートナーに選ぶうか考えていた。

舞踏会は、校長の挨拶から始まり、現在はみんなで会食をする感じになっている。

だが、幸人とカイルは決して会食が楽しめる状態ではなかった。先ほどからクレアが獲物を見るかのような目で二人を見ていたからだ。

「さあ〜て、そろそろダンスの時間といこうかのう……上級生の先輩たちは下級生を誘ってやってくれのう」

酷く楽しそうなクリフォードの言葉は、幸人とカイルへの死刑宣告であった。

生徒会長だからだろう。クレアが一番始めに動き出して、こちらに向かつて歩いてくる。自然と皆、クレアに視線を集めていた。

クレアがどちらを選ぶかによって決まる。壁へ寄りかかれるか、美人とのダンスで恥をかくか。

幸人の中では、十中八九、カイルが選ばれる確信があったのだが、クレアが予想外を狙ってくる可能性もある為、安心出来ない。

冤罪で裁判所の被告人の席に立たされたかのような気分になりながら、二人は判決を待った。

そして。

「私と一曲踊って下さいますか？」

「……喜んで」

そんな会話の中で、イブニングドレスを軽く摘んで、笑顔で会釈するクレアと微妙な顔から、直ぐに鋼鉄の仮面を身に付け、会釈を返すカイルという動作が行われた。

逆転無罪を勝ち取った幸人と、冤罪で牢屋に入れられたカイルの顔は見事に正反対だった。

周りは美人な生徒会長に指名され、とっさの事に反応が遅れたと思つた事だろう。だが、あの間は、カイルが諦めるのに掛かった時間である。

カイルを哀れに思いつつ、幸人は壁に寄りかかる為に、会場の隅へとよつた。

そこからの舞踏会は見物だった。

ダンスをした事の無い一年生とこの学園でしなれている上級生の間で起きるハプニングは、親睦を深めるにはちょうど良いかも知れない。

クレアとカイルは、最初こそカイルが足を引っ張っていたが、直ぐにその明晰な頭脳で、ダンスを覚えたカイルが、今ではリードしている。

既に三曲目に入っているが、幸人はまだ誰とも踊っていないかった。

カイルは、クレアが離れない為、女の子に囲まれると言う事はな

かったが、幸人は持ち前の観察眼で、何人かの上級生がカイルを狙っている事を察知していた。

カイルが壁際の華になるのはまだ先らしい。

しかし、幸人の関心は別の所にあつた。

幸人から10メートル程度離れた壁際で、正に壁際の“華”になっている少女がいたのだ。

特徴的な銀髪に、綺麗な蒼眼、何よりも、クレアと肩を並べるほど容姿が整っていた。

こちらはどちらかと言えば可愛いに分類されるとは思つが、幸人のランキングでは首位タイである。

白のイブニングドレスに、金の装飾品を控え目に身に付けた清楚な雰囲気を出す少女は、幸人の好みにストライクではあつたが、先ほどから見ていれば、少なくとも30人程度はダンスを申し込んで撃沈している。

何人かの話盗み聞きしていると、どうやらかなりの有名人らしく、最初の方は会場全体の注目を浴びていたが、曲が三曲目にもなれば、その注目は踊る人間達に向けられていた。

未だに、かなりの男子はチラチラと見てはいるが。

「可愛いなあ……」

『声を掛ければ良いだろ。無理だとは思つが』

「無理なのはわかつてるよ……」

『そう言う意味ではない。あの少女は“癒やしの神子”と呼ばれる特殊な人間だ。このような場で、男と踊る事はしないだろう』

出て来た単語に幸人は、腕組みをしたまま首を捻る。

『癒やしの神子とは、何世紀かに一度、魔法が存在する世界に生まれる超高度な治癒の力を持つ人間の事だ。その存在は、三世紀前の時は、まるで神のようだった』

「うん。すごいのは分かるけど、単位が世紀だとイマイチ頭が追いつかないし、一体ゼツはいつから存在してるんだ？」

『記憶があるのは1000年ほど前からだが、抜け抜けではあるし、多分もつと前から存在していただろう』

「うん。すごいって事は理解した」

自分が付けている指輪の凄さを改めて確認する事になった幸人だが、この指輪を渡した人間について、思い出していた。

「ゼツ。そう言えば、お前を渡した……！？」

唐突に反応しなくなった絶無と会場の音が消えた事に、幸人は思わず周りを確認した。

「マジかよ……」

「どうだ？ 少年。世界は“面白くなった”か？」

幸人は声のした方を見る。今度は“黒い異形”は空に浮いていた。

「おかげさまでね……けど、相変わらずな登場の仕方だな？ やり方教えてよ」

「いつか機会があったらな。思春期の妄想少年に教えたら、何をするか分からないからな」

「妄想少年で悪かったなあ……」

「自覚はあったのか？ オレはいつでもお前を見ているから分かるぞ？ さつきから、あの可愛い癒やしの神子と関わり合えたらと思

ついでにだろ？」

黒いフードで口元しか見えないが、ニタニタ笑う異形に凶星をさされ、幸人は顔をひきつらせる。

「いつでも見てるって……」

「あながち間違っではないんだよ。でもまあ癒やしの神子と関わり合いたいお前に、優しいオレが一つアドバイスをやる」

「何だよ……そんな事より、オレにはお前に聞きたい事が山ほどあるんだ」

「まあ落ち着け。全ては追々だ。アルカーディアに居る限り、オレは出てこようと思えば出て来られるからな」

幸人はその言葉に眉を跳ね上げる。

「なに？」

「あんな辺境の魔法の無い世界じゃあ、魔力が足りなくて、オレは自分を具現化出来ないんだよ。ここなら魔力に満ち溢れてるから、ちよつと頑張れば出て来られる。オレはお前の守護霊みたいな存在だからな」

「守護霊……？」

「他の人間に言っても無駄だぞ？魔法ですら有り得ない事だからな。まあそれはおいて置いて、あそこに居る給仕、怪しくないか？」

幸人は異形が指を指した女の給仕を見る。女は、何故か食事用のナイフを服の袖に隠そうとしていた。

幸人はその隠し方を知っていた。暗器を使う際の隠し方である。

「おい、まさか……」

「さあ……頑張ってる」

異形がそう眩くと、時間は動き出していた。

『どうした？幸人』

「いや……あの時の異形がってそんな事してる場合じゃない……！」

給仕の位置を確認する。僅かに幸人よりも少女に近い。

「ゼツ。あの給仕！」

『む。あやつ邪な気配を感じるぞ！』

幸人はゼツの確認を得ると、近くのテーブルからナイフを掴み、少女に向かって近寄って行く給仕へバレないように近寄る。魔法の使えない幸人に出来るのは不意打ち程度しかないのである。

給仕は自然な形で、少女に飲み物を勧めているように見えるが、少女に何かを押し付けるようにする。

少女の顔が見る見る内に険しくなり、少し青ざめる。
給仕は二、三、何かを少女に眩き、まるで具合が悪くなった少女に付き添うかのように、会場を後にしようとしている。

その状況で、幸人は、既に少女と給仕の進行方向に回り込んでいた。

何食わぬ顔ですれ違い、給仕が後ろを見せた瞬間。

幸人は隠し持っていたナイフを給仕の首筋へ叩き込む。

金属同士がぶつかり合う嫌な音が会場に響き渡り、固い感触と衝撃が右腕に走ったが、幸人は気にせず、右の足を顔面に向けて振り上げる。

顔を壊す気で打った蹴りは、軽く体を反らすだけで避けられ、幸人は今まで戦った誰よりも速い拳を腹部に放たれる。

とっさに左の腕でガードするが、勢いは止まらずに吹き飛ばされる。だが、右手はしっかりと目的のモノを掴んでいる。

「嫌だね〜魔導士って、ロクに体を鍛えないでここまで強くなれるなんて」

「魔法学園の生徒とは思えない言い種ね」

幸人は、右手で掴んでいた少女の腕を放す。

幸人は飛ばされる勢いを使って、少女を給仕から引き離したのである。

「魔法初心者なんだよ」

「けど強いわね。勘も良いみたいだし、今回は私の負けね」

「次回はねえと思うけどな」

幸人の言葉が合図だったかのように、幸人の目の前にクリフォードが現れ、その他の教師によって、給仕は取り押さえられていた。

「瞬間移動かよ……まさかオレ、余計な事をしました？」

「ああ、お陰で無駄な混乱を招いた」

給仕を取り押さえていた30半ば程度の男の教師がそう幸人の行動を叱責する。

「慣れない事はするもんじゃないなあ……先生たちに任しとけば良かった」

幸人はため息を吐いて、頭を搔く。
教師たちから見れば、英雄気取りの子供だろう。恥ずかしい事の上ない。

「そうでもないぞう……格上の魔導士を相手に、全く魔法が使えないにも関わらず、目的を達成せしめた、その知恵と技術、何より、今日出会ったばかりの人間の為に行動した勇氣は賞賛に値する。大したモノじゃ」

「ですが、人によってはそれを無謀と言います」

クリフォードに誉められ、萎えたモチベーションが一気に上がったが、良く通る声によって、モチベーションは一気に下げられる。

「若い頃は無謀であるべきだとワシは思うのじゃがなあ」

「とつさの判断能力、察知能力、そして磨かれた体術は素晴らしいでしょう。ですが、今回ののは運が大きく関わっています。魔法が使えない人間が魔導士に挑むのは、それだけ危険なのです。覚えておきなさい。クガさん」

ドゥーエスの正論に、肩をすくめて幸人は頷いた。
自分でも分かっている。あれは運が良かった。

痛むのは“脇腹”と左腕の骨。とつさに放たれたハズの給仕の突きは、衝撃が突き抜け、幸人の左腕の骨の内側にひびを入れ、尚且つ肋骨に幾つものひびを生じさせていた。

「説教は終わりかしら？　じゃあ私も退散するわね」

「何？　この状況で逃げれるとでも？」

「ええ。だって私の本体は別にあるモノ」

給仕の女はそう言うと、体を煙へと生じさせて、教師の拘束を逃れる。

「クガ君だったかしら？ 強い子は好きよ……私の名前はウルド。人は深き森の魔女とも呼ぶわ」

「深き森の魔女！？ ノルン《古き魔女》の一人である貴様がなぜ神子を狙う！」

教師の一人が、正体を明らかにしたウルドにそう怒鳴るが、ウルドは気にした様子もなく、煙のまま続ける。

「あなた達には関係無いわ。私は私の義務を果たすだけ……その為にその子が必要な……分かるわよね？ セオドル」

「分からぬのう〜だが、この学園に二度も入れると思うかのう？ 結界は今日以降、来年になるまで解けぬぞ？」

「やりようはいくらでもあるわ……」

「ならばやって見るがいい！ 色杖の使い手《学園の教師》が相手になってやるわ」

一人の男性教師が紫の色をした杖を取り出す。

「あらあら、でも良いのかしら？ 私はこれでも太古からの力を継承しているノルンよ？」

「構わぬよ。ワシの生徒に手が出せるものなら……のう？」

「怖いわね……まあいいわ。また会いましょう。特にクガ君は魔法をしっかり覚えておきなさい」

ウルドが呟いた瞬間、煙は掻き消え、静寂だけが残った。

クリフォードとウルドの圧力に当てられた幸人は、冷や汗を掻き、

朦朧とする意識の中で眩いた。

「やっぱり……無謀だったなあ……」

そこで幸人は力尽きて、後ろ向きに倒れる。

かすれていく視界の中で、綺麗な銀色が見え、誰かに受け止められた気がしたが、確認する元気がわず、幸人は意識を深淵へ沈めた。

第五話「銀髪の少女」上（前書き）

はい。第五話の上です。

長くなりそうなので、良いところで区切りました。
お読み下さい。

第五話「銀髪の少女」上

世界間のボーダーライン

第一章「もう一つの世界」
第五話「銀髪の少女・上」

朧気な視界に、真っ白な天井が飛び込んでくる。

「知らない天井だ……」

幸人はそう呟くと、勢い良く上半身を起こす。

頭に何かがぶつかった。右を見ると、鼻を押さえて悶絶しているカイルと、招待枠の資質検査の時にいた白衣の女性の先生がいた。

「うーん。治療士ヒーラーとしては怪我人を増やさないで欲しいかなあ」

「あなたは？」

「アンナ・セレッソ。みんなアンナと呼ぶから君もそう呼んでね」

アンナはそう言うと、ポニーテールにしている金髪を揺らしながら、濡れたタオルをカイルに渡す。

「……その様子じゃ大丈夫みたいだな……」

「大丈夫？……ああ、昨日、気絶したのか？」

「魔女の高純度の魔力に当てられてな。お前以外にも気絶した人間はいた。ただ、次の日の朝まで眠ってたのはお前だけだ」

「そんなにか……何で高純度の魔力で気絶したんだ？」

「高純度の魔力は、それだけで人体に影響を与える。しかもお前はそれを内部に食らった」

カイルの話聞いてるうちに、昨日あった事を思い出した幸人は、一つの事実気付く。

「傷が治ってる？」

「骨のひびと、魔力により体細胞が受けたダメージは、癒やしの神子が治してくれたぞ」

「へへ癒やしの神子って呼ばれてるだけあって、やる事が違うなあ」

傷が全く痛まない事を確認しつつ、幸人はそう呟いた。

「一生に一度、あるかないかの事だ。感謝して、彼女を敬え」

「いや、感謝はするけど、同い年の子を敬えって言われても……」

「お前は分かかっていないだけだ。彼女は魔法文化を持つ世界の神聖な象徴なんだ」

「……神聖な象徴ねえ……ストレス溜まりそうだな」

幸人の言葉にカイルは顔をひきつらせ、こちらの言葉が耳に入っただのか、アンナは吹き出していた。

「魔法文化が無い世界のクガ君には理解出来ないと思うわよ。諦めなさい、グランディオ君」

「しょうがないか……」

「そのしょうがないが、酷く馬鹿にされたような気がするんだが？」

「ようじゃない。したんだ」

カイルの爆弾投下にアンナは幸人を見る。
幸人は眉をピクピク動かしながら言う。

「お前とは決着をつけなくちゃいけないらしいな？」

「やる気か？ 僕に勝てるとも思ってるのか？」

「その余裕がいつまで続くか楽しみだ！」

「最後まで続くに決まってるだろ！」

「はいはい、ストップ！ここが治療室だって忘れないでくれる？」

意味の無い不毛な争いを始めようとする二人の耳を引っ張りながら、アンナはそう注意した。

その後直ぐに、幸人の様子を見に来たクレアによってカイルはどこかへ連行された。

カイルの中でこの話題が蘇る事は無いだろう。

「ねえユキト君……おかしいと思う？」

「カイルがですか？ それならハイと答えておきます」

「……さっきの話よ」

「ハイ。あれは異常です。カイルがあんな風に熱くなるのは初めて見ました。だから、さっきのカイルはおかしいです」

「どうしてもカイル君をおかしい子にしたいのね……まあいいわ。それには理由があるの」

そう言って、アンナは御伽噺を話し始める。

昔、今以上に文明が発達していた時代の事。

戦乱の中、二人の少女と少年が旅をしていました。

人を癒やす力を持っていた少女は、剣を使う少年に護られながら、様々な地を渡り歩き、身分などを問わず、色々な人達を無償で傷を癒やし、人々に命の尊さと戦いの虚しさを説きました。

けれど、少女がどれだけ癒やしても、戦いの虚しさを説いても、決して戦いは無くなりませんでした。

少女は意を決して、森に住まうノルン《古き魔女》の一人で未来を見通す女性に戦いを無くす方法を聞きに行きました。

魔女は少女に告げました

戦いを無くす方法は無いと。

少女は酷く落ち込みました。

そんな少女の様子に見かねた少年が、魔女に聞きました。

戦いを“止める方法”は無いかと。

魔女は答えました。

止める方法はあると。

少女はその方法を聞きました。

魔女は答えました。

少女の力を巨大な力を持つクリスタルに込めなさいと。

少年は尋ねました。

何故、クリスタルに込める必要があるのかと。

魔女は答えました。

少女の力は治癒と浄化の力。クリスタルに込め、人々が多くいる所にそのクリスタルを置けば、人々の負の感情を浄化し、荒んだ心を癒やすと。

魔女は、巨大な力あるクリスタルが眠る場所を教えました。

少年と少女が魔女に礼を言い、立ち去ろうとした時に、魔女は言いました。

例え巨大なクリスタルに少女の力を込めても、永遠には続かない。少女は有限の命の持ち主だからと。

少女は答えました。

私の次に続く人は、しっかりと生まれてきますと。

少女と少年は旅立ちました。

以後、巨大な都市に、クリスタルを贈呈し、旅を続ける少女と少年の姿が頻繁に見受けられ、次第に争いは無くなっていき、少女は“癒やしの神子”と呼ばれるようになった。

アンナは話し終わると、息をつき、ベッドの幸人を見る。

「どうだった？ 本当はもっと長いんだけどね。様々な世界で語られているお話で、言葉の関係でちよつと言い方が違ったりするけど、唯一、殆ど誤差なしで存在する世界間のお話よ。みんな、小さな頃からこれを聞かされるの」

その御伽噺を聞き幸人は地球の宗教を思い出していた。

居たかどうかすら分からぬ聖人を奉り、救われるかどうかも分からぬのに、それでもと信仰を続ける。

そこで幸人は一つの可能性に思い至る。

「アンナ先生……もしかして……神子を信仰する宗教なんてありませんか？」

「あるわよ。初代の神子であるクリステイーナから取ってクリス教と言つのを聖クリス教会が信仰し、世界間を越えて広まっているわ」

幸人は額を押さえて首を振る。

当たり前だ。居たかどうかも分からない聖人とは違い、この世界には確かに“癒やしの神子”は存在するのだから。

人々が信仰しないはずがない。地球でさえ三分の一以上の人間が宗教に入り、神を、聖人を崇めて、救いを求めているのだ。確かに存在する象徴が居れば、どれほど救いになることが。

「宗教って……まじかよ。じゃあ癒やしの神子って神様に次ぐ位置とかになつてんのか？」

「うーん、色々あるけど、基本的には宗教に入ってる人間達には絶対的な人間よ。多分……神子が命令すれば“何でも”するわね」

「最悪……で？ それを危険視した国とかがアルカーディアにでも送つたのか？」

幸人の言葉にアンナは微妙な顔をして答える。

「そこは重要な事で私には言えないわ。本人に聞くのが一番よ」「本人って……どこに居るんですか？」

「このアルカーディア城の中よ」

「アルカーディア城って……確か200haはあるんでしょ？ その中って言われても……」

「基本的に秘密なのよ。ただ、今日は結界を張り直してるから、生徒はお休みよ」

少し含みを持った言い方に、幸人はアンナの意図を察する。だが、その前に聞きたい事があった。

「なぜ、昨日は結界が張られていなかったんですか？」

「この学園がある土地は特殊だね。結界が長続きしないの。学園の魔法教師を総動員しても、一年しか持たないわ」

「それで？」

「その効果が切れたのが昨日の夕方頃。結界を張るには、もっとも魔力が集まりやすい昼頃にやるのがベストだから、昨日は警護を関係者たちにお願ひしてただけど……」

「突破されたと……」

「聖クリス教会からはかなりの文句を校長が言われたらしいわ。ちなみに、君には表彰をもって話があったんだけど……ドウエス先生が断ったわ」

表彰の話しを断ろうと声を出し掛け、幸人は固まった。

なぜ、ここでドウエスが出て来たのか。幸人には理解不能だった。

「知らないの？ ドウエス先生は君のこっちで生活する際の“保護責任者”なのよ？」

「保護……責任者！？ あの婆さんが！？」

「ええ。理由は知らないけれど」

「マ・ジ・か……」

両手を頬に当てて、この世の終わりのような顔をする幸人に、アンナは言う。

「まあ悪い人じゃないし、いいじゃない。それよりも、君にはする事があるんじゃないの？」

「……まるで、オレがやらなきゃいけないみたいない方ですね」

「彼女は一人。友達もいない。唯一親しかつた家族も、今はいない……あまりに可哀想だと思わない？」

「それは、オレがやる理由にはならない」

「なるわ。だって、君は彼女に“先入観”がない人だもの」

「だったら他にも別の世界から来た人もいるでしょ」

アンナの言い方に反発し、思わず投げやりな言葉を言ってしまった幸人は、直ぐに訂正しようとして、止めた。否、言葉が発せられなかった。

「うふふ。残念でした。この世界とは全く交流がない世界から引き抜かれるなんて殆どないの。少なくとも、今の生徒の中で、癒やしの神子のお話を知らなかったのは君だけ。つまり、君は彼女と“友達”になれるチャンスを持つてるの」

「チャンスって……」

「あゝもうゝゝ！ いいから彼女と友達になってきなさい！ 男の子でしょ!？」

「いきなり強気になった!？」

アンナは言いたい事を言い終わると、さっさと部屋から出ていってしまった。

「オレにどうしろと……」

『随分強引な女だったが、別にお前に悪い話ではあるまい?』

「その話とか、義務みたいなのが嫌なんだよ……友達ってそんなんじゃないと思うんだ……」

『それは考え方の問題だ。主が真に友になろうとすれば、相手にもきくと伝わる。癒やしの神子と呼ばれる者だ。相手の心の内には敏感である』

「……そうだな。オレが友達になりたいから……オレがそう思っていれば何の問題もないよな」

幸人はそう言うと、ベッドから降りて、側にあった自分の制服に着替えて、駆け足で部屋から出て行った。

久我幸人と言う人間は、基本的に体を動かす事を苦としない人間である。

だが、学園全体の約12分の1。200haもの敷地を要する校舎、アルカーディア城とその周りの施設をあてもなく探し歩くのは、流石に厳しかった。

アルカーディア城は、学園の校舎として使われる、世界有数の巨大城である。

中央に立つ本城と、本城を囲んで四角形に立つ4つの副城。更にその周りを囲む城壁。この城壁の中が、アルカーディア城の敷地内である為、アルカーディア城に在ると言うのは、200haの中に居ると一緒である。

至る所に転移の魔法陣がある為、正確には200haを歩き回る訳ではないが、それでもかれこれ1時間ほど歩き回っている。

「ヤバい……魔法学園の城を甘く見てた……」

『主の世界では、ここまでの建造物はなかったか？』

「あつたかも知れないけど、一般庶民のオレは見た事すらないよ。」

大体、転移の魔法陣が無かったら、この本城だけで1日の大半を過ごす羽目になる……そんな非効率な建物は作らないと思うけどなあ」

『それが世界間の違いだろう』

幸人は絶無とそんな会話をしつつ、本城の最後の場所。時計塔の近くまで来ていた。

ここには流石に居ないだろうと思いつつ、とりあえず来たのだが、意外な事に、絶無が面白い事を言った。

『あの鳥達の中の一羽は不自然だ。明らかに魔力が強すぎる』

「鳥？」

幸人は空を見上げる。白い一団が時計塔の周りを旋回し、時計塔の中に入った。

「これを登るのか……？」

生徒が入る事はない時計塔の魔法陣は、制服の左肩についている、魔法陣のフリーパスである校章にも反応せず、幸人は泣く泣く、延々と上に続く階段を登った。

「はあはあ……こんな所を登ったのか？ お嬢様の筈じゃないのか……？」

幸人は全てを登りきると、近くにあった最上階の時計の部屋のドアノブを回して扉を引っ張る。

だが開かなかった

幸人はドアノブを回して扉を押した。

だが開かなかった。

「だあ〜!! 一体どうなってんだ!？」

『鍵は掛けられていないようだ。魔法も掛かっていない』

絶無の言葉に幸人は、ある可能性を考えた。そしてニタリと笑い、少し大きめな声で言う。

「あゝあ。ドアも開いてないんだ。帰るとするか」

そう言うと、階段の近くまで歩いて行き、足音を立てずに、ドアが開かれた場合、扉によって死角になる壁へ張り付く。

一分ほどすると、思った通り、ドアノブが回され、扉が迫ってくる。

押ししても引いても、鍵も魔法も掛かっていないなら、中から誰かが押さえていたのかと考えたが、どうやら合っていたようだ。

少し横にズレると、そこには白いブレザーと白いスカートを身に付けた“銀髪の少女”がいた。

少女は幸人には気付かず、恐る恐る階段の方まで行き、下を見て、何故かホツとしている。

そんな少女を見て、幸人の悪戯心が刺激される。

幸人はバレないように部屋に入ると、少女に気付かれないようにドアノブを引いて、扉を閉める。

そして、中からドアノブに手を掛け、ドアノブが回されるタイミングを待つ。

何秒としない内に、ドアノブが回される感触が手に伝わる。

ここからはタイミングが命と、自分の心に言い聞かせ、幸人はドアノブを引っ張る。

扉の向こうの主は、不自然に思ったのか、何度か引っ張る。

そして。

向こうの主がしっかりと力を入れて、思いつきりドアノブを引っ張る。

幸人はその様子を全く見ていないにも関わらず、完璧なタイミングでドアノブから手を離れた。

結果。

「きゃっ」

涙目で尻餅をつく少女と、ニヤニヤ笑って立つ幸人と言う構図が出来上がった。

「やあ、昨日ぶりかな？」

『主はその悪戯好きを何とかした方が良いぞ？ いずれ仕打ちを受ける』

「何とかする？ こんなに楽しい事をやめるなんて」

「リアラに何してるんだい！！」

「じっ！？」

横からの突然の衝撃に、奇声と共に吹き飛ばすと言つ醜態を晒した幸人に、絶無は。

『だから言ったであろう？仕打ちを受けると』

「今だったのか……」

「あんた！ 一体何をしてるんだい！！」

横に吹き飛ばされた幸人は、自分の体勢を立て直しゆっくり顔を上げる。そこには。

「子供？」

「子供じゃない！！」

「子供はみんなそう言っただよー！」

幸人の目の前には、9、10程度の子供の女の子が居た。しかも緑の髪に、紫の目と言う珍しい組み合わせの。

「……緑の髪？ 紫の目？ こっちの世界の人間じゃ有り得る組み合わせなのか？」

「あたしは人間じゃない！ 精霊だ！」

幸人は首を傾げたあと、少女の頭に手を置き、ニコリと笑って言う。

「あゝお父さんとお母さんを探してあげるね。うん、あとお医者さんも」

『主……嘘じゃないと分かってやっているだろうか？』

「この子の保護者の方は？」

「は、はい」

幸人は聞こえた声に振り向く。

そこに居たのは、先ほど幸人が悪戯を成功させ、また、昨日狙われたにも関わらず、護衛も付けずにフラフラ出歩く困ったお姫様。

「今……凄く失礼な事を考えませんでした？」

「いや、ソナコトナイヨ」

「何で片言なんだよ！ あと、あたしを子供扱いするな！」

幸人に頭を撫でられていた少女は、幸人の手を真つ赤な顔で払いのける。

羞恥か怒りか。多分前者だろう。

「恥ずかしがらなくても、頭を撫でられるのは子供と女の子の特権だよ？」

「そうだったんですか!？」

「リアラ！ もっと人を疑おうよ！」

『混乱の極みだな』

「全くだ。少しは冷静になろうよ」

『「主」あなた、あなた』が言うな『ますか』!』『』

三人へ二人と一つ々に突っ込まれながらも、幸人はどこ吹く風で、逆に二人に人差し指を伸ばして言う。

「あんたでもないし、あなただでもない。オレは久我幸人。いや、ユキト・クガかな」

幸人はそう笑いながら自己紹介をした。

第五話「銀髪の少女」下

第一章「もう一つの世界」

第五話「銀髪の少女・下」

この学園に来て、一人で居る寂しさを紛らわす為に、時計塔に登っていた。

今日だって一緒。ただ、鳥達と戯れていただけ。けど、彼が来た。

この日の出来事は忘れない。衝撃的であつたのもそうだけど。

私の事を何の打算も無しに、友達と呼んでくれ、大切な私の名前を呼んでくれる、同年代では初めての男の子の友達が出来た日だから。

けど、私はあの日の自分を許せない。

神子の日記より抜粋

幸人は笑いながら自己紹介を済ませると、二人に自己紹介を促す。

「円滑な人間関係を作るには、まずは自己紹介から始めるべきだと思っただ。オレは」

『悪戯から入った奴が良く言う』

「はい。黙ってようね。君達も突っ込みは無しだからね」

『ぬお！？ 財布の中に我を入れるな！ 小銭が！ 小銭が我を削るうう！！』

幸人は絶無を右指の人差し指から抜き、財布の小銭入れ部分に入れると、ガシヤガシヤと揺らす。

「リアラ……こいつ変だよ」

「ソフィア！？ そんな事言っちゃダメよ」

「何をコソコソ話してるのかな？」

コソコソ背中を向けて話す二人にバレないように近付くと、幸人はそう言った。

「えっ、きゃっ！？」

「あっ……」

「1Jのー」

幸人の接近と声に驚いた銀髪の少女が、驚いて体勢を崩してしまっ

少女が繰り出したパンチを無防備な顎に食らってしまう。

幸人の顔が盛大に斜めへ跳ね上がり、首から凄い音が出た。

「ぐっ……」

「あっ……」

「えっ……」

混乱した状況に、三人は三者三様の声を出した。

そして幸人は、また臆気な視界の中で銀髪を見ながら、意識を深淵に落とした。

「えっと……やっちゃった？」

「ああ〜！！ とにかく治さないと〜！」

『構わん……そのままにしておけ。というか、そのままにしておいてくれ……』

銀髪の少女は、少年の財布から聞こえてくる声に首を傾げる。

緑の髪の少女が、財布の小銭入れを開き、絶無を取り出す。

『ふう。助かった。すまん。礼を言う』

『あんた……エンシエント・レリックか？』

『良く分かるな。まあ精霊ならば当然か。しかし、使い魔では無く精霊を共とするとは……流石と言うべきか』

『共では無く、ソフィアは友です』

ソフィアの手のひらに乗った状態の絶無に、リアラはそう言う。

リアラの気持ちを通じたのか。絶無は宝石部分を光らせて、リアラに言う。

『失敬。信頼関係までは見抜けなかった』

「いえ……そちらも随分と、その、愉快的な関係ですね」
『普段はこうでは無いのだが……その、たまに抑えられてきた本性が現れるというか、何というか、いきなり“ハイ”になる……』
「本当に愉快的な方ですね……」
「一体コイツは何しに来たんだ？」

気絶した幸人の顔を見つつ、ソフィアがそう口にした。

『それは本人に聞いてくれ。それまでは、我がそなたらの話し相手になるが故』

幸人は頭に手を置かれる感触に目を覚ました。
目の前に広がる銀色に思わず手を伸ばし、幸人は呟いた。

「綺麗だなあ」

「えっ……」

「何、リアラの髪に触ってるんだ!!」

幸人は自分が触っているモノが髪だと気づき、自分の置かれている状況も把握した。

「なんでオレは寝てるんだ？」

『主が馬鹿だからだ』

「馬鹿って言うな！」

「あんた……騒がしい奴だな」

「お前に言われたくはないわあ〜思い出したぞ！ 人の顎をピンポイントで殴りやがってえ〜」
「痛い痛い〜」

幸人は右手の親指を拳の中に入れ、中指の関節を飛び出させ、鉄菱の形にすると、緑の髪の少女のこめかみを割と本気でグリグリする。

「リアラあ〜」

「あ〜、はいはい」

「あいつが、あいつが」

「う〜ん、先に手を出したのはソフィアだしね……」

半泣きで銀髪の少女に縋る緑の髪の少女を見つつ、幸人は右手の人差し指に何故か収まっていた絶無を見る。

「どうやって脱出した」

『救出してもらった』

「人様の財布を荒らすとは……常識を知れ！ 常識を！」

『主が言うか……』

いちいち突っ込んでくる絶無を、また財布に入れようかと考えていると、幸人は重大な事を思い出した。

「まだ自己紹介をしてもらってない……」

『そう言えばまだだったな』

幸人の自己紹介発言にビクツと反応した二人が居たが、幸人は気にせず二人に向かって自己紹介を始める。

「じゃあ、改めて、オレはユキト・クガ。ユキトと呼ぶように」
『何故強制なのだ。まあいい、先ほどは我が所持者が失礼をした。古き文明の遺産、絶無だ』

「あつ……えつと“リアラ・マクスウェル”です」
「リアラの契約精霊。叡智の担い手“ソフィア”だ」

一通り紹介が済んだ所で、幸人は勝手に質問タイムに入る。

「質問……あゝそっちも勝手に質問してきていいよ。まずはオレからね。何で、ここに居たんだ？」

「質問つて……えつと……鳥と接していたんです」

「鳥と精霊“だけ”が友達か……」

「ほ、他にも友達は居ます！ ただ……ここに居ないだけです」

リアラは俯いて、消えそうな声で幸人にそう言う。

リアラの横で、ソフィアがもの凄い目で幸人を見てくるが、幸人は肩を竦めて、右手で頭を掻く。

「うゝん。まいったなあ」

『主はあまり深く物事を考えるな。感覚に従えばよい』

絶無のアドバイスに幸人は困ったように笑うと、リアラに言う。

「ねえリアラ……オレは君の事をリアラと呼ぶよ。だから君もオレの事をユキトと呼んで」

「……ユキト？」

「ああ。これでリアラ・マクスウェルとユキト・クガは友達だ。リアラが一人ならそばに居るよ。リアラが助けを求めるなら、助けるよ。そんな友達だ」

「えつ……」

戸惑うリアラに笑いかけながら、幸人ははつきりと告げる。

「ねえ、リアラ。オレと友達になってよ」

幸人は、自分の心の内を感覚に従って言葉にする。

上手く言えなくとも、せめて気持ちが相手に伝わるように。

けれど。

「みんな……みんなそう言っただけに近付きます……けれど、誰一人として私の本当の気持ちを分かってくれる人なんて居なかった!!」
「リアラ!?!」

ソフィアの制止を聞かずに、リアラは部屋から飛び出し、転送の魔法陣を使って下に降りてしまう。

「リアラは転送の魔法陣が使えるのか……追いつけるのもさせてくれないってのはショックだなあ」

『幼き頃から神子と呼ばれ、近寄ってくるのは心の汚れた人間ばかり。心の綺麗な人間達は、あの少女を神聖化し過ぎてよって来ない。嫌な悪循環だな』

「全くだ。けど、リアラも自分で周りと壁を作ってる気がするけどね。そこんとこどうなの？ ソフィア」

「あ、あたしか!?!」

心配そうに部屋から外を見ていたソフィアに幸人は話を振る。

本人が居なくなつた以上、友として側に居たソフィアに聞くしかない。

「リアラは……昔から、少なくとも私と契約した6年前から、同世

代の友達なんて殆ど居なかったんだ。仲良くしてくれる人は居た。けど、リアラが心を開かないんだ。さっき言ってた友達の人達だつて、良い人ばかりなんだけど、リアラが信じられなくて、少し距離を置いた付き合いしか出来ないんだ」

ソフィアが凄く残念そうに視線を床へずらす。

幸人はその話を聞いて、問題点を口にする。

「それなのに、リアラは周りが自分に近付いて来ないと思ってる……」

『なかなかどうして厄介だな。どうするつもりだ？』

「何とかするさ。オレはリアラと友達になりに来たんだからな」

「ま、まだリアラと友達になろうと思ってくれるのかい？」

「オレは友達のもりだよ。ただ、向こうが耳を塞いでオレとお喋りをしたくないなんて言うから、ちょっとからお喋りしたくなるようにするだけさ」

幸人はニヤリと笑うと、ソフィアと右手の絶無に言う。

「まだどうするかなんて決まってるけど、正攻法じゃリアラの壁は崩せない。だから、手伝ってもらおうよ？」

こうして、幸人と絶無とソフィアの三人による【友達になろう大作戦】が始まった。

暗い部屋の中で、一人の女が水晶を見ていた。学園の至る所に付けられたサーチャーや、様々な分野のスペシャリストにして、色杖と呼ばれる杖を使う優秀な“戦闘者”でもある教師達の警戒網にすら引つかからないエンシエント・レリック《優れモノ》である。

「面白い事になってるわね」

水晶には、幸人とリアラとソフィアが映っており、三人の会話も女には届いている。

「あらあら、拒絶なんてしちゃって。せつかく友達の居ないあなたが友達を作るチャンスだったのに……でも、流石は久我の家系。何度失敗しても諦めないのはどんな事でも共通なのね」

女は愛用のマグカップに、かなり高級だが、お気に入りの飲み物を注ぐ。

「そうよ。あなたは彼女の側に居なければならない。まるで御伽噺の少年のように……」

女は一口、その赤い飲み物を飲むと、水晶に映る幸人を、特徴的な金色の目で見つめながら言う。

「そして、神子あなたがあなたに依存した時……私が二人の仲を裂く。この私が、世界の至宝を絶望に陥れ、神子の力を手に入れる」

女はマグカップの飲み物を全て口に入れると、小さく、だが、大きな狂気を含んだ笑い声を上げた。

けれど、その女は気付かない。

女にその水晶が渡るように仕組み、自身も学園の様子を手に取るように把握し、全てを盤上の上の駒のようにコントロールしようとしている存在が居る事を。

「おやおや？ 随分と楽しそうだな」

白いフードを被った背の低い“モノ”が、一つの部屋に集った残りの“モノ”に告げる。

「しょうがないよ。彼女の悲願が達成されるかも知れないんだから」
灰色のフードを被った中背の“モノ”が、そう告げる。

「そうね。だけど、それは叶わぬ夢。神子の側にはあの子が居て、あの子の側にはあの人が居る。あんな女ではどうしようもないわ。それに……今年のある場所に引き寄せられた子供達は、なかなか優秀よ」

黒いフードを被った長身の“モノ”が、薄く笑って告げる。

この“モノ”達にとって大事なのは結果。故に、どのような過程を辿ろうと、どのような方法を取ろうと、この“モノ”達は気にしない。

けれど、結果が変わろうとすれば、この“モノ”達は手を出す。逆を言えば、この“モノ”達が介入して来なければ、良くも悪くもこの“モノ”達の手のひらの上。

黒いフードを被ったモノは、ゆっくりとエンシエント・レリックの水晶と同じ光景を映し出すモニターを見る。

そこに映った少年を見て、他の“モノ”達に気付かれないように、小さな声で言う。

「頑張りなさい。あなたを信じてるわ。世界で二番目にね」

黒いフードの“モノ”はそう呟くと、幸人から目を背けた。

幸人は知らない。

自分がどれほど重大な人間に近寄ろうとしているか。

幸人は知らない。

自分がどれだけ重大な事態に巻き込まれようとしているか。

幸人は知らない。

自分がどんなに重大な鍵を握る人間かを。

けれど幸人は知っている。

例え、どんな理由があつたとして、心が泣いている者には手を差し伸べねばならないという事を。

第六話「友達」上（前書き）

またまた上下になりました。
お読み下さい。

第六話〔友達〕上

世界間のボーダーライン

第一章〔もう一つの世界〕
第六話〔友達〕上

オレの両親は、オレが小学二年の頃に死んだ。

親戚の連中が遺産だかなんだか言ってたが、爺さんが来て、全てを丸く収めてくれた。

その時が多分、最初だ。

オレが親父の代で終わる筈だった“久我心明流”を受け継ごうと決めたのは。

久我心明流は護りの武術。爺さんはいつもそう言っていた。

人を護るとは、心と体を護る事。故に久我心明流は、人の心を知り、体を鍛え、人を護る事を本分とする。

人の心を知る。オレは未だにこの意味を正しく理解出来てはいない。分かった振りは出来ない。とても重要な事だから。

心を明かし、人を護る武術だから、心明流。

故に久我心明流は活人拳でなければいけず、扱う者は、大局的な善悪で人を判断してはいけない。久我心明流の後継者は、戦う際には常に自らの心を明鏡止水で落ち着かせ、相手を判断しなければならぬ。

オレは未だに、自らの心を明鏡止水の境地に達せられた事はない。いつも雑念が混じるのだ。

久我心明流の後継者に必要な事。

それは。

通すべき意地を持ち、自らの芯を柔らかく、けれど真つ直ぐにしておく事。

オレにはまだ、通すべき意地も、真つ直ぐな芯も無いけれど。せめて、泣いている少女に手を差し伸べる事は出来る筈だから。

友達だから、助けてあげよう。一人じゃないと分かせてあげよう。

今度はしっかりと話をしよう。

オレが話したいからなんて、自己中な理由でも、多分、問題ないだろう。グダグダ悩むくらいなら、自己中の方がマシだ。

幸人は自分の魔法の才能の無さを改めて実感していた。

あの日。リアラ達との一件から一週間が経過していた。

流石に人目が多い所で話し掛けるのは止めてくれとソフィアに言われた為、リアラが一人になるのを狙って話し掛けるのだが、毎回、リアラは軽く怯えの混じった顔で逃げていく。

繊細な心が音を立てて崩れるのを感じながら、それでもめげずに頑張っていたのだが、そんな幸人に更なる試練が待っていた。

魔法の実技授業である。

最初の3日は“魔法史学”や“精神学”なんてモノをやって予備知識や基礎の基礎を教わっていたのだが、実技が入り始めると、幸人は自分の才能の無さを実感する事になる。

初めは寮全体で行われていた実技授業も、資質などをしっかりと把握した先生達により、授業事にクラスを決められていた。

幸人が居るのはGクラス。所謂、落ちこぼれに分類されるクラスである。

30人ほどの人数でやる少数授業らしいが、普通は30人程度で一クラスである。200人以上でやる授業がおかしいのである。

幸人はそんな下らない事を考えつつ、自分の手の中にある細長い紙を見る。

今日の授業は魔力を如何に操作するについて、中年に差し掛かった女教師“レイチエル・コーエン”が教えてくれているが、紙に魔力を流し込んで伸ばす。なんて事を言われても、幸人には無理なのである。何せ未だに、魔力がどんな風なものなのかを理解していないため、どうやっても、流し込むイメージが湧かないのである。

「クガ。まだ出来ないんですか？」

「うーん、魔力のイメージが分かんなくて」

「イメージ？ 魔力を感じなさい。そうすれば分かるはずですよ」

自分の言いたい事を理解してくれないコーエンに呆れながら、幸人は何とか集中しようとするが、何故だか集中出来ない。

「集中出来ない……」

『神子との問題を解決出来ないからであろう。主の意識はいつもそこにある。だから、普段ならば簡単に出来る筈の事も出来ないのだ』

「普段つて……オレは魔力を使った事はないぞ？」

『魔力は、な。我が言っても良いが、まずは神子との問題を解決せよ。全てはそれからだ』

絶無の言葉に納得すると、とりあえず形だけ集中して、頭の中で早々にリアラの壁を崩す方法を考え始める幸人だった。

午前中の授業が終わり、お昼を食べる為に大ホールに行くと、第一学年の第二寮の生徒がやけに人が少ない事に気が付いた。

「カイルもリアラも居ない……いや、招待枠の人間達も……ABCのクラスがまだ来てないのか」

『優秀な人間達が遅いとは……少し妙だな』

「授業が長引いてるだけだと良いんだけどな」

『主も嫌な予感がするか？』

「ゼツもか……杞憂なら良いけど……」

幸人はカイル達が来るまではご飯を食べない事にし、周りの様子を見る。

周りの生徒たちはまだ気付いていないようだが、明らかに遅すぎる。

既に授業が終了してから30分以上が過ぎている。

流石に何かがあったのでは無いかと、教師陣も周りと話し始めている。

「ゼツ」

『流石に何かがあったな』

幸人は短い会話を絶無とすると、椅子から立ち上がり、大ホールを出ようとするが、目の前に黒い長衣を纏った長身の老人が立ちはだかる。

「クリフォード校長……」

「どこへ行くつもりかな？ ユキト」

「友達が心配なので、様子を見に行きます」

「他の先生方が向かっておる。もし大事になっておったらどうするつもりじゃ？」

「助けます。必ず」

幸人はクリフォードを見上げる形で、そう断言する。

目に宿った強さに、クリフォードはため息を吐くと、ゆっくりと背を見せて呟く。

「……ならば付いてきなさい。じゃが、あまり無茶は行かん」

「努力します」

幸人は小さくそう呟くと、クリフォードの背中を追った。

クリフォードの背中を追い、幾つかの転移魔法陣を渡った後、幸人は、学園に存在する森を目指していた。

「今回は三クラス合同の校外授業だったのじゃが、どうやら問題が発生したらしいのお」

「担当していた先生は誰なんです？」

「ヘリック先生じゃ、リアラには必ず色杖を持つ先生を担当にさせておる」

「ああ、あの時、オレを注意した先生か……」

幸人は、舞踏会の時に、自分を注意した教師を思い浮かべる。そう言えば、随分と強そうな雰囲気纏っていた。

「流石にあの時はヒヤリとしたわい。魔法どころか、魔力のコントロールすら出来ない生徒が、学園に侵入するほどの魔導士に奇襲を仕掛けたのじゃからな」

「ご迷惑をお掛けしました」

「殆どの先生が、君のその年で完成された武芸者としての技術と心構えに驚嘆しておった」

「ドゥーエス先生は驚嘆してませんね」

「クレタは自他共に厳しいから。特に君には厳しくなる」

「……何故ですか？」

幸人の質問に、クリフォードは困ったように笑い、ふさふさの白髪頭を撫でる。

それだけで幸人は察した。クリフォードは答えたくないのだ。

「すみません。忘れて下さい」

「気にしないでよい。ただ、聞くなら本人に聞いておくれ。あまり、他人がベラベラ喋る理由ではないでな」

クリフォードはそう言うと、右手の人差し指に詰められていた金色の指輪を抜き取ると、小さく呟く。

「来たれよ。オーラム」

【アン・シール。AURAM】

光が指輪を包み、光がやむと、クリフォードの手には金色に輝く杖があつた。

「色杖と呼ばれるものでな。昔からアルカーディアに伝わるモノじや」

「凄い存在感だな……」

「君もローブを纏うのじゃ。そろそろ森につく」

「分かりました。ローブ・セット」

【ローブ・アップ】

MPTが音声を識別し、幸人の制服が、魔力で生成されたローブへと一瞬で変わる。

幸人はローブを纏うと、自分の感覚も戦闘態勢へ移行させる。

「準備は出来た。さて、何が出て来るか……」

クリフォードがそう呟くのを聞きながら、幸人は眼前に広がる巨大な森を見た。

「宵闇の森と言つてのう。古くからこの地にある森で、学園の西方を守る天然のバリケードじゃ」

「じゃあ、人の手は入って無いんですか？」

「我々が手を加えれば、森の住民達を怒らせてしまつてな。相互の協力関係を結んでおる」

「それで、バリケードですか」

学園とこの森の人々との間に、どんな約束が交わされたかは知ら

ないが、そんな怪しい所に生徒を近付けないうで欲しい。

「森の手前で授業をしとる筈だったのじゃが」

転移魔法陣からここまで、およそ500メートルほどを駆け抜け、幸人とクリフォードは、森の手前にある開けた場所にたどり着いていた。

「クリフォード校長！」

幸人はその声に反応して、後ろを振り向くと、一学年主任のデビッド・ホーキンスが、クリフォードに駆け寄っていた。

「デビッド。何か分かったか？」

「はい。どうやら、生徒達は宵闇の森に入ってしまったようです」

「何故に？」

「この周辺に、異質な魔力反応を多数感じました。多分、この魔力反応が原因かと」

二人の会話を聞きつつ、幸人は絶無に疑問を問い掛ける。

「ゼツ。結界が張られてるこの学園に入るか、または何かを送り込む方法は？」

『生きている者が許可なく入り込むのは不可能だが、特殊な召喚魔法である“死霊付与”を使えば、送り込む事は可能だ』

「死霊付与？」

『死んだモノの靈魂を、無機物、有機物問わず、入れるのだ。外法の中の外法。未だに使う者が居るとは信じがたいが……』

「それを使えば、結界を突破出来るのか？」

『死者の霊を強制転移させ、何かに付与させる。不可能では無いが、

そのような事が出来る人間が居るとは思えん。居るとするならば、その敵は、学園の校長や教頭並みだ』

幸人は絶無の言葉に唇を噛み締める。

少なくとも、そんな奴が出てきたのならば、幸人はお呼びではない。

未だに魔力すら上手く操れない幸人が、校長や教頭並みの奴と戦う。不可能である。壁にすらなれないだろう。

自分の無力さに憤りを感じながらも、幸人の意思は萎えなかった。だからこそ、幸人は背後からの攻撃に反応出来た。

「なんだ!？」

『魔力反応……どうやら、靈魂を影に入れているらしいな』

後ろからの不意打ちをしゃがんで避けると、黒い人型の敵に身構えつつ、幸人はクリフォードやホーキンスの方を見る。

すぐに見た事を後悔した。

二人はおびただしい数の黒い人型に囲まれており、二人の姿は、隙間から僅かにのぞき見える程度である。

幸人は二人からの援護は期待出来ないと判断すると、自分の目の前の人型に再度向かい合う。

その時、ちょうど、後ろで爆音が聞こえ、同時に爆風が襲ってきた。

幸人の目の前の人型は爆風に吹き飛ばされ、幸人自身も何とか吹き飛ばされないように木にしがみついている惨状だった。

その惨状を招いた人間を見る。

ホーキンスが赤色の杖を持ち、冷たい目で辺りを見渡していた。すぐに自分を探している事に気付いた幸人は、ホーキンスに近づく。

「先生……今のは？」

「色杖のルーベルで、爆発を起こした」

「クリフォード校長は？」

「靈魂がこれ以上、学園内に侵入しないようにする。お前と私は森の中に入り、生徒を保護する。ワガママでついてきたんだ。自分の身ぐらい自分で守れ」

「言われなくてもそうします」

幸人は自分の武器である拳を握る。

出来るかどうかは分からない。けれど友達を守りたい。その気持ちに偽りはないから。

自分の友達を守りたいと言う、勝手な思いの為に、久我心明流を使おう。

幸人はそう決意すると、ホーキンスと共に、何が出るかも分からない、黒く、暗く、広大に存在する宵闇の森へと足を進めた。

第六話「友達」下（前書き）

はい、第六話の下ですって事で、目を通して下さる皆さん。おはようございます。こんにちは。こんばんは。

武道家です。

さてさて、今回で第一章は最後。

では、お楽しみ下さい！

第六話「友達」下

世界間のボーダーライン

第一章「もう一つの世界」 第六話「友達」下

幸人とホーキンスが宵闇の森に入ってから、既に20分ほどの時間が過ぎていた。

二人はそこそこのスピードで走りながら、周りに人影や痕跡が無いかを探していたが、過ぎ去った時間の間に生徒と出会う事は無く、また、黒い人型にも出会う事はなかった。

言い知れぬ不安が幸人の心の中で渦巻くが、少なくとも、森の中に入った生徒達は魔法を使えるABCの人間達である、と無理やり自分に言い聞かせる。

しかし、嫌な予感は消えず、脳内にはもしもの映像が自分の無駄な想像力を使ってリアルに再現されていく。

幸人はリアラとカイルは大丈夫だろうか、考えた所で苦笑した。少なくとも自分より強い筈の人間達である。大丈夫だと信じたいが。

幸人は知っている。余程の訓練を受けた人間じゃない限り、突発

的に起こった非常事態への対処は難しいという事を。

また、戦闘という、相手が居る状態での慣れない興奮や緊張感は、容易に人の冷静さを奪う事を。

そんな事を考えていると、幸人は一つの疑問を抱く。

「ホーキンス先生」

「何だ？」

「リアラは何故、第二寮で授業を受けているんですか？」

「……名前で呼ぶまで仲良くなっているのに、聞いてないのか？」

ホーキンスが呆れたような目線を、走りながら幸人に向けてくる。少し上から降り注ぐ嫌な視線に耐えつつ、幸人は話しを続ける。

「オレが勝手に呼んでるだけです。まだ話もろくにしてません」

「マクスウエルは第二寮の生徒だ。置かれている立場の関係で、本城での暮らしを余儀無くされているが、校長は、身の安全が保証された時点で……彼女に普通の学園の生徒と同じような生活をさせるつもりなのだ」

幸人はホーキンスの言い方に、その考えへの好意を感じ取った。

「先生は……リアラを特別視しないんですか？」

「悔るな。これでも教師だ。生徒の立場によつて態度など変えん。

それが例え神子でもな。それに、私たちまで特別視してしまえば……

……彼女の心は折れてしまうだろう」

「……正直、先生たちがそんなにリアラの事を考えてるとは思いませんでした」

「私たちからすれば、お前が“授業に集中出来ない”ほど、マクスウエルについて考えている事にびっくりだ」

幸人は思わず木の根に足を取られそうになり、慌てて体勢を立て直す。

「バレてましたか……」

「彼女の容姿に惚れたとかならまだ叱りようはあったのだが……皆、困っていたぞ」

「すみません。何とか友達になるうと思って……って言うか、オレは友達になつたつもり何ですけど……」

「彼女の心を開かせるなど、並大抵の事では無いぞ？ それこそ、私たちのここ最近の悩みだからな」

ホーキンスは小さくため息を吐き、幸人を見る。

幸人はその視線に、行動するなら早くしろ的な意味を感じたが、深く考えたら更に頭が痛くなりそうなる為、その考えは頭から放棄した。

その変わり、他の事に意識を割いた。

それは、森の手前のであまりの綺麗さについてだった。

あの黒い人型に襲われてやむ終えず、森に入ったにしても、多少の迎撃はした筈。

幸人はその考えをホーキンスへ告げる。

「先生。1クラス30人弱として、あの人型に襲われ、森に逃げ込んだ生徒は90人弱。その中で、あの黒い人型を倒せるほどの力を持った生徒は何人居ますか？」

「精神状態などにも左右されるが、1対1なら、誰もが勝てるだろう」

「なら、森に逃げ込まずに戦おうとする人間達も居る筈ですよ？ けど、戦った痕跡はなかった。仮にも教師が付いている状況で、全く戦闘もせずに危険だと分かっている森へ普通は逃げ込みますか」

？」

幸人は心配していた。逃げずに戦う人間達の事を。

幸人が心配する事では無いが、何らかの犠牲が出れば、この襲撃で狙われた人間が心を痛ませる。それは幸人の望む所では無い。

けれど実際は全く戦闘の後は無く、生徒達は森の中に“全員”逃げ込んだようである。

未だに犠牲は出ていないが、最悪“教師でもかなわない”敵が居る可能性がある。

「もしかしたら……かなり強力な敵が……」

「クガ……着眼点は良い。おかげさまで、私の疑問が解決した」

「？……疑問ですか」

「校長は予測していたのかもな。少なくとも、お前は“鎮圧には有効な戦力”だ」

「鎮圧？ まるで……」

幸人はホーキンスが言わんとしている事を察した。だが、それはあまりにも現実離れしていた。魔法を使ったとしても。

「出来るんですか？」

「ああ、かなり高度な技術と膨大な魔力が必要で、一時的な効果ではあるが、死霊付与は……人間への付与が可能だ」

「じゃあ……生徒達は……」

「大半は操り人形だろうな。死霊付与とは言え、魔力を使った魔法だ。とつさに防御魔法やローブを強化すれば防げる……が、普通の生徒じゃ反応すら不可能だ」

幸人は思わず声を失う。

ホーキンスのその予想が正しければ、今現在、宵闇の森の中に居る生徒の大半が死霊に操られており、しかも、全く操られているかの判断がつかない状態だという事だ。

リアラやカイルならば、死霊付与は防げた筈だが、それはあまり救いにはならない。死霊付与を防いだ生徒は、同じ生徒に現在進行形で追われているという事になるからだ。

そこに至って幸人は、自身も危険である事を理解した。

「先生！ オレはっ」

「校長が何のために私たちに任せたと思っている。校長が防いでくれる。私たちは、森の惨状をどうにかすれば良い」

「あっ……はい！」

幸人は校長の先読みで舌を巻きつつ、周りの空気の変化に集中した。

それは最初は小さな変化でしかなかった。けれど、直ぐにそれは“違和感”へと昇華した。

「先生」

「分かっている。一度止まるぞ！」

二人は、戦いやすそうな開けた場所に入ると、一度足を止めて、周りを囲むように近付いてくる気配を調べる。

「10、いや、12か」

「分かるなら結構。出来るだけ傷を付けるな。特に女子はな。傷物にしたなら、私は知らんぞ」

「先生こそ、火を使って森を燃やさないで下さいね」

背中合わせに軽口を叩きつつ、幸人は体に力を込める。いつもよりもしつかりと体に力が漲った。

「クガ。いつの間に魔力を操れるようになった？」

「いえ……ただ気を体に流すイメージをしただけ何ですけど……」

「今まで蛇口を閉めていたのが、多少なりとも開いたから、武術の気が魔力に置き換わったのか」

「これが……魔力」

幸人は体に漲る力に戸惑いつつ、自分とホーキンスを囲んでいる人間達をみる。それぞれローブを着ては居るが、生徒達だった。

「さてと……あまり時間は掛けられん。直ぐに片付ける」

「簡単に言わないで下……さい！」

幸人は、木の陰からこちらを狙っている生徒の一人へ駆け出し、自分のスピードに戸惑う。

割と軽く走って、20メートルほどを数歩で移動してしまい、木の直ぐ横につくハズが、多少奥に行ってしまった。

「こりゃあ便利だが、鍛錬の有り難さを忘れそうだな」

「幸人。あまり強く殴るなよ？ 今の主の攻撃力は魔導士から見ても脅威だ」

「ちょっと信じられないけど……そんなじゃ手加減しますか！」

幸人は、紫のローブを着た男子生徒が向けて来た杖を接近して蹴り上げると、腹部に手を添えて、そのまま押し込んで木に叩き付ける。

幸人の掌底に、少年は体をくの字に曲げて、木にめり込む。

「っ!?! まじかよ……」

「だから言ったたであらう。魔導士から見ても脅威だと。理由は後で説明する。今は五分程度の力で戦え」

「りよーかい!」

幸人は後ろから杖を振りかぶって迫ってきた少年の杖を掴み、腹に前蹴りを叩き込み、首の裏に手刀を軽く叩き込む。

その隙をつく形で、周りの人間達が動き出し、幸人の前に一人の少女が杖を構えて出て来る。

「魔法が来るぞ!」

【ストレート・ショット】

聞こえてきた魔法のトリガーワードは、初歩的だがそれ故に戦闘では活用出来る直射型の魔力弾。

基本的には物や障害物を破壊する魔法だが、そのスピードと魔力の込め方で威力が変動する性質は、戦闘でもしっかりと使える。

向かってくる魔力弾を右に避けようとするが、とつさに自分の勘に従って、下にしゃがみこむ。

着弾は三つ。全て木に当たったが、幸人が左右のどちらかに動けば当たる軌道で、しかも死角から放たれた。

辺りに目をやれば、それが一人の少女の指示である事がわかった。

「あの少女は策士だ。早めに潰せ!」

「言われなくても!」

残りの三人に無表情で指示を出す栗毛のショートカットの少女に向かって幸人は走り出す。

「招待枠の子だ！ 確か、マルチ・シンクが得意な子！」

『気を付ける。その少女のマルチ・シンクの数は膨大だ。どんな選択肢も予想してくるぞ！』

「考える前に……反応出来ない速度で潰す！」

幸人は地を這うほど体勢を低くし、地面を全力で蹴る。少女との距離は約45メートル。本気ならば一瞬で縮められる距離である。

地面を爪先で蹴り、半ば低空飛行のような走り方で、幸人は少女の側まで近寄る。

「はっ！」

少女の杖を右手で押さえ、左手で首に手刀を打ち込み、意識を刈り取る。

幸人は残りの二人にも同じような方法で近付き、意識を刈り取る。最後の一人は、幸人が行く前に自分から近寄ってきた。

【ストレート・ショット】

直射型の魔力弾の連射を避けつつ、幸人は走ってくる少年の攻撃に違和感を感じた。

まるで当てる気がない。気を逸らす為の攻撃だった。

『幸人！』

「わかった！」

幸人は地面にしゃがみこんで、手に土を握り、少年の顔に向かって投げつける。

少年は土が目に入り、思わず体勢を崩す。少年の肩越しに見た後ろには、最初の攻撃でノックアウトしたと思った少年が杖を構えていた。

「意識が残ってたか！」

『マズい！ 純戦闘用の魔法を使う気だ！』

「純戦闘用ってそれはマズいだろ！」

幸人は射線上に居る少年を横へ回し蹴りで吹き飛ばす。

【ストレート・ランサー】

『間に合わん！ 我を突き出せ！』

「はあ？ こうか!？」

幸人は高速で向かってくる巨大な魔力の槍に向かって、絶無を填めている右手の拳を繰り出す。

右の拳が魔力の槍とぶつかり、魔法が絶無の中に吸い込まれ、跡形も無くなる。

魔法を放った少年は力尽きたのか、グッタリと地面へ倒れ込んでいる。

「ゼツ。お前」

『我は対魔導士を想定して古代文明に作り出された魔具だ。当然、待機状態でも魔法の吸収ぐらいは出来る』

「待機状態？」

『言わなかったか？ 我の本当の姿は、所持者が求める武器の姿だ。この姿は待機状態だ。まあそれは追々必要になったら教える。今は

急げ』

「あ、ああ！」

幸人は絶無に促され、少年達を担いで、先ほどの場所まで戻る。先ほどの開けた場所には、既に幾人かが寝かされており、先ほどの栗毛の少女も居た。

多分、幸人が戦闘をしている間にホーキンスが保護したのだろう。幸人は肩に担いでいた二人の少年を下ろし、何やら集中しているホーキンスに声を掛ける。

「先生！」

「終わったか？ 私も終わった。だが、事態は思ったよりも最悪だ」

幸人は、ホーキンスの苦虫を噛み潰したような表情に不安を覚える。

「何かあつたんですか……？」

「マクスウェルがどこかで“浄化の波動”を使った」

「浄化の波動？」

「神子が生まれた時から本能的に使える特殊な魔法の一種だ。マクスウェルはそれでこの“森”に居る死霊を全て浄化した」

「じゃあ、全て一件落着じゃ」

「神子が本能的に使える魔法は、強力だが、消費も激しい。今はまともに動けないだろう」

幸人は先ほどのホーキンスの行動が魔力の探查だと気付いた。

「けれど、当面の危機は」

「去っていない。私たちが最初に死霊と出会ったのはどこだ？」

「森の……外……」

呟いた瞬間。幸人の顔が一気に真っ青になる。

幸人は何とか頭を働かせようとするが、上手く働かない。

「死霊がどんな速度で森に入るか分からんが、早く見つけなければ、マクスウエルが危ない。敵はこの瞬間を狙っていたのだろう」

「くそっ！ 先生！ 手分けをして探しましょう！！」

「ダメだ。この森では念話や電話などの通信は出来ない。お前がマクスウエルを探し出した所で、森から出れなくなるのが関の山だ。それに……もしもお前が勝てない相手だった場合を考える。マクスウエルの心を開かせようとしているお前が、一生の門になりかねないぞ」

「っ！！？……けど……オレは……」

「気持ち分かる。だからお前も神経を研ぎ澄ませ。反応を見つけたら、私に一声掛けて走れ。いいな？ 一秒の遅れでも命取りだ」

ホーキンスはそう言うと、幸人を自分とは反対の方向へ向かわせる。

幸人はホーキンスのような探査魔法は使えない為、自分の神経を研ぎ澄ませ、僅かな反応を逃さないようにするしか方法はなかった。幸人は意識を集中させている時に、昔、祖父に言われた事を思い出した。

誰かの声を聞きたいと思ったならば、心を開け。さすれば、向こうの心の声が聞こえる。

よっぽど自分より魔導士っぽい祖父に苦笑しつつ、幸人は自分の心を開くイメージを頭の中で描く。そして、リアラの声の頭の中で思い出す。

忘れない。綺麗な声だった。けど、それ以上に、泣きそうだった

最後の声は忘れない。

リアラの心の声。

敵が目の前に居るならば、怯えているだろう。そして紡がれる言葉は。

『……………けて……………』

耳に確かに覚えのある声が届く。幸人は目を開いて、ホーキンスに声を掛ける。

「先生！」

返事を待たずに、先ほどの小さな声が聞こえた方向へ向かう。

『合っているぞ！ 向こうに魔力反応が四つ。そのうちの二つはリアラとソフィアだ！』

絶無はそう言うが、幸人は言葉を半分程度しか理解出来ないほど走る事に集中していた。

どこに足をつき、どのような蹴り方をすれば最高のスピードを出せるか。

その成果か、幸人はホーキンスすら“魔力反応”で追うのがやっとという速度を出していた。

「くっ！ なんてスピードだ……………それにここまで離れた場所の声をキャッチするなんて……………どれほど感受性が高いんだ?!」

ホーキンスは呟きながら、強化魔法に魔力を込めるが、幸人には追い付かない。

幸人の強化は魔力による“内部”からの運動能力の上昇で、ホー

キンスの強化は魔法による“外部”からの運動能力の上昇である。

幸人の場合、元々の運動能力が高い為、魔力を込めれば込めるほど本人の運動能力は上がっていくが、ホーキンスの強化魔法は、魔法を構成し、あくまで“補助”する為のモノで、幸人の魔力強化ほどのスピードは出せないのである。

そこまでのスピードを魔力強化で出せるのは、幸人の身体能力がずば抜けて高いからである。基本値が違う為、他の人間達が同じ事をやれば、普通は強化魔法を使っている人間がスピードでは勝るはずなのだ。

「土壇場での集中力……あの年で大したものだ」

ホーキンスは思わず幸人に賛辞を送る。

幸人の力の源は集中力。走っている際の無駄な魔力は全て排除し、次に動かすべき部位に排除した分の魔力を上乗せし、更にそれを次の部位へ、と続けているのである。それは魔力の効率の最適化。魔法を使う上で最も必要なことである。

魔力の扱いは殆どが集中力で決まる。

その点で言えば、土壇場では無尽蔵の集中力を誇る幸人は、魔力の扱いについてはかなり特化していると言っても過言ではなかった。

『近いぞ！』

絶無の掛け声を何とか理解した幸人は、スピードに乗った状態で走る事に特化していた意識を戦闘体勢へ移行させる。

数瞬後、開けた場所に出た。

明らかに不自然で巨大な青い装甲の鎧が二体。木の側まで、誰かをギリギリと追い詰めていた。

その光景を見ても全くスピードを緩めず、足を動かして、幸人は

青い鎧に向かって跳び蹴りを放つ。

伸びた右足が一つの鎧を吹き飛ばし、もう一つの鎧を巻き込んで倒れる。質量の関係で、幸人も反動を受けるが幸人は空中で体を捻り、リアラたちのそばに着地できるように調整する。

幸人は着地する瞬間に、鎧がまだ起き上がらないことを確認すると、着地と同時に木の側まで移動する。

「ソフィア！ 走れるか!？」

「えっ！ だ、大丈夫!!！」

幸人はその確認を取ると、意識はあるが体中の力が抜け、グツタリと木に寄りかかっていたリアラの肩と膝裏に手を入れ、横抱きの状態で立ち上がると、再び鎧の動きを確認する。

鎧は既に起き上がっており、ホーキンスが追って来ているだろう道に立ちふさがっている。

「向こうに行くのは無理か……まあいい。ソフィア！」

幸人はソフィアに声を掛けると、リアラに負担を掛けないように配慮しながらも、鎧から逃げ切る為に走り始める。

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

腕の中でグツタリとしているリアラに幸人はそう声を掛ける。

「何で……」

「ん？」

「何で……来てくれたんですか？」

「うん。友達を助けるのに理由があるかな？ まあしいて理由を挙げるなら“友達”だからさ」

それを聞いて、リアラは幸人の白いジャケットを握る。

「私は……」

「オレはもう友達のもりだ。名前で呼んで、喋って、一緒に居て楽しければ友達だろ？」

「……ユキト……」

「そうそう。そうやって名前で呼んで。下らない事でも喋ったり出来るのが友達。あと……助け合うのみな。助けてって言っただろ？」

リアラは目を見開く。

浄化の波動で体力と魔力を失ったリアラはソフィアの助けで、開けた場所で休んでいた。そして自身も魔力を失い、ソフィアもかなりの魔力を詠唱中のリアラを守る為に使っていた為、全く身動きが取れないという状態で先ほどの鎧が現れたのだ。その時、リアラは確かに、一度だけ助けてと叫んだ。

まさかそれを聞きつけて助けが来るとは思いもしなかった。

「魔法……使えないんじゃない……」

「へっちゃらへっちゃら。魔力の身体強化でどうにかなったよ」

リアラは幸人のローブを見る。

多少の事では破けないローブが所々破れ、肌が傷付いている。魔法や魔力の籠もった武器がかすった証拠だ。

少なくとも、自分よりも魔力が少なく、使える魔法が無く、弱い男の子のハズなのに。

駆け付けてくれた。友達だからと。

聞きつけてくれた。助けてと言ったからと。

心配してくれた。大丈夫かと。怪我はないかと。

自分がかすり傷とは言え、酷い格好なのに。

「…………ごめん…………なさい…………」
「ごういう時は違う言葉を使うんだよ」

優しく笑いながら、幸人は涙を流すリアラにそう教えた。

人からの無条件での優しさに慣れていないのだろう。けれど。

友達なんてそんなもんだ。一緒に居て気が楽で、楽しくて。自分が厄介な時に助けてくれて、相手が厄介な時は助けて。相談事に乗って、乗られて。

だから、友達は素晴らしい。

少なくとも、幸人にとって、カイルと話していた時は気楽で、リアラと居た時間は楽しかった。

幸人はそう思い、カイルの事が気になったが、後ろの鎧がスピードを上げた事によってその考えは霧散する。

これ以上のスピードはリアラにとってはかなりの負担で、ソフィアももう限界だろう。

かと言って、あの鎧に打撃が効くとは思えない。

記憶が正しければ、あれは魔法史学の教科書に乗っていた魔導人形で、この学園を警備している最新鋭バージョンであるハズ。

装甲自体に魔法が掛かっており、射撃系の魔法はよっぽど魔力を込めなければ弾かれる。打撃も先ほどのように衝撃は伝えられても、決定打は有り得ない。更に、思った以上に俊敏で、当てられるかも定かではない。

どうしたものかと考えていると、少し先に慣れた気配を感じた。

幸人は思わず笑いながらリアラに言う。

「友達同士の連携を見せてあげるよ」

幸人はそう言いつつ、ソフィアに合図をしたら飛ぶように伝える。

幸人は自分の友人が動くのを待った。
わざわざ正面で、しかも、自分でも分かるほどの魔力を溜めていたのである。

当然、一撃で仕留める気だろう。

自分達はただ、その巻き添えを食らわないようにするだけ。幸人は自分にそう言い聞かせると、集中する。

そろそろ、幸人とソフィアは青い魔導人形の射程圏内に入る。あともう少しという所で、正面で構えていた友人は幸人も真つ青なスピードで突っ込んできた。

「今だ！」

ソフィアに合図を告げ、幸人もリアラに負担を掛けないように跳躍の溜めを作る。

目の前には、なかなかに凜々しい顔をした友人が、杖を両手に構えて突き出しながら、こちらに突っ込んで来ている光景があった。

「ユキトおおお!!!」

「ナイスだ！ カイル!!!」

幸人は出来るだけ高く跳躍して、カイルと青い魔導人形との間から居なくなる。

邪魔するモノが無くなったカイルは、杖を槍のように突き出し、青い魔導人形に突っ込む。

【マギ・エッジ・ランス】

青い魔導人形と衝突する少し前に、カイルはトリガーワードを唱える。

カイルの黒い杖の先から魔力で出来た槍の穂先が生まれ、先を走

ついていた魔導人形を貫き、少し後ろを走っていた魔導人形をも貫く。幅1メートル、長さ5メートルほどの輝く槍の穂先が魔導人形を貫き、カイルに押されるがままに後ろへ下がって行く。

カイルは自分の勢いが止まるのを確認すると、足に力を入れ、全体を使って槍《杖》をそのまま横へ薙払う。体を半分にされた魔導人形は流石に活動を停止し、動かなくなつた。

幸人は、見事にあっさり勝利を収めたカイルに感心しつつ、自分の心配はとにかく杞憂だった事を実感する。

何故なら、カイルが“汚れ一つない”ローブ姿で、全く疲れた様子を見せていなかったからだ。

「かなり余裕みたいだな……」

「僕は死霊付与を防いだ人間達の護衛だったからあまり戦わなかったんだ」

「今ので本日のMVPはお前に決まったよ……」

幸人は疲れたようにため息を吐くと、リアラを木に寄せ掛ける。

「ありがとう……ごじます……」

「大丈夫なのかい？」

ソフィアがリアラの顔を覗き込むように見る。それを見て、幸人はカイルに視線をやる。

幸人の意を組んだカイルは、リアラに近付き、脈やら何やらを調べ始める。

「魔力と体力の大量消費による疲労困憊状態って所だな」

「解決策は？」

「寝ること」

「だそうだよ？ 後の事は任せて寝たら？ 眠たいでしょ？」

幸人はリアラの髪を優しく撫でながら、そう呟く。

「じゃあ……お願い……します」

目を閉じたリアラは直ぐに穏やかな寝息を立て始めた。

「ソフィア。リアラを運べる？」

「ちよつと無理。リアラの魔力が殆ど無いから、あたしにも魔力が殆ど残ってないんだ」

「精霊なの？」

「契約精霊は、契約者の魔力によってこの世界に存在している。普通はここまで巨大な力を持つ精霊が人と契約を交わす事は無いはずなんだが……」

少し大きな声で説明していたカイルは、途中で言葉を区切る。

幸人とソフィアから、非難の眼差しを向けられたのだ。眠るリアラを見て、カイルは意味を察すると、困ったように頭を掻く。

「クガ！無事か！？」

もう一人。空気の読めない人間が来た事に幸人はため息を吐くと、立ち上がるうとしてやめた。

リアラの右手が、幸人の左の袖を強く握っていたから。

解くのは簡単だが、それはではあんまりなので、幸人は座ったままホーキンスに無言の非難を投げかけた。

森を抜けるまで、リアラを運ぶのは幸人がやる事になった。ソフィアが幸人に頼んだのだ。

それ以前にカイルは辞退し、ホーキンスも、本人が嫌がる。と言つて辞退した為、幸人がやる事は必然だったのだが。

今はもう直ぐ森の出口に差し掛かる辺りで、念話などの通信手段が回復したのもあつて、ホーキンスが教師陣にMPTで連絡を取っている。

「分かった。それでは、治癒室直行の転移魔法陣を用意しといてくれ」

ホーキンスはそう言つて通信を切ると、幸人に向かって、笑いながら報告する。

「ドゥーエス教頭がカンカンらしい。私は知らないぞ？」

「マジかぁ……どんな地獄が待ってるんだ……？」

「二時間程度の説教で済むだろう」

「程度つて……」

幸人は寝ているリアラを起こさないように、体の芯を真つ直ぐ崩さないように歩きながらため息を吐く。

ソフィアがこちら哀れみの目を向けてくる為、余計に悲しくなつてくる

「生徒の救出の手伝い。誉められても良いと思うんだけどなぁ」

「その前に、無断での同行や様々な無茶による自身の身を大切にし

ない行動を怒られるべきだ」

「無断じゃないし、自分の身よりもリアラが心配だったんだ。お前の事だつて心配したんだぞ？ 無意味だったけど」

「気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとう」

「本当に気持ちだけ受け取りやがったな……」

カイルの気のないありがとくに顔を引きつらせつつ、幸人はソフィアを見る。

「リアラもちよつと余計な心配だったかなあ？」

「そんな事ないぞ。あたしはリアラと少しでも精神的に繋がってるから分かる。今、リアラは本当に嬉しそうだ。ありがとうな。色々な意味で救ってくれて」

「救ったんじゃないさ。ただ、リアラの心の声を聞いただけさ」

穏やかに眠るリアラの顔を見ながら、幸人は軽く笑ってそう言った。

「難しい事言わずにありがとうを受け取れよ。あたしが人を誉めるなんて珍しいんだぞ？」

「本当にその気持ちをドゥーエス先生にもちよつとは……」

対面で喋っていたソフィアの顔が明らかに引きつったのを感じて、幸人は辺りを見渡す。何故か、いつの間に明るい場所に出ており、学園の教師達が凄く微笑ましそうに幸人を見ていた。

「私が……何ですか？」

「い、いえ……何でもありませんよ……」

幸人の後ろには、静かにドゥーエスが佇んでいた。発せられる努

気に圧迫され、幸人は体中から冷や汗を流す。

「マクスウェルさんは私が預かるわね」

うるさくなるのを察知したのか、アンナが幸人の腕からリアラを受け取る。

「クガさん。まず、年頃の女性の寝顔をまじまじ見るのは最低です」「は、はい……以後気をつけます……」

「それと、私は舞踏会の時に言った筈です。魔法を使えない者が魔導士に挑むのは危険だと。今回は、グランディオさんの助けがありました。けれど、毎度毎度、友人があなたを助けてくれる訳ではありません。分かりますね？」

「はい……」

「それに……あなたが危険を冒せば、助けに行く友人だって出て来ます。あなたが向かうように。良く考えなさい。そして、それでも言うならば、我々先生方に頼りなさい。あなたが救いたいと思う人は我々にとっても大切です。世界はあなただけではないのです」

ドゥーエスはそこで一旦言葉を切り、あまり表情を変えなかったが、多分、多少笑ったのだろう。

「ただ、あなたの行動で救われた人間が居たのも事実。良くやりました。そこは賞賛に値します」

「えっ？」

「賞賛に値する行為にはしっかりと賞賛を、小言が必要なならば小言を。私はそう言う人間です。後で校長とホーキンス先生は小言ですからね？」

ドゥーエスの言葉に、校長はほっほっほと笑い、ホーキンスは世

にも情けない顔をした。

そんな教師陣から離れ、幸人はアンナとソフィアと一緒に治療室までリアラ送った。

「なかなか立派だったわ。これからも頑張りなさい」

「努力しますよ。ほどほどに」

アンナは幸人の返事に苦笑すると、幸人とソフィアにリアラを任せ、自室へ繋がっている魔法陣に乗って、薬を取りに行った。

幸人はリアラの髪を撫でる。

せめて、見ている夢が良い夢であるようにと祈りながら。

できれば、その夢に自分が“友達”として出ている事を祈りながら。

第二章 第一話〔朝練〕（前書き）

一日に二話投稿！

って事で、皆さん。おはようございます。こんにちは。こんばんは。武道家です。

この話から第二章です。学園でのほのぼのを掛けねばと思っています！

では、お楽しみ下さい！

第二章 第一話〔朝練〕

第二章〔魔法の勉強〕

第一話〔朝練〕

幸人は灰色のジャージで身を包み、まだまだ寒い朝の下、本城近くの中庭で稽古に励んでいた。

しかし、今回は今までとはちょっと違う。

「さてと、そろそろ始めるか？」

「始めますか？」

黒がすこし入った金髪と透き通る銀髪のお客様が居るのだ。

話は3日ほど前に遡る。

宵闇の森の襲撃事件から1ヶ月ほどが経ち、幸人達はとりあえず、平凡な学園生活を送っていた。

今日も今日とてGクラスで悪戦苦闘して、げんなりとしながら大ホールに入った幸人に、友人が“二人”声を掛け、席に呼んでくれた。

「今日もまた出来なかつたんですか？ ユキト」

「一日で何かが変わる訳ないでしょう。特にコイツなら」

「二人とも……もうちょつとオレの心を労る発言が出来ないかなあつて思うのは間違つてる？」

「ああ」

「即答!？」

席に座るなり、軽口を叩く二人に、背中まである銀髪に、透き通るような蒼い目。そして、幸人のアルカーディア美人ランキングでは首位タイである“リアラ”は手を口に当てて、上品に笑う。

最近は笑う事が多くなり、こうして一緒に行動する事も多くなつた。

一方、黒がすこし入った金髪に、深い青の目、そして男性部門での首位である“カイル”は、そんなリアラに最初こそ神子と言う事もあり、変な態度を取っていたが、今ではなかなかどうして普通に会話を楽しむ程度は出来るようになっていた。

まあこちらに関しては、本人の努力三割と。

「あらあら、楽しそうな会話ね。私も混ぜて」

「クレア!？」

「どうぞどうぞ。カイルくらいしか出せませんが」

「うん、しょうがないわね。カイルで我慢するわ」

この自称“カイルのお姉様”である、リアラと並んで、幸人のアルカーディア美人ランキングの首位に立つ、金髪赤目の生徒会長“クレア”の説教もとい調教の賜物だろう。

とりあえず、カイルの横の席をクレアに譲り、文字通り、カイルを生贄に“出した”幸人は、リアラの隣へ移動する。

六人掛けの席なので、まだまだ余裕はあるのだが、向こうに居ると、心をクラッシュユされかねない為、幸人は癒し系のリアラの側までやって来た。

「ソフィアはどうしたの？」

「鳥達と集会に行くって言ってたわ」

「ここら辺の鳥は集会を行うのか……恐るべし魔法生物！」

ソフィアは変身系の魔法を多数使える。どんな場所でもリアラと一緒に居られるようにと言っていたが、多分、このお姫様は白い小鳥に変身してまで一緒に行かなきゃ駄目な場所には行かないと思う幸人だった。

鳥の意外なコミュニケーションの発覚に驚いていると、リアラが幸人の肩越しに視線をやり、柔らかく微笑んだ。

「こんにちは。サナさん」

「はい。こんにちは。マクスウェルさん。ここ。良いかしら？」

幸人の少し後ろに現れたのは、栗毛のショートカットに、黒い目をした小柄な少女だった。

リアラが160あるかないかだが、この子は多分、153とか4程度しか無いだろう。

けれど、幸人が驚いたのはそこでは無い。幸人はその少女を知っていた。

知っていたと言うか、かなり危うい一歩手前までの状況を作り出され、危険と判断して、首に手刀を入れる。なんて事をやり合った仲な為、知っていると言うのもおかしい。

「何か？」

「……えっと首、大丈夫？」

「ふん！」

「ぐっ！」

少女に尋ねた幸人は、返事の代わりに踵での臍打ちを食らい、思わずテーブルの上に倒れて悶絶する。

「お陰様で“一週間”くらい痛みが抜けない程度で済んだわ」

「……物凄く根に持つてるだろ？ 君」

「何のことかしら？ 別に、気にしてないわ」

気にしてないわ。の語気が明らかに強くなった事を感じて、幸人はため息を吐く。

死霊付加を防げなかった自分が悪いと返すのも簡単だったし、オレはあっちこっち傷だらけにされた、なんて返す事も出来たが、あんまり言つとリアラが気にする為。

何より、女性を殴って男性は無条件で悪いと判断し、幸人はサナと呼ばれた少女に謝った。

「悪かった。他に手が無かったんだ。君が周りを指揮してたからね」

「……いえ、私こそ迷惑を掛けたわね」

「気にするな。お互い様さ。オレはユキト・クガ。君は？」

「サナ。サナ・フォーエンハイムよ」

幸人はサナに右手を差し出し、サナも右手を掴む。

「これで二人はお友達ですね」

いきなりテンションが上がり、音符でも付きそつなご機嫌さでアラが言う。

「サナは何組なの？」

「Aよ」

「ですよね。オレが周りに追い付けるのはいつになる事やら……」

「久我君は有名よ。色々とね」

「色々つて……どんな感じ？」

幸人はサナの薄い笑いに恐々しつつ、その色々を聞いた。

「噂によると、ドゥーエス先生のライバル。噂によると、実は神子のお忍び護衛。噂によると、地球の特殊な戦闘民族の戦士」

「……オレつて……」

「どれが本当なの？」

「どれも嘘だあ……」

大ホールの一角でわいわい騒ぐ幸人を“沈める”為に、ドゥーエスが動き出したのは言うまでもない。

そして、文字通り、机に沈んだ幸人は、ふとした時に、独り言を呟いた。

「くそ、いつかあの人を見返せるように……よし、朝練を頑張ろう！」

その独り言を聞きつけた人間が二人おり。

今、黒と青のジャージ姿で幸人の前に居る訳だった。

数日前の自分の不用意な発言が原因であると判断した幸人は、それでもと二人を見て言う。

「何故居る？」

「朝練をやる為だ」

「朝の練習をする為です」

言い方は違えど、大して変わりのない返答にイラつきつつ、更に言う。

「オレがやってる目的を言ってみようか」

「自分の力を上げて」

「私達に追い付く為ですよね？」

何故スイッチして喋った、というか、確実に分かっているだろうと、幸人は二人を見る。

片方は真面目な顔、片方は嬉しそうな顔。

ああ、分かっているんだこの二人と、幸人はまだ明るくならない空を見上げる。

「どうしたんですか？」

「眠いなら朝練を止めるか？」

「二人に追い付く為にやってんのに！二人が参加してたら追い付けないだろっ！？」

二人はその幸人の言葉に納得したように、ああ、と呟いた。

軽い目眩に襲われつつ、天国の父と母に、自分の友達の無垢さを

報告するという現実逃避をし、幸人は戻ってきた。

「じゃあ、私達がユキトの先生役をやります」

「僕達が鍛えれば、短期間で実力は伸びるはずだ」

「オレを思っ言ってるんだ……オレを思っ言ってるんだ。悪意はない。悪意はないんだ」

確実な上から目線に自分の自制心を総動員して、心を落ち着かせると、それだけの差がある事を理解する。

だが、負けてばかりもいられない。こちらも得意分野や逆襲しなければ。

「分かった。だが、教えられてばかりも癪だから、オレも二人に近接格闘を教える」

「良いだろう」

「はい」

「純粹な二人が羨ましい……」

何の抵抗も無く了承した二人と自分の差が、まず心にあるのでは無いかと真剣に悩みつつ、幸人はカイルとリアラに教えを請う。

「さてと、難しい説明は理解出来ないだろうから、簡単に説明するぞ」

「そこはかとなく、馬鹿にされた気がするが、頼む」

「よし。まず魔法とは、自分の魔力を使って様々な事を起こす方法だ。自分の魔力が動力で、魔法が機械だ」

「分かりやすいな……」

カイルは、自分の手の中に小さな火を浮かべる。

「このような自然現象を属性魔法または自然系。魔力をエネルギーに変換したのが変換魔法または無属性」
「ほうほう」

手のひらにあった小さな火に魔力を注ぎ込み、ボールくらいの大さまで膨らませる。

「風船と一緒だ。空気、つまり魔力を注ぎ込めば大きくなるが、風船、つまりその魔法の限界の大きさ以上に力を込めれば暴発する。どの魔法にも、限界はある。限度ラインの高低はあるけどな」

「風船か……」

「だから魔力のコントロール。送り込む空気の調節が大事なんだ。また、魔法、つまり風船は、自分の頭でイメージして、頭の中で正しい構成をなぞらなければ、出現しない」

カイルの右手の前に魔法陣が出現し、上空に魔力弾を飛ばす。

「簡単な魔法は、色々と省略しても出来るが、よっぽど急じゃない限りはトリガーワードを唱えた方が良い」

「そう言えば、トリガーワードだけを詠唱破棄って言って、何にも言わないのを無詠唱って言うけど、難しいのか？ 戦うんだったら無詠唱が一番何だけど……」

「人それぞれに向き不向きがあつて、頭の中での魔法構成が早く正確な人間は無詠唱を得意するし、逆に、頭の中での構成が遅い人間は、全てのワード《呪文》を口にします。その人によつてさ」

カイルの言葉に納得すると、今度はリアラが説明をし始める。

「さて、次は私がしますね。魔法を使う魔導士には幾つかあつて、戦闘を主にする戦闘魔導士。これは軍人や治安維持機構、後、聖ク

リスティーナ教会の教会騎士も入ります」

「先生達は？」

「先生方も優秀な戦闘魔導士ですけど、あの方達は第一が教師の仕事ですから」

「多才な方々な訳か……後は？」

「その職業にあった魔法を使う職業魔導士。これは土木や建築、MPTの製作やロープの作成などです。普通の魔導士はこれに属しますね。特殊なので人の傷を癒やす治癒士^{ヒーラー}。ちよつと資質に頼る反面、重宝されます。後、職業魔導士の変則系で技巧魔導士。何かに特化した魔導士がこの魔導士です。結界や魔力付与^{エンチャント}は特殊な技能が必要なので、専門職とも思つて下さい」

なかなかザックリしている分け方だが、多分、地球では戦闘魔導士⇨警察、軍人。職業魔導士⇨サラリーマン、その他。治癒士⇨医者。技能魔導士⇨技術職。なんて感じだろう。

自分なりに理解すると、リアラは更に説明を続ける。

「ここからユキトにとってはポイントです。戦闘魔導士には幾つかのタイプがあつて、大まかに二つ。近距離強化型か遠距離射撃型のどちらかです」

「オレは近距離強化型か。カイルは？」

「両方に分類されるが、どちらかと言えば遠距離射撃型だ」

「何でも出来るけど、何にも特化してないのは器用貧乏って言っただぞ？」

「何でもハイレベルなのは万能と言っけどな」

「話を続けますよ」

食つて掛かるうとした所でリアラのストップが掛かった為、幸人は渋々ながら、リアラに向き直る。

「更に細かく分類すると、近距離強化型で接近戦を使用する人達。近距離で魔法を使う人達。遠距離で射撃魔法を使う人達。遠距離で大規模魔法を使う人達。遠距離で味方を支援する人達に分けられます」

近距離での格闘か魔法か。遠距離での射撃か爆撃か。または支援か。

幸人はさつさと自分なりに言葉を変換する。

「ユキトは自分のタイプが分かりますよね」

「近距離での格闘戦しかオレには出来ないしな」

「大丈夫です。ユキトは強くなれます」

「ありがとう」

リアラにそう言うと、カイルが準備体操をしながら声を掛ける。

「まずは魔力操作から。時間が勿体無いから、お前と僕で魔力強化のみの模擬戦だ。実践派だからその方が良いだろう？」

「へ〜魔法戦はお前が担当かよ」

「ああ、技術や知識云々は、もう少し魔力操作が上手くなってからだ。1ヶ月が経った頃だ。そろそろ魔法の実技に入るだろうからな。手っ取り早く魔力操作を覚えてもらう」

カイルはそう言うと、幸人に自分が付けていたアンクルを渡す。

「何だ？これ」

「魔力を測定する機械で、基本的に設定された数値以上の魔力が込められると、重量が変化する」

「便利アイテムだな。毎日付けてるのか？」

「毎日には付けていない。常に自分に負担を掛けるのは効率的だが危険だ。それで事故を起こした“知り合い”がいる」

カイルの言い分に頷くと、幸人は両足にアンクルを付ける。

「そのアンクルと今、僕がつけているバングルの設定は、装着者の最大放出量の一割以上だ。あまり早く動こうとすると、直ぐに終わりだぞ」

「気をつけるよ」

幸人はそう言うと、気の流れをイメージして、体中に魔力を流す。

幸人は不適な笑みを、カイルは真面目な表情を、リアラは楽しそうな笑顔を浮かべて、朝練が開始された。

幸人はとりあえず魔力を使わずに普通に走ってカイルに近付くと、動かぬカイルの顔面に右の回し蹴りを食らわせる。

カイルは全く動じずに、左手で回し蹴りをガードする。

幸人は掛かったと思いつつ、右の回し蹴りがカイルの左手に当たった瞬間、左足に魔力を込めてカイルの逆側の顔面を狙う。

カイルの手が邪魔した為、直撃では無かったが、とりあえずは技は決まった。

「久我心明流・双旋^{ふたつむじ}」

「練習とは言え、久我心明流……避けにくい技だ」

「お誉めの言葉をありがとう。さあやるうぜ」

ガードの上から吹き飛ばされたカイルと幸人の距離は離れている

が、魔力で強化すればあつという間の距離である。

「技は素晴らしいが、まだ魔力との兼ね合いが上手く行ってないみたいだ、な！」

カイルが喋りながら、幸人の懐へ飛び込んでくる。

幸人は慌てずに、防御の体勢に移る。

カイルのスタイルは実戦空手に近いが、より実戦的だった。

どんな師に学んだかは知らないが、魔力の制限があるバングルを付けた腕の攻撃で、幸人は防戦に回っていた。

「ちっ！」

幸人のスタイルは元々足を動かし、相手を攪乱するスタイルなのだが、アングルのせいで上手く足を動かせない為、足を止めてカイルを迎え撃っていた。

同じように、カイルも攻撃の主体は腕による攻撃なのに、バングルの存在を感じさせずに攻撃してくる。

限界ギリギリの魔力で強化しているのだ。

身体能力の高い幸人と魔力放出量が高いカイル。装着者の魔力放出量の一割以上でアウトになる設定だと、2人の強化された身体能力は同等程度な筈なのだが。

「またアングルかつ！？」

幸人がとつさに動こうとする時に、思わず入ってしまう力が、想像以上に魔力を使っており、アングルが重たくなるのだ。

「貰った！」

カイルの左フックが顔面に来る。何とか右手でガードするが、今度は右手のフックがリバーに襲い掛かる。

とつさにガードした左手が痛む。

最初とは逆パターンで距離を離された幸人は絶無に聞く。

「練習でも負けるのは悔しい。何か無い？」

『足に意識を持って行くな。ただ普通に動けばいい。そうすれば無駄な力は入らない。自然体で体に流れた魔力を、そのまま維持しろ』

絶無のアドバイスに従い、幸人は自然に魔力を体中に行き渡らせる。

そのままの感覚維持して、幸人はカイルに向かって行く。

カイルのようにギリギリのラインでの魔力操作はまだまだ厳しいので、とりあえず突きを出そうが、足で蹴ろうが、決して自然体の時の魔力からズラさない。

それを感じ取ったのか、カイルもそれ相応に警戒し始めるのだが、一つの声が時間を知らせる。

「もうすぐ七時ですよ。いつまで“2人”でやってるんですか？」

顔に面白くないと書いてあるリアラが、時間を言いながら近寄ってくる。

どつちら熱中し過ぎたらしい。

「良いですよ別に。私は2人みたいに動けませんから」

顔を背けてご機嫌斜めをアピールするリアラに、幸人とカイルは顔を見合わせて苦笑した。

「はいはい。次の朝練はリアラがオレに教えてくれよ」

「私にも格闘戦、でしたか？ 教えて下さい。護身程度には覚えておきます」

「そんなにやる気を燃やして護身程度って……説得力ないよ？」

「じゃあユキトも、今度私とカイルが何かしてる時に、横に座って下さい！ 私の気持ち分かる筈です！」

「だから悪かったって……」

そんな会話を続けつつ、三人の朝練初日は無事に終わった。

その後、各自の部屋に戻って、大ホールで再集合したのだが、リアラが偶然、時間が一緒だったクレアに朝の事を全て話した為、幸人とカイルは“男の気配り”について、朝から説教を受ける羽目になり、あまりに朝から騒がしかった為、幸人だけがドゥーエスの説教を受けた。

「何でオレだけ……」

「話を聞いていますか!？」

「はいいい!! 聞いています!!」

第二話「Gクラスの友人」(前書き)

はい！今度はきつねさんの感想で調子に乗りました！これで今日は三話目です！

お楽しみ下さい！

第二話「Gクラスの友人」

世界間のボーダーライン

第二章「魔法の勉強」

第二話「Gクラスの友人」

本日は快晴だった。

ここ一週間では最高の天気だった。そんな真つ青な空を見ている今朝の大ホールでの公開説教の憂鬱さも忘れられる。幸人はそんなことを考えていた。

「いつまで空を見上げて黄昏てるつもりだ？」

現実逃避を邪魔するのは、現実逃避の原因を作った先生、デビッド・ホーキンスであった。

この場は校舎から離れた湖。

「千尋の湖……」

誰かが呟いた湖の名前について、幸人は考える。

一ひろの千倍だから千尋。とても深かったり、広がったりする時に使う言葉。日本語に翻訳されてるから千尋になっているが、普通

のエル・ドラドの言葉では何て言うのかについて、幸人は頭を捻りつつ、一ひろを1.5メートルとして千倍する。

1500メートル。深さにしても広さにしても、馬鹿デカイ湖であることを幸人は理解する。それがなぜ学園の中に存在するのかは、理解できなかった。だが、ホーキンスが言っている事の無謀さはしつかり”把握”した。

「1500メートル……落ちたら死ぬぞ？」

「落ちなければいい。魔力の微細なコントロールを学ぶ為に、極度の緊張状態に陥れ」

「無茶言わないで下さい！ 何でGクラスだけ“湖渡り”なんてしなきゃ行けないんですか!？」

今回、幸人たちGクラスの人間達に言い渡された授業内容は、千尋の湖を歩いて渡る。なんてとんでもないモノだった。

「魔法を学ぶ上で多少の危険は付き物だ。まあ私の手の届く範囲なら助けてやる」

「ちなみに……湖にもし落ちたらどうなるんですか？」

ホーキンスはニヤリと笑い、一つの魔法陣を浮かび上がらせる。

そこから巨大な牛の肉が湖に向かって発射される。

湖の中央辺りで落下軌道に入った肉の下から“そいつ”は現れた。

バツシャー

そんな爆音と共に湖から飛び出したのは、特撮にでも出てきそうな蛇。否。

「龍!？」

湖から飛んでくる水しぶきを気にせず、湖の中央からはかなりの距離があるのに、その威容を示す巨大な蒼い龍を幸人は見た。

だが、直ぐに見なければ良かったと思い直す。

龍は右にある手で牛の肉を持っており、それを一口で飲み込んだ。

「肉食かあああ!？」

幸人は衝撃の光景に思わず突っ込んでしまう。

「今回は二人一組で岸にたどり着いてもらう。どちらかが辿り着けば良いぞ。あと、水に触れている場所に魔力を集中させて置けば、沈む事はない。よほどの事がない限りな」

ホーキンスの慰めにならない言葉を聞きつつ、こうなったら腹を括るしかないと、自分に言い聞かせて、幸人はGクラスの面々を見る。

皆、青白い顔だ。だが、その中で一人、幸人のように腹を決めた人間が居た。

「カイ! オレと組もうぜ」

「クガか……しょうがねえよな。やるしかねえよな」

カイ・プロイス。

緑色の目は目付き最悪、地ではあるが、金髪を立てた髪型で、外見はバツチリ不良なカイだが中身は至って普通だ。優柔不断でも、はつきりしている訳でも無い、極々普通の“顔が極悪面”な少年だ。

幸人とカイは基本的に似ている。

カイは学園に入る前から魔力は使えたが、あまり得意ではなかった。だが、本人が持っている資質があまりにも特殊だった為、普通の学校ではどうしようもないと言われて、アルカーディアに来たのである。

当然、招待枠と言っても大した事は無いカイは、幸人と仲良くGクラスに配属されたのだが、幸人に様々な事があつたように、カイにも色々な事があつた。

カイの属性は“空”と呼ばれるモノで、極めれば高度な空間魔法が使えるのだが、カイの属性は強すぎて、魔力が体から離れると直ぐに空間干渉を始めるのだ。

初日の授業で、細長い紙を何枚も消滅させた時は、流石に幸人も度肝を抜かれた。

全く魔法が使えないと言う点やら何やらと共通点はまだ幾つかあるが、一番の共通点はカイも身体能力が高い事である。その為、Gクラスでは唯一幸人と渡り合える人間でもあつた。

「最悪。お前が龍を消滅させろ」

「無茶を言うな！ あんなデカいのを俺なんかが消滅させられるかっ！」

「くそ……ダメか」

幸人は何とか先ほどの龍から逃れる術を探すが、あまりにも無理があつた。

「霊獣を相手取るなんて無理だ……」

「さっきのは霊獣の龍じゃない。霊獣の龍は黄龍。先ほどの龍は魔法生物の最上位だ」

「基本的にヤバイ相手ってのは変わってねえな……」

カイの言葉に幸人はため息を吐く。

最近ため息を吐く回数が増えてる気がするのは、世界が面白くなっているからなのか、自分が世界について行けてないのか。多少悩む所だが、多分前者であって欲しい。そうでなければやってられない。そう思いながら、幸人は腹に力を入れて、カイに声を掛ける。

「行こうぜ」

「ああ、行くか」

「そうだな。行くぜ」

「ああ、行こう」

「何でも良いから早く行け！ さもないと私の“ルーベル”で吹き飛ばす」

「うわあ！ 色杖を出しやがった！ こっち向けんなっ小型戦略兵器だぞ！ それは！！」

「前門の龍、後門のホーキンス……オレには勝てる気がしないなあ」
「良いから行け！」

ホーキンスの脅しに屈しつつも、最後の意地で二人は自分達の足で湖に足を乗つける。

「うわあ変な感覚だな」

「全くだ」

カイの感想に幸人は同意する。

水の上に乗ると言う体験に、若干の興奮を覚えたが、下に肉食の

龍が居る事を思い出し、テンションを下げる。

「まあこの分じゃ落ちる事はないだろ」

「魔力が尽きなきゃな……急ぐか」

「……そうだな」

多少慣れ始め、とりあえず走れるようになった二人は、湖の反対岸まで走り出した。

後ろでホーキンスが人の悪い笑みを浮かべた事に気付かずに。

二人は順調に湖の上を走っていた。

コツさえ掴めば、大した事では無く、足の裏に魔力を張っているだけなので、懸念したほどの魔力消費もない。

幸人とカイは自分達の判断でローブを付けていなかった。

理由は簡単。二人の魔力保有量が少ないからである。

どんなに頑張っても基本的に魔力保有量が劇的に増える事はない。体力と同じで、訓練すれば多少は増えるが、CがAになる事はない。

そんな二人は、自分達の魔力を節約する為にローブを着用していなかった。

「結構余裕だったな」

「ああ、もう少しで……うん？」

幸人は自分達の少し先の場所が盛り上がるのを察知した。

カイも気付いたのか、顔をひきつらせる。

『言い忘れたが、湖の向こう岸に辿り着くには、そいつの縄張りを突破しなければ行かん。私の手が届く範囲では無いのでな……落ちるな』

「ふざけるなああああ！！」

念話で送られて来た情報に、二人は声を揃えてホーキンスに突っ込む。

だが、それがいけなかった。

大質量のモノが湖から飛び出すのだ。多少離れていようと、巨大な波が襲ってくる。

「のわあ！」

「うわあ！」

二人は龍の出現で起こった、自分達の背丈はある波にもろに飲み込まれ、危うく湖に落ち掛けた。

何とか波が収まった頃には、二人の制服はびしょびしょだった。

「ちくしょう……」

「やっってくれるぜ……」

二人はびしょびしょの制服を引っ張ったりしつつ、ため息を吐いて、制服の内ポケットからMPTを取り出し、音声を入力する。

「「ロープ・セット」「」

【ローブ・アップ】

一瞬光った後に、幸人の体にそろそろ慣れ始めた白と黒のローブが身につけられた。

幸人は自分のローブを確認すると、MPTが防水仕様だった事に感謝しつつ、MPTを横の腰のフォルダーに付ける。

カイの方を見ると、カイもローブを着ていた。だが。そのローブが問題だった。

「相変わらず凄いデザインだな……」

「有名なデザイナーが作ったんだ。多分、なかなかのセンスの筈なんだ……」

「いや、どう見ても燕尾服だろ。そのデザイナー、絶対戦う執事を見たかったんだぜ」

「執事は基本的に燕尾服を着ない事を知らないのかっ！」

幸人のツツコミに反応するカイだが、黒い燕尾服に黒いネクタイでは、ウケを狙っているようにしか見えない。

そんな馬鹿な会話をしていると、辺りがいきなり暗くなった。

否、幸人とカイの場所だけ、何か“巨大なモノ”の影で暗くなったのだ。

ゆっくりゆっくりと幸人は左を、カイは右を見る。

近くには蒼い綺麗な鱗があった。そのまま上へ視線を向けると、巨大な三本指の手が二つあり、最後に、良くみる龍の顔があった。

「ははは……」

「面白くなりすぎだ……」

カイは乾いた笑いを、幸人は引きつった顔でそう呟いた。そして、それが合図だったかのように、龍は動き出した。

幸人とカイはとっさに左右にバラけるが、幸人が慣れない感覚に戸惑い、出遅れる。

「ちくしょう！オレが囷かよ！」

「俺が岸に付くまで沈むなよ！」

カイは龍とにらめっこをしている幸人にそう言い残すと、かなり速いペースで進んでいく。

カイが行くのを見送ると、幸人は当面の間、どうやって生き残ろうかと考え、絶無に意見を聞く。

「ゼツ。何か無いか？」

『私の体がびしょびしょだ。許可する。全力で叩き潰せ！』

「何かキレてるうう！！！」

とりあえず龍の目の前なんて、精神的にも肉体的にも危険な場所から、退避しようとして、幸人は湖の下にあった光景にぎよっとした。

いつの間にか、多分、絶無にツッコミを入れている間に、龍は幸人を中心にトグロを巻いていた。

まだ湖から体が出て来てないが、幸人が逃げようとするれば、直ぐに龍の体がバリケードになるだろう。

「なんと……」

『これはやるしかあるまい。幸人』
「お前はただ鬱憤を晴らしたいだけでしょが……」

幸人はそう言いつつ、体に魔力をどんどん流し、自分の体を強化する。

意識を戦闘状態に移行させ、うつすらと口を開く龍を見る。

「食えるもんなら、食ってみやがれ！」

幸人はそう呟くと、龍の顔の前までジャンプし、龍の顎を蹴り上げる。

そのまま龍の体を蹴って距離を開けるが、どうやら宣戦布告と受け取ったらしい。

「うわあ〜目の色変えたぞ」

『幸人。龍に勝つなど普通の人間では無理だ。諦めろ』

「さんざん煽ってそれかよ！ 何か秘策とか無いのか!？」

『逃げる。それしか言えん』

「適当にもほどが……って来た！」

幸人は、波を起こしながら進んでくる龍にビビりながらも、何とか跳躍して龍の突撃を回避する。

だが、それは判断ミスだった。

気付いた時には、幸人は龍の手によって掴まれていた。

「ユキト!？」

Aクラスが授業をしていた副城の教室でリアラは思わず、勢い良く立ってその声をあげた。

ふと、湖の方向に幸人の魔力を察知したリアラは、何故か龍が出現してる事に気づき、しかもその龍相手に戦ってる人間が幸人である事を分かってしまったのだ。

リアラの声に、Aクラスの人間達は皆、湖の方向を一度見て、目を逸らし、二度見をして顔をひきつらせた。

「龍と戦ってるのか……？」

「カイル……」

リアラの横に来たカイルが小さく呟く。確かに久我幸人は普通では無いが、好き好んで、龍と戦うほど馬鹿でもない。

カイルは思わず、今、授業をしていた教師である巨漢の男性“カイゼル・レオンハート”を見る。

カイゼルは愉快そうに、豪快な声を上げて笑っていた。

「先生！」

「ああ、悪い悪い。いやあ流石はクガだ。やってくれる」

「どういう意味ですか？」

カイルは思わず、自分の杖の待機状態であるカードを取り出して、厳しい声を出す。

「そう怖い顔をするな。あれは毎年恒例のGクラスの“度胸試し”だ」

「度胸試し？」

「ああ、龍が居る湖を歩かせるんだが……いやあ俺も流石に龍から逃げずに攻撃する奴は初めて見た」

カイゼルは目に涙を溜めて、腹を抱えながらそう呟く。

「じゃあ、あの龍は……」

「あの湖に昔から住んでる龍で、学園の人間とは仲の良い爺さんさ」

カイゼルの言葉にしばらく呆然としたカイルは、何とかリアラを見る。

直ぐに目を逸らした。

リアラから何だか黒いオーラが立ち上っていたからだ。

小さくだが、また無茶をして、とか、後でドゥーエス先生に言わない。とか聞こえて来るが、カイルは全く何も聞かなかったかのよう
うに湖を見て呟く。

「幸人。その地獄が終わっても、本当の地獄が待ってるぞ……」

「はっはっはっ。愉快だ。実に愉快だ！」

しばらくAクラスでは、カイゼルの笑い声だけが響いていた。

幸人は、自分が龍の腕に掴まれた事を理解すると、何とか脱出し
ようとものがくが、全く拘束は緩まない。

「このっ！ 離せー！」

『わかったわい。元気な子じゃなあ』

幸人は頭に響いた声にびっくりしつつ、龍が自分を離れた為、湖の上に着地して龍を見る。

『500年生きておるが、わしを攻撃した生徒は初めてじゃ』

「あんたが喋ってるのか？」

『如何にも。千尋の湖の湖主、皆はミズモリと呼ぶ』

「ミズモリ……」

幸人は名乗った龍を見つつ、自分が名乗っていない事に気付く。

「あつ！……ユキト・クガです。そのうさつきはすみませんでした」

『構わんよ。これはそう言う遊びじゃからな』

「遊び？」

『毎年恒例の事で、ワシが生徒を脅かすのじゃ』

「じゃあ……これは……」

『全てはホーキンスの坊やの手の上じゃ。残念じゃったな』

「くつそおお！！ 嵌められた！ 性格が悪すぎる！」

幸人が湖の上でミズモリと喋っていると、ホーキンスから念話が入る。

『ご苦労だったな。非常に面白かったぞ。無事にプロイスが反対の岸に着いたから、合格だ』

「あんた良い性格してるって言われるだろ？」

『ああ、性格が良いと良く言われる』

「それ意味違うからねっ！？」

そんなホーキンスと幸人のやり取りを、ミズモリが微笑ましそう

に見ていた。

「ミズモリとの“遊び”が終了した幸人が大ホールに入ると、大ホールの人間達が静まり返る。

幸人は嫌な予感がしつつ、ある人物を探す。

教師陣の卓には居ない。周りを探しても、ドゥーエスの姿は無かった。

「いや〜良かった」

「何がです？」

幸人は後ろから聞こえた良く通る声に、ブリキの人形のように振り返る。

「いえ、なんと云うか……」

「聞きましたよ。龍に挑んだそうですね。かなりの勇気が必要だったはずですよ」

「はいっ！ それは勿論！ ありったけの勇気を振り絞って……」

幸人は何とか場を明るくしよう、テンション高めで答えるが、ドゥーエスから発せられる冷気にも似た気配に声を無くす。

「あなたには、龍の恐ろしさと言うモノを教え込んであげましょう」
「ひいひい……！」

あまりにドゥーエスの顔が怖すぎて、幸人は奇声を上げる。
だが、ドゥーエスは気にせず、幸人の襟を掴んで大ホールから引
きずって行く。

「うわあああ！ 龍と戦うほうがましだあ！」

主要登場人物設定 生徒（前書き）

登場人物が増えてきたため、設定を加えました。
また増えてきたら人物設定を付け加えていきます。

人物設定は本文を読んでいない方などにはネタバレが書いてあります。また隠れ設定なども加えている為、本編には登場しない設定などもありますのでご容赦下さい。

主要登場人物設定 生徒

カイル・グランディオ

アルカーディア魔法学園の第二寮生でAクラス。

魔力数値

魔力保有総量・257万・評価AAA

瞬間最大放出量・57万・評価AA

魔力回復量・毎時・5万3千・評価AA

魔力維持時間・180秒・評価AAA

魔力反応速度・0.7秒・評価AAA

魔法適性

属性・火・

魔力光・赤

魔法性質・鋭く脆い

技能適性

マルチ・シンク・7・評価AA

圧縮系・評価AA

縮小系・評価A+

収束系・評価AAA+

放出系・評価AA

固定系・評価AA

制御系・評価AAA+

総合A A A 評価

戦闘魔導士ランクA A A + (軍の正式判定)

接近戦から遠距離からの大規模魔法による援護まで、全てをこなせる万能タイプ。

本人自身の得意スタイルは“高速で動き回って、その時々にあった魔法で攻撃する”スタイル。戦術眼と観察眼に優れており、膨大な自分の魔法の選択を誤る事はめつたにない。

効率的な魔法運用と魔力配分がモットーで、あまり大規模魔法は好まない。

身長は162センチ

超優秀な少年。背以外で幸人に負ける事は無い万能人間。

苦手な分野でもA以上の評価を貰う優秀さだが、最初から何でも出来た訳では無く努力の賜物。

5歳からの英才教育でここまでの力を持ったが、6歳の時に受けた評価E(測定外)で、元々の資質は、親譲りの膨大な魔力程度だった。

子供時代の全てを訓練に費やした為、あまり社交的とは言えず、生真面目で正直すぎる性格のため、当初は母から、友達が出来るか心配されていた。

アルカーディア魔法学園に来た理由は、“色々”あってらしい。

幸人とは基本的に反対の冷静な性格だが、双方、友達思いな所は共

通している。

また、正義感が強く、例え理に叶っていようと、自分の心に反すれば、はねのける強さと熱さを持つ点も共通している。

幸人のアルカーディアでの友達第一号にして親友。

リアラ・マクスウエル

癒やしの神子

魔力数値

魔力保有総量・289万・評価AAA+

瞬間最大放出量・250万・評価SS

魔力回復量・毎時・7万・評価AA+

魔力維持時間・168秒・評価AAA

魔力反応速度・8秒・評価C

魔法適性

属性・光

魔力光・黄金

魔法性質・遅く堅い

技能適性

マルチ・シンク・4・評価B

圧縮系・評価C＋
縮小系・評価C＋
収束系・評価B－
放出系・評価AAA＋
固定系・評価AA＋
制御系・評価AA＋

総合AA評価

魔力数値には優れているが、技能系に偏りが有りすぎる為、総合での評価はAA。
高速で動き回ったり、飛んだりする事が必要な接近戦や、速い詠唱や魔法が必要な魔法戦は、詠唱破棄や無詠唱も苦手なため出来ず、戦闘の際は遠距離固定砲台。

癒やしの神子と呼ばれる存在で、神子特有の光の属性と、神子のみで使用可能な癒やしの魔法や浄化の魔法が使えるが、自分の魔力の殆どを持っていかれる為、多用は出来ない。

アルカーディア魔法学園の第二寮生でAクラス。

第二寮生ではあるが、現在は校舎の本城の賓客室におり、学園の教師達に護衛されている。

幼い時から神子と崇められ、周りの大人達や同年代の子供達に気を使われる幼少期を過ごした。

両親のしっかりとした教育で、神子と言う立場に傲る事無く、聡明で、人の心の変化にも反応出来る優しい性格に育ったが、その性格

故に、近づいてくる人間達の心の裏や、同年代の子供達の決して表には出てこない負の感情を読み取ってしまい、徐々に人に対して壁を作るようになってしまう。

入学時点で、心を許せる相手が両親や契約精霊のソフィアなどの少数で“誰にでも優しいが、誰にも心を開かない”性格になっており、また、自分が作った壁に気付かず、周りは“神子故に近づいて来ない”と思い込んでいた。

幸人の事も最初は拒絶し、一週間ほどの間、近づいてくる幸人を避けていた。

他人からの無条件の優しさなどを信じられずにいたが、友達だからと、危険を承知で助けに来た幸人と、幸人が信頼する人間達に心を開き始めた。

アルカーディアに来た理由はややこしく、かなり政治的な理由を含むむらしいが、本人はあまり話したがらない為、幸人達も聞かないでいる。

立場上、聖クリスティーナ教会の最高位だが、本人自身はその立場や権力を使う気はない。

現在は昔の明るく、優しい性格に戻って来ているが、過去の事があり、幸人達“友達に依存している”節がある。

カイ・プロイス

魔力数値

魔力保有総量・54万・評価B

瞬間最大放出量・8万3千・評価C+

魔力回復量・毎時・1万・評価B

魔力維持時間・32秒・評価B+

魔力反応速度・1秒・評価A

魔法適性

属性・空・

魔力光・濃い青

魔法性質・速く脆い

技能適性

マルチ・シンク・3・評価C+

圧縮系・評価B

縮小系・評価B

収束系・評価B+

放出系・評価A

固定系・評価C+

制御系・評価B

総合B評価

バランスタイプだが、カイルのように万能では無い。

幸人に近い身体能力を持つが、近接格闘の技術がある訳では無い。

空の属性の力があまりにも強すぎて、魔力が体から離れると、直ぐに空間干渉を始めてしまい、現在はこの魔力の制御が最優先目標。

アルカーディア魔法学園の第二寮生でGクラス。

目つきは悪く、金髪を立てた姿は不良以外の何者では無く、容姿は幸人曰わく“極悪人面”だが、中身は至って普通の若干ビビりが入った、家庭的な少年。

苦勞人で、周りに振り回されるツツコミ担当。

身体能力が高い為、Gクラスで唯一、幸人とコンビを組める人間で、幸人が巻き込まれるトラブルには問答無用で巻き込まれる。

招待枠なのにGクラスだが、それにはワケがある。

緊急時の機転や反応に優れており、魔法への反応も優れている。

だが、反応が鋭いくせに世話好きな性格のせいで、様々な人間達とのゴタゴタに巻き込まれる。

アルカーディア魔法学園に來た理由は、本人の魔法資質の低さから、空の属性が暴走する可能性があり、普通の魔法学校では受け入れられなかった為、招待枠としてアルカーディアに受け入れられたが、魔法資質が低い為、Gクラスに回された。

本人は魔法資質の低さなどを理解し、しっかりと魔法を勉強しようとしてるのだが、空の属性のせいで、未だに魔法が使えない。

幸人とは違った面で交友関係が広く、他寮生とも仲良くやっている。

常識人だと自認しているが、周りがおかしすぎて、最近自分の常識を疑い始めている。

サナ・フォーエンハイム

総合評価はA A。

マルチ・シンクは8つと、カイル以上である。

アルカーディア魔法学園の第二寮生でAクラス。

絶無を唸らせるほどのマルチ・シンクが多く、本人もそれを自分の強みだと思っている。

幸人には森で気絶させられたのがキツカケで興味を持つ。

本人の資質は幸人を上回っているのだが、森での戦闘は死霊に操られていた為、本来の力を出せていなかった。

絶無が瞬時に指揮を執るサナを危険視した通り、視野が広く、戦術と戦略に長けている指揮官タイプ。

主要登場人物設定 生徒（後書き）

はい、カイル・リアラ・カイ・サナの設定です。
カイとサナは第二章からの活躍になりますので応援宜しく願います！

カイルがヤケに強いですね。保有魔力は幸人の五倍で、最大放出量は殆ど幸人の全魔力に匹敵すると……戦ったら勝つのは不可能ですね（笑）

リアラの設定は、強いけど対人向きじゃないみたいなきにしました。

僕、期待の新人・カイは、かなりノーマルな設定です。回避力は高い為、技を上手く避ける筈です。破れた燕尾服なんて書き方が難しくすぎて無理です。

サナの詳しい設定は機会があったらで、キャラ的には幸人の普通な女友達を目指して行きます。

登場人物を武器に例えてみると、カイルはガトリングガン。リアラはミサイル。幸人は日本刀。サナはピストル。カイはナイフ。クリフォードは戦艦で、ドゥーエスは核兵器。ホーキンスは戦車。

戦略兵器って核とか弾道ミサイルの事を言うらしいです。つまりは色杖持つてる教師も戦略兵器の一部。

ちよつとやっちゃった感があるなあ（汗）

どなたか良いキャラ案を持っている方は感想にキャラの構想などを
書いて見て下さい！
僕なりにアレンジと解釈を加えて、書いてみたいと思います！

登場人物設定 教師（前書き）

教師バージョンです。

教師の方々は多くなっていると思うので、ちょびつとずつ設定を加えて行きたいと思っています！

登場人物設定 教師

セオドール・クリフォード

アルカーディア魔法学園校長。

多くの実績を持つアルカーディア魔法学園の校長にして学園都市の市長でもある。

強力な戦闘魔導士でもあり、ノルンと呼ばれる古から様々な方法で知識と力を継承した魔女と向かい合っても、全く動じなかった。

普段は好々爺な老人だが、生徒や学園の危機となると迅速な対応をする。

先を読んで行動し、どのような事態にも対処出来るように手を打つ。

金の色杖を持つ。

クレタ・ドゥーエス

アルカーディア魔法学園教頭

アルカーディア魔法学園の教頭で、学園都市の副市長。
学園教師達のトップにして、巨大な力を持つ老女。

幸人が起こす無謀な行動を再々注意し、説教をする為、幸人の天敵

ではあるが、幸人のアルカーディアでの保護責任者である。

様々な装飾品を身に付けているが、これは巨大過ぎる魔力が周りの生徒達に影響を出さない為の処置。

幸人の保護責任者になった理由は少し複雑らしく、幸人自身は保護責任者の件を全く知らされていなかった。

第二寮の寮監でもある。

銀の色杖を持つ

デビッド・ホーキンス

アルカーディア魔法学園教師。一学年主任

幸人達第一学年の主任を務める教師で、幸人達、Gクラスの実技を担当する事が多い。

過激な人間で、何かと色杖を取り出す事が多いが、優れた戦闘魔導士である事は確かである。性格は幸人曰わく“良い性格”らしく。幸人とカイに対して厄介事や無理難題を押し付ける事が多い。

赤の色杖を持つ。

カイゼル・レオンハート

アルカーディア魔法学園教師。

カイル達のAクラスの実技を担当する事が多い教師で、大柄で豪快。幸人が龍のミズモリに攻撃を加えた際は、一人で爆笑していた。

第一寮の寮監。

緑の色杖を持つ。

その他、色杖を持たない教師。

アンナ・セレッソ

アルカーディア魔法学園介護教師。

優秀な治癒士で、生徒のカウンセラー的な側面も持つ。

誰に対しても気さくで、生徒からはアンナ先生と親しまれている。多少強引ながら、一人で居るリアラに対して、幸人を向かわせた人物で、生徒の事を良く見ている。

色杖は持たないが、優秀な治癒士と言う事で、今年からアルカーディアに入った新任教師。

レイチエル・コーエン

アルカーディア魔法学園教師。

色杖を持たない教師で、野外に置ける危険をはらんだ授業や、高度な戦闘技術が必要な授業には出ないが、知識や魔力による魔法の制御などを担当する。

登場人物設定 教師（後書き）

ちよつとした設定です。

色杖は9本の予定で、それ以外にも教師が居る的な感じで行きたいです。

読者の皆様にお問い合わせがあります。

色杖を持つ教師の設定が決まっています。

僕の構想としては、色杖は9本。

現在出ている色は、金、銀、赤、緑

決まっていない色は、青、茶、オレンジ橙、黄、紫です。

どなたか良いキャラ設定がありましたら宜しくお願いします。

詳しく無くとも、名前や「紫でクールな2枚目」みたいな感じで結構です。

宜しくお願いします。

第三話「二人の思い」（前書き）

ちよつと短めになってしまいました。

皆さん。おはようございます、こんにちは、こんばんは。武道家です。

今回は手抜き感が否めません。

とりあえず読んで下さい。

第三話「二人の思い」

世界間のボーダーライン

第二部「魔法の勉強」

第三話「二人の思い」

喜び

怒り

哀しみ

楽しさ

感情。それは全て見えないモノだけど、確かに感じられるモノで。

私はそれを感じて心を閉ざして、大事な友達がそれを感じさせてくれたから、また心を開けた。

ずっと触れる人がいなかった私の感情に、その友達は触れてくれた。

世界が広がって、友達が出来て、毎日が楽しくなって。

けど私の心の奥底にある不安は消えない。幸せを感じてしまったから。それを失ったらきつと立ち直れない。

裏切られないか。見限られてしまわないか。嫌われてしまわないか。そんな負の感情を心で重ねながら、リアラはベッドで布団を被っていた。

自問自答する。

ユキト・クガは信頼に足る人間か。
イエス。

ユキト・クガは自分の事を裏切らない人間か。
イエス。

ユキト・クガは自分の事を嫌わなくてくれる人間か。

すこし悩み、リアラはイエスと告げた。

もしかしたらがあるかも知れないが、あの少年が理由もなく人を嫌う事はないだろう。

何日も避けたりしたのに、友達になろうと言ってくれた人だから、よっぽど酷い事をしない限り、嫌わないでいてくれる筈。
多分、嫌われるのなら、自分が悪い筈。

リアラは自分の体を小さくなって抱き締める。

正直、もし嫌われてしまったらと考えるだけで怖い。

他の人達に嫌われるのなら耐えられる。ユキト・クガさえ側に居てさえしてれば。

けれど、彼に嫌われ、側を離れられたら耐えられない。

私の今の世界は、ユキトに寄って広がっている。

ユキトと言う扉があるから、私は世界を、友達の輪を、広げられる。

だから、ユキトが私の側を離れると言う事は、私の世界が終わりを告げる事に繋がる。

だから、ユキトに嫌われる訳には行かない。ユキトを失う訳には行かない。もっと仲良くならなければ、嫌われてしまうかも知れない。

リアラはそんな事を考えていると、ユキトが自分の側を離れる理由にもう一つの理由が付け加えられる事に気付いた。

それは、死や重傷を負った場合。

有り得る。良く無茶をするユキトならば。

ユキトの実力では、リアラを狙う人間達との戦いで死んでしまう可能性も有り得る。

今までだって、運や周りの人間達が助けてくれたから、結果的に丸く収まっているが、死の危険性が無かった訳じゃない。

リアラはそんな自分の考えに体を震わせた。

ユキトが自分のせいで死に、ユキトが自分の側から居なくなる。

思わず首を横に振って、そんな考えを無くす。

「大丈夫……ユキトは死なない……私が死なせたりなんかしない……」

もし、そんな事態になれば、守ろう。

リアラ・マクスウエルのを全てを使って。例えそれが、自分が嫌う癒やしの神子の権力などであったとしても。

リアラはそう誓い、ゆっくりと意識を深淵へと落としていった。

珍しく強い風が吹く6月のある日。

カイルは幸人と共に、本城から副城へと続く石造りの道を歩いていた。

「何で転移魔法陣を使わなかったんだ？」

幸人は、横を歩くカイルに、偶には歩こうと、この長い道を歩かせる理由を聞いた。

すると、カイルは小さく笑って、幸人に言う。

「少し、僕の過去について話そうと思って、な」

「過去ねえ……深刻か？」

「少なくとも、笑える話ではないとは思ってる」

「だよな」

幸人はそう呟くと、目を閉じて心を落ち着かせると、カイルを促

す。

「じゃあ行くぞ……僕には一人の義理の妹が居るんだが……どうした？」

「初耳だ。お前……家族構成くらい話せよ……」

「すまない。続けるぞ？」

「ああ」

カイルは幸人の返事を聞くと、5年前の事を思い出す。

今から五年前。僕が10歳だった頃。

僕は母と共に、エル・ドラドのリゾートスポットに来ていた。訓練漬けの僕を気遣ったので、忙しい母が僕の為に時間を作ってくれたのも理解出来た。

だから、僕はその日は年相応にはしゃいだ。珍しいモノには驚いたし、綺麗な海には目を光らせた。

だけど、僕の年相応の時間は突如として終わりを告げた。

各世界の代表政府が締結した“世界間連合”。

その承認を受けて、各世界の治安維持を任務にし、どの世界の政府、組織にも属さない独立治安維持組織。通称“セイバース”。

僕の母はその組織の上級士官だった。

階級は特佐。

世界間を自由に移動出来る特殊航行艦“クロード”の艦長だった。

僕を置いて行く訳には行かなかった母は、僕をクロードへ乗せた。夢だった特殊航行艦に乗った事にも興奮したが、長距離転移を可能にする技術に驚愕した。

そんな僕を同乗させたクロードは、地球と同じ、他の世界と全く交流をしていない交流外世界に移した。

そこでクロードは、エンシエント・レリックを狙ってやってきた犯罪組織“クリムゾン”と抗戦したんだが、その犯罪組織に金の髪の少女がいた。

その少女がやがて僕の義理の妹になる“ルチア・デオダート”だった。

色々と複雑な経緯を経て、クロードのクルーは、ルチアが昏睡状態の母“アメリカ”を救う為にエンシエント・レリックを求めており、母が生前関わっていた犯罪組織に協力してる事を知った。

そして、激しい戦いの末、ルチアを救出し、犯罪組織を壊滅させた。

意識を取り戻したアメリカを犠牲に。

アメリカは優秀な魔導士で研究者だった。

そんなアメリカは、事件が起こる9年前に、一つの研究に携わっていた。

「クローン魔導士生成計画」。

そんな名前の下に行われた実験は、遺伝子提供者であるアメリカ

の遺伝子を更に調整し、オリジナルを超えるクローンを作り出そうと言うモノだった。

人類の進歩の為と言う言葉の下、日夜、人道に反した研究が行われ、そして、研究は一つの命を生み出した。

数多の兄弟、姉妹達の犠牲の果てに生み出されたその“試験管ベイビー”にアメリカは“ルチア”と名付けた。

けれど、肉体を持ったルチア《遺伝子的な娘》に愛情が湧いてしまったアメリカは、研究所を破壊すると、ルチアを連れて交流外界へ逃亡した。

全ての研究記録をその頭に記憶して。

穏やかな日々を過ごしていたデオダート親子。アメリカはルチアを愛し、育てた。

けれど、そんな二人に不吉な影が忍び寄っていた。

犯罪組織・クリムゾン

エンシエント・レリックの密輸や強奪を行うこいつらは“とある組織”からのリークで、二人が静かに暮らす世界に、他の世界からエンシエント・レリックが流れ着いている事を知り、行動を開始した。

そんな中、魔法が無い筈の世界に魔導士が居る事を疑問に思ったクリムゾンは、お得意様である“とある組織”にアメリカの調査を依頼。

そして“とある組織”により、アメリカが元クローン魔導士生成

計画の研究員である事、その娘が、唯一の成功例にして、遺伝子調整を受けた魔導士である事がクリムゾンに伝えられた。

ルチアの優秀さは破格だった。天才と云っていいだろう。

アメリカの指導の下、魔法を習っていたルチアは、9歳の時点でAAA、つまり現在の僕と同程度の評価を得るほどだった。

そんなルチアに目を付けたクリムゾンは、まず、アメリカを複数で不意打ちし、特殊な薬で意識を失わせた。

そしてルチアに、アメリカの友人達を装い、アメリカが病気であった、治すにはエンシエント・レリックが必要などといった嘘を吹き込み、ルチアを利用した。

そして、投薬が無くなったアメリカが目を覚ました時に、ルチアは単身、クリムゾンの首領である男と戦っていた。

その時のアメリカにとって、大事な娘が命懸けの戦闘をしているだけで充分だったんだろう。

アメリカはルチアを追い詰めていた男に攻撃し、ルチアを救った。男がルチアに放った攻撃をその身で受けながら。

クロードのクルーたちが到着し、クロードに運び込まれた時にはアメリカは既に瀕死だった。

泣きながらアメリカの手を握るルチアと、アメリカに言葉を残して行く光景は、いまでも思い出せる。

そこまで話すと、カイルは幸人を見て言う。

「そして、アメリカさんに頼まれた僕の母はルチアを引き取った……」
「そうか……それで？ それを話した理由は？」

幸人の真っ直ぐな目を見て、カイルは目を逸らし、地面を見ながら言う。

「その事件の後、セイバーズは、クリムゾンの背後関係を徹底的に調べ上げて……一つの組織との繋がりを見つけ出した」

「黒幕か……どこだったんだ？」

「……聖クリスティーナ教会の盾にして剣……教会騎士団の最精鋭……第一師団、通称“テストメント”だ」

「教会の……騎士団？」

カイルは幸人が疑問の声を上げるのを聞いて、ゆっくり顔を上げると、幸人の真っ直ぐな目を見返して言う。

「……神子を守る為に組織され、神子が存在する時は、神子の命令しか受け付けない、神子を守る事を剣に誓った騎士団だ」

「神子の命令って……まさか!？」

神子の命令。それはつまり、現在はリアラの命令しか受け付けないと言う事。

その事実には幸人は驚くが、何より驚いたのは、カイルが自嘲気味に笑っていたからだ。

「僕はセイバーズ統合情報部所属の特尉。そして……この学園に所属する神子・リアラの“監視役”さ」

「監視役って……」

「お前にはリアラと関わって欲しくなかった……だから……苦手な演技をしてまで、お前を近付かせないようにした……」

治療室でのカイルの反応を思い出す。

幼い頃から聞かされてきた神子への尊敬などによる反応かと思っ
ていたが、そうではないらしい。

「……お前は良い奴だから……きつと、リアラに何かがあれば助け
に行くだろう。けれど……僕はお前とは戦いたくない……！」

幸人はカイルにビクリしつつ、声を出して笑った。

「はっはっはっ……何だよ、戦う事前提かよ。そんな事にはなりは
しないさ」

「何故そんな事が言えるんだ！」

目尻に涙を溜めて笑う幸人にカイルが詰め寄るが、幸人は両手で
カイルの肩を押さえて言う。

「“リアラ”はそんな事を命令する筈ないからさ」

「だが！ 実際問題、テストメントは……ルチアとアメリカさんの
悲劇を起こした！」

「だから……それがリアラの命令で行われたかなんて分からないだ
ろ？」

「テストメントは神子以外の命令でしか動かない！」

「どうしてそこまでテストメントの“忠誠心”を信じるのか、いま
いち分からないけど……もし、神子が命令を出せる状態じゃなかつ
たら？」

どんな組織にもトップには必ず補佐が付く。トップが喋らず、その補佐が代弁者として下の者に伝える事はよくある事だ。

5年前と言えば、リアラは軽い人間恐怖症の時期だろう。話す相手など、両親やソフィアくらいの筈。

「馬鹿な！ 教会の人間が……枢機卿が神子の代弁として命令を伝えるなど……」

「枢機卿ねえ。何人居るんだ？」

「三人だ。それぞれ、五年前から変わってない。神子の代弁をするなら、この三人の誰かのハズだが……」

「三人いれば、誰かしら居るんじゃないか？ 理由は幾らでもあるけど……神子直属の騎士団を動かした奴が、さ」

幸人はそう言うと、カイルの背中を叩く。

「なっ？ 戦わない可能性だってあるだろ？ 人間、強い意志で自分を固めると、周りが見えなくなるもんだよ」

「確かに……そうかも知れないが……」

「自分の目や耳を信じないなら何を信じるんだ？ お前はリアラがそんな事を命令すると、この短い間に判断したのか？」

幸人のその言葉に、カイルは顔をゆがませる。現状、カイルが持っている判断材料から推測すれば、リアラが黒幕である可能性が一番高い。それは幸人もわかっていた。だからこそ、幸人は一つの提案をした。

「わかった……じゃあ、もし、命令を出したのリアラだったら、オレが説得する。それでダメならお前の好きにしろよ」

それは、リアラへの信頼から来る言葉。
決して揺るがない信頼。それを幸人はリアラに寄せていた。
それが何故だかは分からなかったが、カイルはその意見を了承した。

「……わかった。じゃあ、もし、リアラがそんな命令を出していた場合、僕はまず、お前に説得の機会を与える」

「そんな機会は来ないと思うけどな」

「お気楽な奴だ。人の気も知らないで」

ケラケラ笑う幸人をカイルは軽く睨みつける。

「まあそれがオレさ。にしても、セイバースだっけ？ その人間なんだろう？ 給料とか貰ってるのか？」

「ああ。とりあえずはな」

「どの位？」

「……」
「この三年間の学費を一括で払える程度の年収だ」

学費を一括で払える同級生。幸人は微妙な顔をしながら呟く。

「既に社会人……恐るべし」

「めったに使わないさ。それにしてもいいのか？僕はセイバースの人間。周りとは違うぞ？」

暗に、今まで通りでいいのかと聞いて来るカイルの肩に手を回して言う。

「特尉だかなんだか知らないけどさあ、お前が変わってるのなんか

百も承知だよ！ 今更態度を変えるかよ」

「……………とう……………」

「うん？」

「何でもない。暑苦しいから離れる」

「冷たい奴だなあ」

幸人は首をやれやれと振って離れると、ニヤニヤ笑ってカイルに言う。

「そう言えば、ルチアちゃんだっけ？ 可愛いのか？」

「何だ、いきなり…………… 鼻屑目無しで、クレアよりは可愛い」

「凄い鼻屑目が入った気がしなくも無いが、スルーして…………… そんな可愛いルチアちゃんに、自分の事を何て呼ばせてるんだ？」

カイルの動きが止まる。

嫌な汗が背中から溢れるのを感じつつ、カイルは目の前の幸人を見る。

ニヤニヤ笑っていた。

「お兄ちゃんだ！ 文句があるかっ！！」

「やべえ！ シスコンだ！！」

「誰がシスコンだあ！！」

「お前だよ！！」

幸人とカイルは石造りの道をそんな風に騒ぎながら、走った。

決してこの友人と戦う事は無いようにと願いながら。

この日常が崩れない事を祈りながら。

第四話「特訓」(前書き)

さてさて、皆さん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。武道家です。

思いきってランキングに登録してみました。クリックして入ってくださいれば幸いです(笑)

今回は題名の通りかと。
ではお楽しみください。

第四話〔特訓〕

世界間のボーダーライン

第二部〔魔法の勉強〕

第四話〔特訓〕

幸人の朝は早い。毎日欠かさない朝練があるからだ。

三週間前くらいはカイルとリアラが来るようになったが、今日は二人ともそれぞれの理由で来ない。

カイルは昨日は少し夜更かしをしたからで、リアラは朝の空いてる時間に図書室へ行くらしい。

なので、今日は一人で最近やっていなかった体力作りと技の確認をする筈だったのだが。

「何故二人が居る」

「お前の朝練に興味があった」

「カイル君からメールで教えてもらったの」

幸人の目の前には青いジャージを着たカイと、ピンクのジャージを着たサナの姿があった。

幸人にとって朝練は結構重要な一人の時間だったのだが、最近

一人でやった試しがない。

朝から中庭で騒がしくするのもあれなので、幸人は控え目に言う。

「帰れ」

「断る」

「いやよ」

「だあああ！！ カムバック、静かな朝練！！」

両手を地面についてうなだれる幸人にサナがそつと近付き、呟く。

「さあ、まずは私との模擬戦よ。この前の勝利がまぐれだったと証明してあげるわ」

「何度も分かかってるって言ってるだろ？」

好戦的なサナに辟易しつつ、幸人はローブを着て、構えを取った。

五分後。

「完封負けだな」

「はあはあ……くそっ！」

「当たり前よ」

地面に這い蹲る幸人と、多少汗をかきながらも、余裕を残したサナの姿が中庭にはあった。

近づいての接近戦しか無い幸人に対して、サナが効果的な牽制の誘導弾を使った結果である。

幸人のローブには、周りの魔力への干渉を避ける為、本来ローブ

の周りに展開されている魔力障壁が無い。その為、防御自体はロブしか無いので、威力の弱い魔力弾も馬鹿に出来ないほど防御が薄いのだ。

威力の弱い誘導弾を避けている間に距離を取られて、射撃魔法の雨を降らされる。

その繰り返しが五分間の内容である。

「飛び道具が無いのは痛いなあ」

「一層、ローブを強化するか？」

「いや、弱い誘導弾ならまだしも、威力の高いのが来たら、オレ達程度の魔力で強化した防御なんて紙だ」

同タイプ《接近戦オンリー》の二人が深刻な顔で話し合う。

流石に同年代の女の子に手も足も出ないと言うのは、男としてちよつと如何なものかと思うので、カイと解決策を講じていたのだが、なかなか妙案は浮かび上がって来ない。

魔法の攻撃は、基本的に魔力への攻撃である。

当たれば3割程度は肉体へのダメージに、7割程度は魔力を削る。

近接系の魔法やカイのような空属性はちよつと違うのだが、基本は魔力7割、肉体3割だ。

だが、それを考えると、ここでちよつとした問題が発生する。

魔力を削られる＝魔力が減っていく。

つまり、肉体的な耐久力が高いカイと幸人だが、魔力的な耐久力は超低いのである。

削られる度に魔力は減っていき、魔力が減れば身体能力が落ちて、

また削られるの悪循環に嵌る。

しかも、下手にロープや魔力障壁の防御力を上げて、相手の魔法によって削られた分を補充しなければならぬ為、結果的にはあまり変わらないのである。

すっかりドツボにハマった二人にサナが呆れながら言う。

「クガ君。格闘技の技で遠くの相手を倒す技ないの？」

「” 武術” な。だいたい遠くの相手を倒すなんて“ 遠当て” ぐらいしか……」

幸人は自分の発言に気付くと、幸人はサナに聞く。

「サナ。魔力って飛ばせるのか？」

「魔法でって意味じゃないのよね？ とりあえず可能よ。まあ基本的に魔力をそのまま飛ばすくらいなら魔法を使った方がいいわ」

「サンキュー。じゃあ飛ばし方を教えてくれ」

「人の話を……はあ、とりあえず魔力を手に集めて」

やる気になっている幸人を見て、注意する気も失せたサナは、投げやりに言う。

「後は集めた魔力を飛ばすだけ、投げるなり何なりとしなさい。けど、魔法じゃなくてただ飛ばしたただだから、直ぐに霧散するし、威力も大した事ないわよ？」

「上等！」

「駄目、もう話を聞く気も……ってプロイス君はやつっちゃ駄目よ？」

「なんでだ？」

「自分の属性を考えなさい。そこら中を空間干渉で消し去る気？」

「忘れてたあゝ!!」

サナは一人で掛け声を掛けて魔力を飛ばす練習をする幸人と、両手について悲嘆に暮れるカイを見て、盛大にため息を吐くと、小さく呟いた。

「本当に馬鹿ね……Gってこんなのはつかなのかしら？」

Gクラスの評価を著しい下げた二人に視線をやりつつ、サナは額に手を置き、首を振りながら、またため息を吐いた。

7月の上旬。そんなある日。

午後の実技学習で、第二寮はクラスに分かれずに全てを中庭に集合させられた。

「何かあるのか？」

「さあな。まあ変わった事をやるのは確かだろうな」

クラスに分かれなかった事もあり、幸人はカイルとそんな会話を交わっていた。

さっきまでリアラも側に居たのだが、サナに呼ばれて違うグループで今は喋っている。

良い傾向だと幸人は思った。

最近はずなが女の子のグループにリアラを良く入れて、リアラに色々話題を振ってくれている為、リアラの交友関係は広がっている。

カイルの話聞いた後な為、少し観察してみたが、リアラに暗い影は無い。

カイルも今までと変わらない、と言うか、今まで自分が気付かなかっただけで、さり気なく監査をしていたらしい。

リアラの変化に満足しつつ、今は自分の事と頭を切り替える。

せつかく出会えた魔法だ。センスが無いにしても、少しは使えるようになりたいし、何よりも。

「友達の背中を見るのは好きじゃないからな」

「安心しろ。僕の背中は大分見えて来ない」

「お前は どうして そう言う事を言うかな」

「事実だ。歩みを緩めるつもりも無いから、追い付くなら走って来い」

「はいはい。全速力の最短ルートで行くよ」

幸人とカイルがそう笑いながら話していると、幸人の頬を誰かの指がつつく。

「また二人でおしゃべりして〜」

不機嫌な顔をしたリアラだった。どうやらかなりご機嫌斜めらしい。

頬を膨らました姿は怒ってるのに小動物にしか見えないけど、言

えば更に機嫌が斜めに傾くのが目に見えてるから止めとこ。と幸人は心の中で呟いた。

女の子の機嫌を損ねない。多分それが新時代の正しい生き方。基本的にいつの時代もその通りなのだが、そんな事を考えている間に、幸人の頬はリアラの指の猛攻にさらされていた。

「リアラ……地味に痛いんだけど」

「また、私を除け者にして」

「爪が、爪が刺さる！」

「うっうっ」

「痛いっちゅうねん！」

何故か関西弁で突っ込みつつ、幸人はリアラの頭部へチョップを割と強めで叩き込んだ。

リアラは未だにうっうっ唸っているが、今は頭を押さえて唸っている為、先程のチョップが原因だろう。

「叩く事無いじゃないですかあ」

「やかましい。リアラが悪い。なあ？ 裁判長」

「女性を殴った男は、その時点で有罪だ」

「ぬう」

期待していたような答えが返って来なかった為、幸人は周りを見渡すが、誰一人として取り合わない。

カイと目があったが、向こうは向こうでちょっと取り込み中らしい。多分、また誰かと面倒な事になっているんだろう。

「どなたか裁判長はいらっしゃいませんかあ」

「裁判長が乗ってたらびっくりね」

「通じた!？」

幸人はサナの答えに、世界間の壁を越えたモノを感じたが、それは次のサナの答えで脆くも崩れ去った。

「どこも変わらないわよ。MPTに翻訳の魔法がついてるんだから
「なんと……文明の真髄は世界間の壁を越えたと思ったのに……」
「言ってる意味は分からないけど、多分ロクな事じゃないって事は
分かったわ」

サナの呆れ混じりの声を聞いて、幸人はすぐさま反論する。

「失礼な！ この手の話しが大好きな人間は、地球にはいっぱい居るんだぞ！」

「地球にはまともな人間は居ないのか……」

後ろから聞こえてきた気だるげな声に、幸人は振り向く。

視界に飛び込んできたのは30半ば程度の男の顔。

第一学年主任で、Gクラスを担当する事が多い、ホーキンスである。

「人の会話に割り込まないで下さい」

「お前が一人で喋っているようにしか見えなかったが……まあいい。とりあえず全員良く聞け！」

ホーキンスは集まっていた生徒達を見回すと、今日の授業の概要を大きな声で喋り始める。

「今日集まってもらったのは……来週行われる期末試験の内容の説明と準備をする為だ。いいか、今回の期末試験は“合同試験”を行う」

「合同試験？」

「AからGまで、全て一緒だ。三人一組のチームを作り、一週間の準備期間の後に、臨んでもらう。尚、A、B、Cの人間達はF、Gの者達をチームに加える事。人数などで問題が出た場合は私が判断する。自分のスキル、相手のスキル、色々考えて決める」

その言葉に幸人は心の中でガッツポーズをした。

その条件ならば、カイルとリアラとも組める。

そんな事を考えていると、幸人の視界に、人の悪い笑みを浮かべたホーキンスの顔が映った。

背中に嫌な汗が吹き出る。

あの笑顔はマズい。何か良からぬ事を考えている笑顔だ。

「なお」

「なお？」

「マクスウェルとグランディオは過剰戦力なので……別試験だ」

「神は死んだ……」

「二人に協力されると、周りには到底クリア不可能な試験になってしまうのでな。それに……私がお前に楽をさせるとでも思ったか？」

「本音が出た!？」

幸人はうなだれつつ、周りを見る。

ざわざわとチームを作り始めているが、少なくとも、幸人のスキルは魔力強化による運動能力のみ。
好き好んでチームを組もうと思う人間など。

「クガ君。私と組みましょ」

居た。

本人の快活さを表す短めの栗毛を揺らしてくる小柄な少女。サナだった。

幸人は声を掛けてきたサナを見ると、右手にカイを掴んでいる。

「プロイス君は人気があるから……攫ってきたわ」

「サナ……キャラが……」

「私の評価を上げる為には、二人と組むのが一番なの。それに……簡単な試験って面白くないでしょ？」

「俺の人権つてか拒否権は……」

「あるわけないでしょ？」

「だよな……」

サナの強引さに顔をひきつらせる二人をよそに、サナは元気良く宣言する。

「さあ、トップを目指して頑張るわよ！」

「トップ!？」

「この布陣メンバで?!」

「当たり前よ! 二人には魔法のスキルはないけど、能力はあるわ。だから一週間で私が“魔法”を教えてあげる」

サナのその宣言に、再度二人は顔をひきつらせた。

三日後。

サナのまさかのトップ狙い宣言からの数日で、幸人とカイは自分達のサナ・フォーエンハイムと言う少女への認識の甘さを痛感していた。

この数日、授業が終われば図書館へ向かい、自分達のような人間が比較的覚えやすい魔法をサナと共に探し、見つけたらサナと共に特訓、と言う事を二人は繰り返していた。

そして今も、二人はサナのしごきに耐えかねて、本城の中庭でへばっている。

「魔力のコントロールはなかなか様になってきたわね」

「くそ、この“強化サポーター” どうか出来ないのか？ 授業の時とか邪魔で邪魔で……」

カイが自分の手首に付いているサポーターを見せながら、サナにそう呟くが、サナは呆れたように言い返す。

「何度も言わせないで、無駄な魔力を使ってる暇はないの。魔力は無限じゃないんだから、普段から節約しないと」

サナが二人に付けたサポーター。正しくは“魔力調整サポーター”と言い、サポーターに入力された魔力以上が出せなくなるサポーターで、セイバースや軍でも犯人や捕虜たちの拘束具に使われるモノの劣化版である。

幸人とカイの魔力の量は並みだが、魔力での身体強化は想像以上に魔力を使ってしまう。

故に、サナは完璧な魔力操作を覚えさせる為に、授業が始まる前に、使う魔力値を先生に指定してもらい、二人にその数値をサポーターに入力させていた。

魔力の微妙な調整を授業中にやらされた二人は、何とか三日で、かなりのレベルで精密な魔力操作が出来るようになっていた。

「そろそろ魔法を覚えてもらおうよ」

「えらい簡単に言うけど、オレ達は学校に来てから3ヶ月で全く魔法を覚えられなかったんだぞ？」

「覚えようとした魔法が悪いのよ」

サナはそう言い切ると、幸人の近くに置いてあった本を取って言う。

「人には向き不向きがあるの。授業だけじゃなくて、図書室の本に載ってる魔法も挑戦すれば良かったのよ」

サナはそう言うと、空中で本から手を離す。

だが、本は地面には落ちずに空中で固定されている。

「これは変換魔法で魔力を透明な球体にして、その中に本を入れて固定したの。そして、これ」

サナはそう言っつて、指を弾いて魔法を解除する。
本は地面に向かって落ちて行くが、途中でふわふわと空中に漂い始める。

「属性魔法の“風”系統よ。まあ風っつて言っつても、実際は“大気中の空気に魔力を流して操っつてる”だけだけどね。でも、似たような効果を現す魔法なんて幾らでもあるわ。その中から自分に合っつてるのを選ぶの！ わかっつた？」

「は、はいっ！」

サナの剣幕にたじたじになる幸人とカイだが、そんな二人を気にせず、サナは二人に一枚ずつ紙を渡す。

「これは？」

「二人の特徴とか癖を見て、直ぐに出来そつな魔法をリストアップしたモノのよ。特にプロイス君は、空の属性なんだから、もつと空間を使う魔法を勉強すべきよ」

「いや、でも、俺は自分の魔力を体から離す事が出来ないんだけど……」

「あのね？ 何のために魔力操作を徹底させたと思っつてるの？ それに、そこに書いてあるのは、空の属性っつて言うか“空間に魔力が干渉してしまつ性質”の人達が考えた魔法よ。問題ないわ」

サナはそう呟くと、二人に交互に視線を向けて言う。

「あと三日はその魔法を覚える特訓。そして残りの1日は休養よ」

サナの笑顔を見つっつ、幸人はあと三日は地獄だと、心で呟いた。

第五話「初めての魔法」(前書き)

遅くなってすみません！第五話です！

第五話「初めての魔法」

世界間のボーダーライン

第二章「魔法の勉強」

第五話「初めての魔法」

試験のメンバーが決まってから五日後の朝。

昇ったばかりの太陽の光を受けるアルカーディアの校舎にある高い時計塔。

その屋上に一人の黒髪の少年が立っていた。

風が強い中、四角い時計塔の屋上の真ん中で、少年は目を瞑り、体は自然体になっていた。

まるで風をその体で感じるかのように。

『空気中に自分の魔力をとけ込ませる。最初は流れに逆らうな。ゆっくりやれば良い』

「ああ」

少年が指にはめている黒い指輪が少年にアドバイスし、少年もそれに従い、自分の魔力を空気中にとけ込ませる。

【ブレンド】

トリガーワードを呟き、自分の体から溢れた魔力が空気と混ざり合っっていくのを肌で感じつつ、少年は更に集中していく。

魔力とブレンドされた空気は少年の意に従い、しっかりと動くようになっっていく。

少年の周りに風が集まり、少年を中心に竜巻を巻き起こす。しかし、竜巻は少年に傷一つ付けずに更に回転を増していく。

そして。

【バースト】

少年のトリガーワードで、魔力と混じり合った空気が弾ける。少年を中心にしていた竜巻が四方に突風となり散る。

『ブレンドとバーストはもうマスターしたな。後はその応用だ』
『ブレンドとバーストは魔力操作に近かったから楽だったよ』
『これはあくまで魔力操作の発展だからな。厳密には魔法ではない』
『道は遠いなあ。あとのヤツは魔法に分類されるのか？』
『とりあえずはな』

指輪の言葉にガッツポーズを決めると、少年は言う。

「これでサナとかに一歩近づいた。次は負けねえ」
『主が本当に倒す気になれば、フォーエンハイムには負けはしない。主がやって負けるのは、グランディオとプロイス程度だろう』
「カイ？ サナやリアラじゃなくて？」

『その二人は条件によるが、我があげた二人はデタラメだ。特にプロイスは、な』

指輪の含みある言い方に少年は嫌な予感を感じつつ、指輪に恐る恐る聞く。

「カイってもしかして……凄いの？」

『少なくとも主やフォーエンハイムよりはな。奴が持つてる特殊な資質は、強力な空の属性と無詠唱特化だ』

「無詠唱特化？」

『奴は気付いていないだろうが、既に魔法を使っている。空の属性の魔力は普通は、変換魔法や他属性と相性が悪い程度だ。断じて“空間干渉”を起こす効果などない』

「そうなのか?!」

『奴の空間干渉は、奴が無意識に空の属性は“空間干渉を起こして物を消し去る”と言う性質を持つ思い込んでしまっており、その無詠唱特化で実現させてしまっているから起きる現象だ』

指輪の説明に少年はついて行けず、最終的に指輪に簡単にまとめてもらった。

「つまり？」

『はあ。奴は既に優秀な空間魔法の使い手だと言う事だ。他の学校が引き受けなかったのは、多分“自分達では育て切れない”からだろう』

「カイって実は凄かったんだなあ」

『奴は主の天敵に近いぞ？ 空間魔法の特徴は“詠唱が長いが、強力”だからな。転移魔法もその一種で、詠唱が長いから固定式の転移魔法陣を皆使うのだ』

その意外な事実に納得しつつ、少年は直ぐに恐ろしい光景を想像してしまう。

それは。

「ちょっと待って……つまりカイはこれから頑張れば……」
『デメリットが無い空間魔法を使う反則気味の魔導士。主が良く言う瞬間移動も可能になる』

瞬間移動で後ろに回って攻撃してくるカイに手も足も出ない自分の姿だった。

カイには気をつけよう。

そんな決心をしている少年に、声を掛ける人間が屋上に来た。

「ここに居たんですか。探しましたよ。ユキト」

聞き慣れた澄んだ声に幸人は振り向く。

風に靡く長い銀髪に透き通った蒼い目が印象的な少女。リアラがそこにはいた。

「風が強く感じれる場所が良かったんだ。でも、良く分かったね？」
「もしかしたらって思ったんです。正解でした」

上下とも白い制服に身を包んだリアラがはにかみながら、幸人に持っていたタオルを渡す。

「ありがと。でも、一人で歩くとソフィアに怒られるよ？」

「校舎内なら安全ですし、今はユキトが居るから大丈夫です」

全幅の信頼をその言葉に感じつつ、幸人は苦笑して言う。

「そりゃあ何かあれば守るけど、忘れてない？ オレはリアラより弱いんだよ？」

「ユキトが私に詠唱する時間をくれれば、例えカイルが来たって問題ありませんよ」
「大きく出るなあ」

肩をすくめて困ったように笑う幸人を見て、リアラはまた笑みを深める。

「サナとの特訓の成果。見せてもらっても良いですか？」

「勘弁してくれ。さっきやったばっかだよ」

「さっきのは下から見てました。他にもあるんじゃないですか？」

「……叶わないなあ」

ニコニコと笑顔で幸人の目を見て来るリアラに勝てず、幸人はリアラに離れててと言う。

『成功率は五分之一。女の前でやるには少し低い気がするが？』

からかいが混じった声に幸人はため息を吐くと、自分の頭で魔法の構成を練り始める。

魔法の構成は数秒で完成し、幸人は直ぐに空气中に魔力を溶かす。

ブレンドされたのを確認すると、幸人は第二寮がある東を見る。
寮自体が巨大な為、確認は出来るが、なかなかどうして、今はか

なり縮小されている。

そんな第二寮に右手を向けると、幸人は魔力を腕から放出して、一つの魔法陣を作り出す。

色は鮮やかな翠。形状は六芒星。

ゆっくり回転するその魔法陣の中央に一つの風の玉が出来上がる。

そして幸人はその玉に魔力を注ぎ込んで、トリガーワードを呟く。

【トラスト・ゲイル】

風の玉の後ろが先ほどの竜巻のようにバーストし、風の玉を猛烈な勢いで加速させる。

東に向かった風の玉とは変わって、塔には一瞬、西側への突風が吹いた。

本を読んで、独自に学んだ魔法である。本来は災害時に瓦礫などを中から押し出したりする時に使われる魔法らしいが、考え方だけではいくらかでも利用方法はある。

自分の魔法が成功した事に満足しつつ、幸人はリアラへと視線を向ける。

何やらこちらを睨んでいる為、幸人は理由を聞いてみた。

「どうしたの？」

「見ました？」

「何を？」

「別に気にしないでください。あと、その魔法を使う時はしっかり
言ってください」

「いや、言うけどさ……??」

頭に疑問符を浮かべて首を傾げる幸人に、リアラは先ほどの夕オ
ルを投げつけて言う。

「魔法の勉強の前に女性への配慮と対応を勉強してください!!」

「何で怒ってるんだよ……」

「知りません!」

「知りませんって……」

目を合わせずに屋上から去って行くリアラに何とか機嫌を直して
貰おうと、色々と手を尽くした幸人だったが、その日の午後までリ
アラの機嫌が直る事はなかった。

試験まで残り一日になった日の午後。

その日は第一学年は午後の授業が免除となり、自分達の練習に充
てる事が出来た。

それは当然、幸人達のグループも一緒に、カイと幸人、そしてサ
ナの三人は、宵闇の森の近くの空き地で、今までの総復習と、新し
い魔法の確認を行っていた。

幸人は自分が覚えた魔法。

ブレンドとバースト、そしてトラスト・ゲイルを見せた後に、説明などをしてしていると、サナがいきなり声を出す。

「あゝクガ君。リアラの前でその魔法を使ったでしょ？」

「……ああ、使った。そしたら機嫌が悪くなった」

「……最低。スケベ。エッチ。一回死んでもう一回赤ん坊からやり直しなさい」

サナの発言にカイも納得したらしく、うわあなどと呟いているが、幸人は分からないように首を捻る。

「鈍感ってか……男なら誰でも思いつきそうな事に頭が行かないんだな」

「クガ君は、だからリアラと始終一緒に居られるのね。でも配慮が足りないわね」

「さつきから一体何なんだ？」

「リアラはどんな格好だった？」

「制服だ。確か、白いブレザーとスカート……ト……スカート……オレって死んだほうがいいかなあ」

気が付いた事に幸人は顔を青くすると、どこかへ行こうとするが、カイに羽交い締めになされて押さえられる。

「落ち着け！ あの神子さんの事だ。お前なら許してくれる！」

「許してもらっても、オレが耐えられないんだよ！」

「その年で“スカートめくり”はセクハラよ？ 犯罪よ？」

「ああっ……」

「追い詰めてどうすんだよ！？ クガっ待て！ 早まるな！」

宵闇の森に歩いて行こうとする幸人を必死に止めるカイは、サナ

を恨めしげに睨む。

「どうやらとっさに言葉が出てしまったらしい。カイから視線を逸らしている。」

それから、力づくで取り押さえた幸人を回復させるのに、二人は十分の時間を要す事になった。

十分後。

とりあえず回復した幸人に、さっきまでの事を思い出させないように、カイが自分の魔法の説明を始める。

「俺が覚えた魔法は“これ”だ」

【スペース・カット】

カイが右手を無造作に振りながら、トリガーワードを呟くと、十メートルは離れた所にあった石がカイの手の中に入った。

その光景に幸人は啞然とする。

「空間干渉を起こして、空間を消し去ったんだ。便利だろ？」

「便利じゃ済まないだろ……」

「あとは、コレだ」

カイは幸人に近付いて、手を伸ばせば触れる距離でトリガーワードを呟く。

【スペース・シフト】

一瞬で幸人とカイの距離が10メートル離れた。

「なっ……!!?」

「削った空間を任意の所に移すんだ。転移魔法とか無理だけど、これなら結果的には大して変わらないからな」

「実はプロイス君って凄いのね……」

サナも啞然としている。

サナが進めた魔法ではあるが、サナは効果を重視して、ある程度の詠唱が必要な魔法をリストアップしたのだ。

「無詠唱の空間魔法なんて……反則ね……」

サナの言葉に幸人も隣で頷いた。

無詠唱特化はさして珍しい資質では無い。変換魔法や普通の属性魔法であれば、人よりも無詠唱の速度が速いと言っただけで、大した事はないのだが、こと空の属性に関しては話は違う。

空間魔法は通常、無詠唱では出来ないのだ。それを無詠唱で出来てしまうのは空の属性を持つ人間だけ。けれど、その空の属性の人間でも、頭の中で構成を練るのには時間を要する。

だが無詠唱特化。言い方を変えれば“高速詠唱”のスキルがある人間にはそのデメリットは当てはまらない。

「他の学校じゃ受け入れてもらえないわけだわ」

「何か言ったか？」

「別に。それよりも、プロイス君の魔法はちょっと頭を使わないと

ダメね」

「ん？ ああ、まあ使い方は試験によるだろ」

カイはそう言うと、離れた所から歩いて戻ってくる。

「まだ微妙な力加減が出来ないから、精密なのは無理なんだよなあ」

「嘆くな。オレが虚しいから」

「何だよ。大して変わんないだろ？ 俺とお前は」

「どっちでも良いわよ。それよりも、クガ君はもう一つぐらいないの？」

サナが話をサツサと切つて、地面に座っている幸人に聞く。

幸人は立っている二人を見ると、ため息を吐く。

「なによ」

「自分のセンスの無さを嘆いただけさ。まあもう一つ。魔法っぽいのがあるよ」

幸人はそう言うと、右手を開けた場所に向ける。

そして、詠唱破棄で一つの魔法を使う。

【ガスト・ダート】

小さな魔法陣が手に浮かび、そこから何かが放たれる。

「ごめん。速すぎて目で負えなかったわ」

「風で作った矢を飛ばしたんだ。さっきのトラスト・ゲイルの劣化版だけど、殆ど予備動作無しで撃てるよ」

「何だ。すっかり考えてたのね。トラスト・ゲイルは流石に大技過ぎて応用が利かなすぎるわ」

サナはそう言うと、幸人は自分の手を見ながら呟く。

「流石に、ね。自分の“戦闘スタイル”に合った魔法ぐらいは持つておきたいからね」

「そうね。クガ君の戦闘スタイルにはああいう速い魔法があつてるわ。誰と戦うつもりか知らないけど、ね」

サナの含みある言い方に幸人は一瞬、意識を戦闘モードへ移行させて言う。

「……周りを悲しませる奴らさ」

「周りを悲しませる奴らねえ。俺にはお前がどうしてそこまで周りを大事にするのかわかんねーけど……あんまり一人で突っ走ると良いことないぜ？」

カイの言葉に幸人は目を丸くする。

カイはニヤリと笑ってサナに振る。

「なあ？」

「そうね。実力の伴わない行動は暴走よ。まあ、そういう時に止めるのも友達で、一緒に行くのも友達だけどね」

「……ふう。分かった。出来る限り突っ走る真似はしないよ。今は試験のことだけを考えるさ」

二人に見られて幸人は観念したかのように両手を上げて、そう言った。

「素直で宜しい。では、自分達の魔法の上手い使い方や、試験の事について話しましょうか。クガ君の部屋で」

サナはそう言うと、元気よく二人を引っ張って行く。

「ちょっと待て！ オレの部屋!？」

「つてか引きずるな！」

「黙りなさい。舎弟A、B」

「名前すら無い!？」

ワイワイと騒ぎつつ、サナ達は明後日の試験へと備える為に、幸人の部屋へと向かった。

今、自分達が出来た事を出来る限りやる為に。

アルカーディア魔法学園。校舎本城の会議室。

会議室には三人の教師が集まり、第一学年の期末試験の最終確認をしていた。

「では、試験の内容はこのように。ホーキンス先生。任せましたよ」

ドゥーエスが資料を纏めつつ、四人掛けの机の右端に座るホーキンスに声を掛ける。

「分かりました。ですが、宜しいのですか？」

「何がですか？」

「……クガの事です。このルールではクガは圧倒的に不利です」

ホーキンスは机の資料に書いてある試験内容を見ながら言う。

「一人の生徒の為に試験を変える訳にはいきません」

「それでも……いえ、気にしないで下さい」

「……私はあの子なら大丈夫だと思っています。あの子の周りの子供達は優秀で素質があります。けれど……あの子にはあの子にしか無い“モノ”があります」

ドゥーエスはそう言うと、ホーキンスと、ホーキンスの隣で喋らずにいたレオンハートに断って部屋をでる。

ドゥーエスが出て行ったのを確認すると、ホーキンスはイスの背もたれに体重を預けて、横で試験の内容に不備が無いかを調べているレオンハートに言う。

「ライオンは自分の子供を谷に落とすと言うが……そう言う気持ちなのか？ 教頭は」

「俺に聞くな。だが、クガなら大丈夫だと思うぞ」

「どんな根拠があるんだ？ 学生時代からお前の言葉には根拠が無い」

ホーキンスは横にいるレオンハートにそう言うが、レオンハートは豪快に笑って言う。

「根拠は……クガが“アイツ”の自慢だからだ」

「……アイツの事を持ち出すなんて珍しいな……」

「クガはどんな運命の悪戯か、この学園にやってきた。ならば、俺達は護らなくてはいけない。向き合わなければいけない……その為

に強くなったのだから」

レオンハートの言葉に、ホーキンスは学生時代の旧友を思い出す。いつも三人で連んでいた。あの学生時代の光景を。

「そうだな。もう、私が護る番か……」

「ああ、その為には多少の壁には乗り越えられるようになってもらわなきゃいけない。教頭は多分、そんな思いだと思っぞ」

「……そうか……」

ホーキンスは自分の旧友の姿を思い出す。黒髪黒目の男の不敵な笑みを。

レオンハートは目線を書類に落とす。そこには、こう書かれていた。

第一学年 期末試験内容

《チェイス》

第六話「期末試験」上（前書き）

はいつて事で第六話です！

楽しんで下さい！

第六話「期末試験」上

世界間のボーダーライン

第二章「魔法の勉強」

第六話「期末試験・上」

アルカーディア魔法学園。第一学年期末試験当日の朝。

幸人とサナとカイは、自分達の最初確認を行っていた。

「あと一時間しか無いから、自分の回復量以上の魔力は使っちゃダメよ？」

「了解」

「わかったよ」

「あと、試験の内容だけど、多分今回も、例年通りの形になると思うわ」

サナの言葉に幸人は首を捻る。

「例年通りと言われても……」

「俺たちには理解できねえ」

「あつ、ごめん。えっと、一学年の期末試験は大体、トラップが仕掛けられてるコースを走るマラソンよ。最終地点に辿り着けばOK。チームだけど、個人の標点も付くから気をつけて。ゴールまで辿り

着けばA、トラップを全て攻略したけど、時間切れはB、あとはC評価よ。チームは二人以上がゴールすればA。ただし、ゴール出来なかった人間の個人評価は落ちるわよ」

一気に説明したサナは一息入れて、最後に補足する。

「ただ、あくまで去年までの事。今年は評価の仕方や試験の内容を変えられる可能性もあるから、そこは臨機応変に対応して」

「わかったよ。臨機応変ね」

「了解。まあベストは三人でのゴールだな」

「当たり前よ。私たちはトップをとるんだから」

サナの自信満々にカイと幸人は顔を見合わせると、笑って答える

「「そうだな！」」

「宜しい。じゃあ行くわよ！」

「応よ！」

「ああ！」

三人はそんな会話をしながら、意気揚々と校舎の本城に向かった。

三人が校舎の中庭に着くと、そこは第一学年の生徒達で一杯だった。

「学年全体ねえ……多すぎだろ」

「文句を言わない」

「俺ってあんまり人が多い場所は好きじゃないんだよ……」

大事な試験前に情けない事を言うカイルに幸人はため息を吐く。

そんな幸人にサナが笑いながら声を掛ける。

「クガ君。愛しの女神様が誰かに取られるわよ？」
「は？」

不可解な顔をする幸人に、サナが右手で右を指す。

その向こうにはカイルとリアラがおり、そしてリアラの前には多数の男が居た。

「リアラを狙う男子は多いわ。知ってる？ この世界じゃ、小さい男の子の将来の夢の上位には必ず“神子の側に立っていた少年”、つまり初代ガーディアン《神子の従者》だったアレクセイのポジションが来るの」

「つまり、この世代の男は神子さんの側に居る事を夢見て、んで、学園で機会を得た訳だ」

カイルがサナの言葉をまとめる。

二人の言葉がからかい混じりになってるのを感じつつ、幸人は言う。
「う。」

「それで？」

「リアラが言い寄られてるのよ？ 助けに行かないの？」

「カイルが側に居るから問題ないでしょ。それに、オレにはリアラ

の交友関係に口を出す資格なんて無いしね」

幸人がそう言うと、サナとカイが顔をひきつらせて二、三步後ずさった。

「とんでもない唐変木ね……」

「ここは気を使ってやる所だろ……俺でも行くぞ」

「だから必要無いんだって。ほら」

幸人が顎でリアラ達の方向を指す。

サナとカイが見ると、リアラの前に居た男たちは、何かを諦めるように散って行く。

カイルが親しげにリアラと話していたのだ。

「ほらな？」

「うわあ……グランディオ……試験前にえげつないな……」

「見せつけて散らしたわね……彼ら、試験中はテンションが落ちよ……」

美男美女の話してる様子を見つつ、カイとサナはそんな会話をした。

「まあ、カイルに対しようなんて奴はいないだろ」

「確かに、ね。でも、クガ君はグランディオ君よりリアラに近いのよ？」

「何が言いたいかわからないけど、試験に集中した方がいいよ」

「分かってるくせに。可愛くないわね」

「オレは男だからね。そう言われるなら本能さ」

軽口を叩きつつも、サナはジト目で幸人を見る。

幸人はそんなサナの視線を受け流しつつ、決してカイルとリアラ
の方向を見ないように努力した。

見れば、汚い感情が奥底から這いでて来そうな気がしたから。

自分の心を説得するのに時間を取られつつも、目を閉じて、幸人
は自分の意識をどんどん集中させて行く。

まずは追い付かなければ始まらないから。

まずは背中を見つけないければ行けないから。

隣に並ばなければ。どんな事でも、肩を並べられないなら対等の
友人とは言えないから。

二人の友達で居たいならば。

幸人は閉じていた目を開いて呟く。

「……こんな試験で躓いてる訳には行かない」

それからすぐ、第一学年総勢844人は試験会場がある場所まで、
中庭に設置されていた大型の転移魔法陣で向かった。

転移した第一学年を迎えたのはホーキンスとレオンハートだった。

「マクスウェルとグランディオはこっちだ」

レオンハートが二人を呼び、別の場所へと連れて行くと、ホーキンスが第一学年全体に試験を説明する。

「さて、今回の試験は“チェイス”と呼ばれるものだ。ルールは簡単だ」

ホーキンスは近くにある丘を指差す。

「あそこまで行けばいい。但し、どんなルートにも先生方が仕掛けたトラップがある。また、幾つかの制限も設けてある」

ホーキンスは自分のMPTから、一つのデータを特別回線で生徒全員に送る。

「今、送ったデータには、君達の“ライフポイント”がある。ライフポイントは“保有魔力”に応じて決定する。つまり、保有魔力が低い人間は、ライフも低い」
「なっ!?!」

ホーキンスの言葉に幸人は自分のMPTを調べる。

MPTには五つの星があった。横を見ると、カイにも五つだった。

二人でサナのを見る。

サナのMPTには星が11個あった。

「このライフは“魔力攻撃とトラップ”を受けると“一つずつ”減っていく」

カイと幸人は顔を見合わせる。
つまり、カイと幸人に許されたミスは五回。

「先生！ それではあんまりにも下位のクラスの人達が！」
「Aの君からそんな意見が出るとは思わなかった。だが、社会に出れば幾らでも理不尽などある。魔力の総量で決めたのは皆同じ。断じて不公平ではない」

サナの抗議をホーキンスはそう言って切ると、ホーキンスは喜んでいる上位のクラスの間人たちと、沈んでいる下位のクラスの間たちを見渡して言う。

「試験中は私が君達を監視する。また、チームの試験でも“個人の評価”はしっかりする。覚えておけ！ 最後に」

ホーキンスは一旦言葉を切ると、自分の後ろにある生徒達を連れてきた巨大な転移魔法陣を起動させる。

「チエイイスでは、この“魔導人形”達がお前たちを追う。この人形達から逃げながら丘へ向かえ。質問は無いな？ 五分後には人形を向かわせる！ 制限時間は一時間半！ 期末試験・チエイイス。始め！！」

チエイイスの開始が告げられた瞬間、走り出そうとするカイを幸人とサナが両端で止める。

「何すんだよ！？ 早く行かぬーと」

「あの丘までは多分30分ぐらいで行ける。急ぐ理由があるか？」

「先を走ればトラップに引っかかるわ。ラストスパートに入るまでは中盤に居ましょう」

サナと幸人はそう言つと、今度は止めたカイを引きずって走り出す。

「うおっ！」

「頭を使いなさい。この試験にはちょっと心理的な仕掛けがありそうよ」

サナは走りながら二人に言う。

幸人とカイは、サナの両脇について辺りを気にしつつ、サナの話聞き始める。

「公平とは言ったけど、明らかに魔力が少ない人間は不利よ。だから、下位のクラスの生徒はその不利な状況でどう動くかが問われる筈。逆に上位のクラスは……あなた達、下位のクラスをどう“生かすか”を問われる筈」

「どう言つ意味だ？」

カイが頭を捻ってサナに聞く。

サナは自分のMPTを取り出して言う。

「魔力の総量で決まるライフ。幾ら何でもちょっと酷いわ。これじやあ上位の生徒は簡単にクリア出来ちゃう」

「そうか！　そこが最初のトラップか」

「はあ！？　理解出来ないぜ……」

「つまり。上位のクラスの生徒は“ただクリアするだけ”では評価が貰えないの」

サナは自分の推論を二人に説明し始める。

上位のクラスの生徒に有利に作られたルール。一見、公平そうなルールに最初のトラップが隠されている。

個人の評価などを強調された上位のクラスの生徒は何かクリアしようとする筈だが、その為にはチームに必ず存在する下位のクラスの生徒《足手まとい》が邪魔になる。

「切り捨てたらアウトだと思っわ。社会に出た際の事を先生は言っただけど、下位の生徒達は、理不尽にさらされるかも知れない。なら上位の生徒達は？ 将来有望と目される人達がする事は」

「部下などを使う事……か？」

「正解。だから上位の生徒はまず、チームの事を考えて、率先して動かなくちゃいけない。その為のライフ制よ」

幸人はサナの分析に舌を巻く。

たったあれだけの時間で先生の重要な言葉を聞き逃さずに、試験の目的を考えるなど、サナのマルチ・シンクと優れた頭脳が無ければ無理だろう。

「流石！ で？ 試験の目的や評価に気付いたからって俺達の状況は変わらないぜ？」

「私が出る限りカバーするわ。多分、トラップも上位の生徒“一人”だったらどうにかなる筈のレベルだから……」

サナの珍しい言葉に二人は目を見開く。

「なによっ……」

「いや、珍しいと思って……」

「そうそう。お前なら、自分達で何とかしなさい！ とか普通に言うかと思ってたし」

幸人とカイの発言にサナがキレる。

「悪かったわね！ 二人を誘ったのは私なんだから、私が何とかするのは当然でしょ！」

「いやいや。しっかり魔法を教えてもらってたし」

「大体、俺達が最初から庇われるような性格だと思うか？」

サナは驚いて、二人を交互に見る。

サナの反応に二人は笑いながら言う。

「流石に同年代の女の子に庇われるってのはいただけないし」

「女の後ろでガタガタ震えるってのもちよっと男としてどうなんだって感じだし」

「二人とも……」

「なにより……サナが言ったんだろ？」

「トップを取るって。推論が正しければ、ゴールしても全部お前にやらせてたら俺達の評価はが落ちた」

「サナだって、オレ達を生かさなきゃ評価が上がらない訳だしね。

ここはチームワークで何とかしましょうよ」

幸人はそう言うと、二人より少し前が出る。

「アタッカーはオレがやるよ。カイはサナの援護と護衛。サナは頭脳労働と指示と後方援護とトラップの解除と……それから」

「まだやらせる気！？ さっきと言ってる事が違うじゃない!？」

「お前が一番優秀なんだから、お前が一杯仕事するのは当然だ」

「なによりリーダーだし、色々押し付けさせてもらっよ」

ケラケラ笑う二人を見て、人選を間違えたかと本気で思ったサナだったが、直ぐに気持ちを切り替えて言う。

「分かったわ！ そんなに言うならやってやるわ！ 二人も足手まといにはならないでよ！」

「了解！」

「分かったよ」

三人はチームワークを確認し、第一のトラップが設置されている場所に差し掛かるうとしていた。

幸人達が走っている頃、ゴールの丘とは反対方向の丘に、レオンハートとカイルとリアラが居た。

「さてと“昨日”は試験ご苦労だったな」

「ええ。全くです。まさか試験が“トラップを作る事”だとは思いませんでした」

「本当に私達の試験はあれで良かったんですか？」

リアラが反対側の丘へと続く道に設置された数々のトラップを見ながら言う。

リアラとカイルの二人に課せられた試験は、生徒達のレベルに合わせたトラップの作成だった。

「グランディオもマクスウェルも良い出来だった。後は引っかかっ

てからのお楽しみだ。まあ、グランディオのは情け容赦が無い出来だったが」

「AとBクラスの人間なら突破出来ます。“他の人間と協力”しなければなりません」

「試験の意図に気づいてたか……だが、同年代に厳しくするのは恐れ入った」

「試験は試験です。僕は自分の成績を落とす気はありませんし、僕の友人達ならどうとでもします」
「私も同じです」

レオンハートは大柄な体で豪快に笑う。二人が指す友人が分かっただからだ。

「クガがあの特ラップを突破するのは厳しいと思うが？」

「心配ありません」

「ユキトなら」

「大丈夫です」

二人の大切な友人が自分を信じているとは知らずに、幸人はチェイスへと臨んで行く。

そして後ろでは。

「さてと、そろそろ起動させるか……」

ホーキンスが準備を始めようとしていた。

様々な人間の思いや知恵が入り乱れる第一学年の期末試験チェイスは波乱の予感を漂わせつつ、第一の関門へと差し掛かった。

経過時間は三分二十八秒。

残り時間は一時間二十六分三十二秒。

脱落者 0

第六話「期末試験」中（前書き）

申し訳ありません。風をこじらせて、更新を滞らせてしまいました。待って居て下さった皆さん。本当に申し訳ありません。

今回は第六話の中。

はい、すみません。長くなり過ぎて、三個に分ける羽目になりました。

では、お楽しみ下さい。

第六話「期末試験」中

世界間のボーダーライン

第二章「魔法の勉強」

第六話「期末試験」中

幸人達三人は、先に行った生徒達が立ち止まっているのを見て、足を止める。

「何だ？」

「さっそくかしら」

サナとカイの会話を聞きつつ、幸人は一つの看板を発見する。

最も高みに居る人間を前にし、最も低き者を真ん中に、どちらでもない者を最後にし、線を越えよ。間違えればライフを貰う

幸人とカイはそれを見て、サナを前にし、幸人が真ん中、カイが最後の隊列にする。

その行動にサナはため息を吐く。

「実力順なら誰も立ち止まらないわよ……」

「あっ……」

「そっか……」

「馬鹿ばっかね。まあ助かるけど」

サナはカイを一番前にし、自分を真ん中、幸人を一番後ろに持つて行く。

「へっ？ 何やってんだ？」

「早く！ 人にバレると面倒だわ」

サナはそのまま二人を引きずり、誰もこちらを見てないのを確認し、引かれていた線を三人で渡る。

「スルー！？」

「早く行くわよ！」

サナがサツサと走り出すので、幸人とカイは急いで追っていく。

「何だっただんだ？」

「あれは“背の順”よ。自分達の力を過信してる上位の人間達に痛い目を見させるトラップね」

「背の順って……」

「あんなのはただの言葉遊びよ。高みと低い。すぐ分かったわ。大体、パターンが少なすぎるわ」

サナはパターンを幸人とカイに言わせる。

「オレが前で、後ろが二通り。サナが前で後ろが二通り」

「で、俺が前で後ろが入り代わりで二通り……計六通り」

「ちなみに、今の時間は4分ちよい。あそこで時間を食うと魔導人形が襲ってくるわ。数は30前後。実力は……クガ君は戦った事が

あるんでしょ？」

幸人は森での魔導人形を思い出す。
とっさの事で目に入らなかったが、言われて見れば似ている姿だったと思う。

色は黒だったが、確かにあの時の青い鎧と同じ巨大な鎧の姿だった気がする。

自分の注意力の無さと記憶力の無さにへこみつつ、幸人は答える。

「一体だけでも厳しいよ」

「多分、あれはホーキンス先生が手を加えた改良型よ。生徒に倒す事はまず無理な程度の実力かなあ」

「それってマズくないか？」

「だから気づかれないように抜けたんじゃない。五分って短さは、あのトラップに引っかかる人間達を見越しての事ね。足止めが一杯ならそれだけ時間も稼げるわ」

サナはそう言うと、幸人を見る。

「クガ君。ちょっと頼み事があるの」

「何？」

「風で先を読み取ってくれる？ 少なくとも二キロくらい先まで」

幸人はその申し出に頷き、体から魔力を出して、空気と混ぜり合わさせる。

【ブレンド】

幸人は、自分の魔力が混じった風を先へと進ませる。

途中で何組かのチームを抜き、二キロを過ぎた辺りで、トラップがあった。

目を瞑って意識を集中しつつも、速度を落とさずに走っていた幸人は、風を感じ取った情報を読み取り、サナとカイに伝える。

「二キロ過ぎの所に大きな“川”が道をふさいでる……何人かが流されてコースから外れてたみたい」

「川か……歩いて渡れそう？」

「流れが急だから無理かな」

「飛び越えるのは無理なのか？」

「残念。どういう訳か。川の上に差し掛かると風でとばされるらしい」

「コースから外されるのは嫌ね……」

幸人は風とのリンクを保ちつつ、サナの声を待つ。

「分かったわ。ありがとう」

サナのOKが出た為、幸人は風とのリンクを切り、目を開く。

「結構疲れるな……」

「ありがと。おかげで対策が練れるわ」

サナは幸人にそう礼を言うと、カイに視線を向ける。

「プロイス君。ちょっといい？」

「何だ？」

「水を一瞬で良いから切り取れる？」

「一瞬なら、な」

サナはそう言うとブツブツ呟いて走りながら考え始める。

「あのね。サナ」

「なに？」

「スピードが落ちてるんだけど……」

現在、三人で魔力強化を使ってるのはサナだけである。

二人が強化して走った時に、サナが全く追い付けず、いちいち二人に調整させるよりは、サナが二人の平常時に合わせた方が早かったからだ。

多少のスピードダウンで、二人の集中力と魔力を温存出来るなら考えたのだ。

「ごめん！」

サナは急いでスピードを上げるが、集中力が思考に行ってるらしく、またスピードが下がる。

「サナ！」

「ごめん！」

「違いよ！」

カイと幸人は瞬時にサナを抱えて跳躍する。

サナは目を見開いて下を見る。

下には魔力弾が着弾して、煙が巻き起こっていた。

「魔力弾！？ 人形が来るには早すぎじゃ……」

「クガ！」

「やってる！ 魔導人形はスタート地点から動いてない！」

幸人は空気に魔力を混ぜて、風をスタート地点まで送って確認する。

「まさか……」

「何だ。心当たりがあるのか？」

「超長距離狙撃……ホーキンス先生が所有する魔導人形だから出来る技よ……」

「おっかねえもん所有してんだな……」

カイのコメントに二人は反応しない。

何故なら。

「クガ君！」

「分かった！ 捕まってる！ カイも急げ！」

幸人は走っているサナを背中におぶさると、カイを伴って自らに魔力強化を施し、最速で走り出す。

「おい！」

「ここまでは“射程圏”だ！ 狙い撃ちされるぞ！」

幸人は更にブレンドを使って、周りの空気と自分をリンクさせる。

「カイ、左！」

「うおっ!?!」

カイは幸人の言葉に反応して直ぐに左に逸れる。

その直後にカイが今まで居た場所に魔力弾が着弾する。

「クガ君! 川!」

「見えてる!」

幾つかの魔力弾を避けて走っていると、背中に居るサナの声に幸人は返事を返すが、今の幸人に目の前の川をどうにかする余裕はない。

「きゃっ……!」

サナが魔力弾の爆風に晒され、幸人の背中から弾かれてしまう。

幸人は思わず、後ろを振り返り、立ち止まってしまった。

「ダメ!」

サナの声を聞くが、幸人の体は全く動く事が出来なかった。

幸人に向かって魔力弾が飛んでくる。

時間が遅くなった感覚を覚えつつ、幸人は自分に迫る魔力弾を動けずに見ていた。

当たる。そう思った時に、幸人の手前で魔力弾がいきなり降下し、地面に着弾した。

「くっ!？」

幸人は襲ってくる煙と爆風に耐えつつ、二人に聞く。

「見た!？」

「ああ!」

「ええ、多分動く生徒に反応する魔法よ」

サナの分析に従って、カイと幸人は動きを止める。

先程まで断続的に撃たれていた魔力弾がピタリと止む。

「正解か……」

「危なかったわね」

幸人とサナがそう言っていると、カイが二人に声を掛ける。

「なあ……二人とも。川が……無くなってないか？」

カイの言葉に幸人とサナが川の方向に急いで視線をやるが、川は今まで通り、急な流れを保っていた。

「目、大丈夫か？」

「さっきのでやられたの？」

「本気で心配するのは止めてくれ……マジで川が無くなってんだよ」

幸人はゆっくりとカイの方向に向かって歩き、カイと同じ場所で川を見るが、川は一向に流れを止める気配は無い。

サナも確認するが、幸人と大して変わらない反応をする。

「カイ……」
「いや、マジで！ サナが動いたらマズいって言ったから……魔力強化を解いた」
「それだ！」

幸人は自分の魔力強化を解除して、川を見る。

「本当だ……」
「ウソでしょ！？」

サナも幸人に習って自分の魔力強化を解除する。
サナの目の前から川が消え、川があつた場所には小さな水たまりがあるだけだった。

「“幻術”……魔力感知タイプでしかも、魔力に反応しての“召喚”……？」
「どっするんだ？」
「ゆっくり歩いて進みましょう」

幸人達は抜き足、差し足でその場を離れた。

幸人達の様子を遠くから見ていたレオンハートは、豪快に笑いながら言つ。

「俺のトラップが攻略されたぞ！」

「何で嬉しそうなんですか？」

カイルが呆れたような口調でレオンハートに言うが、レオンハートは気にした様子を示さずに、大柄の体で豪快に笑う。

「三人とも、怪我とかは」

「してないな。今の所はだが」

レオンハートの報告にリアラはホッと胸をなで下ろす。

そんなリアラの様子にレオンハートは笑いながら言う。

「体だけは丈夫なクガとプロイスに、フォーエンハイムの分析力がついている。なかなか“良いチーム”だ。心配するな」

レオンハートはリアラを気遣って言ったのかも知れない。

だが、その言葉はリアラの心にさざ波を起こした。

良いチーム。

リアラやカイルが居なくても、幸人は大丈夫だと言う証。

普通は喜ぶべき所。教師に誉められたのだ。多分、試験は良い成績で終えられる筈。

だが。

(次の試験の時……幸人は私とチームを組んでくれるかしら……)

考えてはいけないと頭では分かっているが、心が言う事をきかない。

思考の泥沼にはまってしまったリアラにレオンハートが声を掛ける。

「さてと、トップの組がお前たちのトラップに近付いてる。近くに行つてトラップを発動させて来い。その後は近くで待機。もしも生徒と遭遇したら、お前たちは生徒のライフを一つ削れ、削れなかった場合は評価かが下がるからな」

レオンハートの言葉で、リアラは俯いていた顔を起こす。

まだ試験は終わっていない。

余計な事を考えてる暇は無いのだ。

そう自分に言い聞かせると、リアラは近くの転移魔法陣で、試験会場の森に転移する。

その頃、幸人達は、川を越え、順調にトラップをクリアして進んでいた。

クリアしたトラップはあれから二つ。

一つは魔力弾が跳弾するトンネルを突破するもので、これでサナ

がカイと幸人を庇って、二つのライフを失った。

その次は物の運搬で、片側の荷物を魔法だけで制限時間内に運搬しろと言う試験で、これは時間ギリギリで突破する事が出来た。

現在のライフはサナが九に幸人が五にカイが五。

「丘が近付いて来たわ。トラップも後少しね」

「今、俺たちの順位はどんくらいなんだ？」

「多分、中盤の上位程度よ。問題は順位じゃなくて時間よ」

サナは幸人とカイに自分のMPTに映し出される残り時間を見せる。

「残り時間は約45分。トラップに引っかからず行けば、ある程度余裕のゴールを狙えるけど、一つでも引っかかれば時間が厳しくなるわ」

「じゃあスピード上げるか？」

「そうね。そろそろ上位に食い込まないと逆転が難しくなるわ」

そうサナが言うと、幸人とカイは自分の体に魔力を流して、魔力強化を施す。

「サナ！」

「ごめん。お願い！」

幸人の背中にサナがおぶさる。

幸人とカイはアイコンタクトをし、寸分違わぬタイミングでスタートする。

徐々にスピードを上げ、トップスピードになった頃に幸人がサナに“念話”を送る。

先程と比べ、直線に走っている分スピードが速い為、サナが上手く喋れないと判断しての事だ。

『サナ。トラップはあと、どの位かな？』

『念話ね。気遣いありがと。トラップは後、二つぐらいじゃないかしら』

『後ろの魔導人形を入れて、三つぐらいか……魔導人形はどの程度まで来てるかな？』

幸人はサナに念話で聞きつつ、周りに生徒が見当たらなくなった事を訝しんでいた。

前に行く生徒達に、自分がほぼ全速力で走って追い付けないほどの距離を離された覚えはない。

幸人がその事を不思議に思っていると、サナが幸人に魔導人形との距離を報告する。

『普通の魔導人形のスピードだったら、ここから15分くらいの距離に居ると思うんだけど、ホーキンス先生の魔導人形だから、10分くらいを見ておいた方がいいわね』

『後ろの人は全員失格って事？』

『違うわよ。多分ライフを減らされる程度で済んでるわ。但し、どこまで減らされるかは分からないけどね』

後ろから魔導人形の大群が襲ってくると言う、あまり笑えない光

景を思い浮かべた幸人は、それを振り払うかのように、サナに自分の疑問を伝える。

『サナ。人が居なさすぎない？』

『確かに、言われて見れば……知らず知らずにトラップの中に入った
ちやったかも知れないわね……』

「カイ！ 止まって」

「うん？ 了解」

サナの言葉を聞いて、幸人はカイを止める。

カイは幸人の言葉に返事をしつつ、軽く減速し始める。

だが。

「ぐわっ！」

止まろうとしたカイの近くで何かが爆発する。

カイはその爆風で弾き飛ばされる。

「大丈夫か！？」

「ちくしょう！ ライフを削られた！」

幸人がカイのMPTを見ると、確かにカイのライフが残り四になっ
っていた。

「トラップなのか……？」

「みたいね。気をつけて、何だか霧みたいのが出てきたわよ」

サナに言われてから間も無く、突如として現れた霧により、三人
の視界が奪われる。

「何だかマズくないか……?」

「とりあえず霧をどうにかしないと……」

「風で吹き飛ばす!」

【ブレンド】

幸人は魔力を空気に混ぜると、そのまま竜巻を起こして霧を払う。

だが。

「風船?……っ!?!」

幸人に近寄ってきた“赤い風船”が突如として幸人の近くで割れる。

「大丈夫かよ!?!」

「ライフを削られたよ……くそっ!」

幸人は辺りを見渡す。

少なくとも、30メートルほどに渡って五色の風船が無数に浮かんでいた。

「こんなのどうやって突破すれば……」

「二人とも、ちよっと手伝って!」

サナは幸人とカイを引っ張って後ろに下げる。

「何だよ」

「作戦があるの？」

「二人の協力次第で何とか」

サナは幸人達に風船の特性に付いて話し始める。

「多分、風船はそれぞれ反応するモノが違うはず。赤は魔力だと思
うわ。後、何色か分からないけど、動き。残りの三つを私が調べる
から、プロイス君はスペース・シフトで、風船を一つずつ私の近く
に引き寄せて、クガ君は私の近くに來た風船を撃ち落として、お願
い」

サナはとても真剣な顔で二人をお願いするが、この作戦に幸人は
難色を示す。

「サナが危険過ぎるよ」

「大丈夫。ライフを多少削られる程度は覚悟しないと」

「……わかった。危険になったら止めるからね？」

「ありがとね……プロイス君。大丈夫？」

「いつでも行けるぜ」

幸人とサナが喋っている間にカイは準備を終えたらしく、魔力を
体から溢れさせている。

「プロイス君のタイミングでお願い」

風船が反応するかしらないかのギリギリの線を見極めながら、サナ
がカイにそう呟く。

それを聞いてカイが集中し始める。

そんな二人を見つつ、幸人は風の矢を作り始める。

「まずは青だ！」

【スペース・シフト】

カイがトリガーワードが呟かれ、前に居たサナの近くまで“青い風船”が引つ張られる。

「これは、運動ね！」

サナが走り始めると、青い風船はかなりの速さでサナに近付き始める。

だが。

【ガスト・ダート】

幸人が作り出した風のダートが風船を貫き、サナに当たる前に破裂させる。

「やらせるか……」

幸人はそう呟くと、また新たなダートを作り始める。

残りは緑と黄色と紫。

自分達のタイミングをアイコンタクトで図る三人は知らない。近くでリアラがその様子を見ている事を。

近くの森で、リアラは幸人たち三人を手に汗を握りながら見ていた。

「あつ！ ユキト……」

幸人が魔法を使い、赤い風船の破裂に巻き込まれた事に、リアラは心配そうに呟くが、後ろから白い鳥の姿になっていたソフィアがリアラに突っ込む。

「自分が仕掛けたトラップだよ。リアラ」

「わ、わかっていり、わ」

「言えてないよ。噛んでるよ。動揺してるよ」

ソフィアに良いように突っ込まれ始めたリアラは拗ねたようにそっぽを向き、近くの大きな木に体重を掛ける。

風船と霧のトラップはリアラが考え、人が来る度に大容量の魔力を風船に供給しているのもリアラである。

「私は……ユキトの邪魔をしてる……」

「ユキトが聞いたら怒るよ？ あたしでも分かる。しょうがない事さ」

「でも……この試験の準備に私は何の力も貸せなかったわ……力になりたいのに」

「それもしょうがない。干渉は最小限にって言われてたんだから」

何とか力になりたいと言う気持ちは痛いほど分かる為、ソフィアはあまり強く言えないでいた。

少しの付き合いで、クガ・ユキトと言う少年がとんでもなく負けず嫌いだと言う事はソフィアにも分かった。

只でさえ、人の心の内に敏感なリアラが、ソフィアに気付けた事に気付かない筈はない。

間違い無く、クガ・ユキトは人に情けなどを掛けられる事を良しとほしない。

それがリアラのような“自分が守りたい”人間なら尚更の筈。

リアラも頭では分かっている。

故に、手加減はしていない。けれど、心がついて来ない。

「リアラ……終わったらユキトと話たらどうだい？」

「何を……？」

「自分はもつとユキトと喋ったりしたいって事を、さ。ユキトとの距離を感じるなら詰めれば良いのさ」

「けど……私は……ユキトに嫌われたくない……」

「臆病になってちゃダメさ。ユキトは優しい。リアラが一番知っているだろ？」

ソフィアの言葉を聞いてリアラは俯く。

リアラと幸人の関係は複雑なようで単純明快だ。

リアラが幸人に嫌われたくないと言う思いで遠慮している。この点に尽きる。

幸人は何でも話して欲しいと思っている筈。けれどリアラは臆病になり始めている。

大切なモノが出来てしまったから、失う事を恐れてしまっているけれど、そのせいで二人の距離が微妙に開いてしまった。

そんな事を考えて、ソフィアはため息を吐いて、元凶の幸人を見る。

必死で少女を守ろうとする姿に、宵闇の森に入って来た時の姿を重ねるが、何かが違う。

あの時は周りの事すら考えず、リアラにのみ意識を集中させていた。

(それに気付いて、安心してくれると楽なんだけど……)

未だに俯く自分の契約者《主人》を見て、ソフィアは人知れずため息を漏らした。

第六話「期末試験」下（前書き）

過去最高の文字数になってしまいました……（汗）

皆さん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。
武道家です。

風邪やら何やで更新が遅れて申し訳ありません。

またペースを戻して頑張っていくので宜しくお願いします。

それではお楽しみ下さい。

第六話「期末試験」下

世界間のボーダーライン

第二章「魔法の勉強」

第六話「期末試験」下

幸人達は最後の風船である紫の反応を見ていた。

今までの四つは、赤が魔力、青が二次元での動作、緑が三次元での動作、・黄色が警戒《敵意》であった。

今の所、最も有効な手段は全速力での突破だが、もしかしたら紫の反応でそれも不可能になるかも知れない。

幸人はそんな事を考えながら、カイが先ほどスペース・シフトで引き寄せた紫の風船を見る。

「何にも反応しねーぞ？ ダミーじゃねえのか？」

「可能性は無くはないわね」

二人がそう言っている間も、幸人は紫の風船への注意を怠らなかつた。

幸人の中の何かが、気を抜くなとアラームを鳴らしていたからだ。

そして幸人は、二人が紫の風船から注意を逸らした瞬間に、アラ

ームの正しさを確信した。

二人が紫の風船から注意を逸らした瞬間、一瞬で紫の風船がカイに近付いた。

「なっ!?!」

【ガスト・ダート】

幸人はすぐさま、用意して置いた魔法のトリガーワードを呟く。

間一髪で、カイのライフを削る前に破裂させる事が出来た。

「サンキュー。クガ」

「何に反応したのかしら……」

「注意力、または“隙”だろうね。完全な奇襲用の風船だ……」

幸人は苦々しげにそう言う。

全速力での突破で、一体どれほどのライフを削られるか分からない為、こう言う不意をつくトラップが一番困る。

「奇襲用か……どうすんだ?」

「うん。大丈夫。良い作戦を考えついたわ」

サナはニヤリと笑って、二人に自分の作戦を説明する。

「時間も無いから、全部破裂させましょ」

「全部ねえ……どうやって?」

「これは二人にやってもらうわ。クガ君がああ風船群の中に入って、

反応の条件を全てやってもらおうわ」

幸人はサナにそう言われ、反応の条件を全てを満たす動きを考える。

「周りを“警戒”して“魔力”を使って“走って”“飛んで”、最後に警戒を“解く”……合ってる？」

「上出来。終わった後に、すぐさまプロイス君がクガ君を引っ張って、集まった所に私が“とっておき”を撃つから」

「了解」

「分かったよ」

カイと幸人はそれぞれ返事をする、体をほぐし始める。

三人とも準備が整った所で、幸人は、反応するギリギリのラインの少し後ろから、魔力強化で走り始める。

風船が幾つものある場所に到着すると、今度は周りを警戒しつつ、前に向かってジャンプする。

この時点でかなりの量の赤、青、緑、黄色が幸人の周りに集まり始めていた。

徐々に回避の選択肢が減りつつあるのを感じながら、幸人は詰み将棋のように、次の動きを選択して行く。

そして、自分の後方が開けた瞬間、幸人は視線を地面に落として、警戒を解いた。

紫の風船も幸人を囲い始める。だが、幸人は直ぐに風船の密集地

から脱出出来た。

【スペース・カット】

【スペース・シフト】

カイが幸人と自分の位置を直線にし、10メートルの距離を空間干渉で削り、10メートルを移動した幸人の手前に更に削った空間を入れ込んだのである。

カイのおかげで容易に脱出出来た幸人は、前に出たサナに一言言う。

「頼むよ」

「任せなさい！ 一つは二つ。二つは四つ。四つは八つ。描くは螺旋。降り注げ光弾。絶え間なく穿て」

サナの周りに合計八つの黄色で真円形の魔法陣が浮かび上がり、サナはトリガーワードを呟く。

「これが私のおき！」

【スパイラル・レイ・リピーター】

八つの魔法陣から、螺旋状に回転する魔力光弾が絶えず打ち続けられる。

魔法陣一つから秒間28発。一秒間で八つの魔法陣から計224発。それを3秒間続けて、総計672発の魔法を放つ“純戦闘用魔法”。それがサナのおきの魔法である。

魔力を余り込めずに撃つた為、地形を変えるほどの威力は出なかったが、密集した風船を破壊するには充分過ぎる威力を持っていた。

「やりすぎだろ……ってか最初からそれだけで良かったじゃん」

「はあはあ……この魔法は威力は高い射程がそんなに広くないし、なにより魔力を持ってかれるからあんまり使いたく無かったの……」

一目で消耗している事が分かるサナに二人は駆け寄り、幸人がサナを背中に担いで、早々にこの場を後にした。

だが、その場の誰も、離れて見ていたリアラとソフィアさえも気付かなかった事が、幸人の近くで起きていた。

宵闇の森でリアラを襲撃した、死霊付与で命を与えられた影。

けれど、全てが影に付与された訳では無かった。それは誰にも気付かれる事が無く潜んでいた。

久我幸人の影の中に。

そして行動を開始し始める。

何ヶ月も潜み、本体の能力と外見をコピーした“それ”は、ひっそりと幸人の影から抜け出し、森の中に隠れた。

残り時間、約30分。

ライフ消耗による脱落者 - - 38名。

幸人は知らない。これから待ち受ける戦いが、どれほど周りに影響を与えるかを。

幸人は知らない。自らの“戦闘技術”がどれほど優れているかを。幸人は知らない。膨大な魔力と鍛え上げられた戦闘技術が融合する力を。

サナを背負った幸人に、絶無がいきなり喋り掛ける。

『幸人。マズいぞ!』

「どうしたんだ?」

『直ぐに引き返せ! 理由は移動しながら話す!』

幸人は絶無の真剣な声に不安を感じ、立ち止まり、カイに消耗したサナを渡す。

「ごめん! 用事が出来た!」

「ちよつと!?!」

サナが止めようと動くが、カイがサナを止める。

「まあ、神子さん関連だろ? 行ってこいよ。但し、しっかり戻って来いよ?」

「あゝも、時間も少ないんだから、早くしなさいよね!」

「分かったよ……ありがとう」

幸人は二人にそう言うと、全力の魔力強化で来た道に戻る。

先ほどの全力よりも更に上の速度で走りつつ、幸人は絶無に説明を求める。

「ゼツ」

『死霊付与で主の影が取られたようだ。主の魔力と別の誰かの魔力が混ざり合い、判別するのが遅れた』

「死霊はもう入って来れないんじゃない……」

『ずっと潜んでおったのだろう。主の影の中に。用意周到な奴だ。我や教師たちにも気付かれずに居るなど、普通は不可能な筈だが……少なくとも、今は主の姿と能力が真似されたのは事実だ』

幸人は絶無の言葉に首を捻る。

道端に転がっていた木を飛び越えながら、絶無に聞く。

「真似する能力なんてあったのか？」

『多数なら無理だろうが、校長クラスの魔導士が一つの死霊を操っているのだ。可能だろう。それよりも、元々、死霊付与は“別の場所に居る術者の力を反映”させる魔法と言う事が重要だ』

「別の場所の術者の力を反映させる？」

『つまり、通常は死霊を術者の影や物に取り付けさせ、術者とリンクさせるのが死霊付与なのだ。今、主の影はその術者とリンクしておる筈……主の戦闘技術と姿に膨大な魔力……最悪だ』

絶無の忌々しげな声を聞きつつ、幸人は周りに注意を払う。

自分の魔力を感じた場合、それが影であるため、自分の魔力を探す。

「姿が取られても問題ない気がするけど？」

『馬鹿者が！ 神子は主に心を許しているのだ！ 主の姿は神子を油断させる最大級の“罠”だ！！』

「っ！？ 今、リアラはどこに居る？」

『先ほどの罠があった所の近くにあった森の中だ。急げ！』

幸人は場所を確認すると、森の中でリアラを助けに向かった時のような状態になる。

極度の緊張感の中での驚異的な集中力。それが可能にする超微細な魔力操作で、幸人の走る速度は更に上がる。

その目は倒すべき相手に向けられる。

その足は守るべき相手へ駆けて行く。

その腕は助けたい相手を包み込む。

その拳は穿つべき相手を待ち望む。

幸人は駆ける。

ただ、助けたい少女の為に。その姿こそが、久我心明流の在るべき姿だと、心のどこかで喝采を上げながら。

そして幸人は先ほどの風船のトラップが在った場所に来ると、迷わず森の中に入る。

近くには三つの反応。二つはリアラとソフィア。もう一つ。

「魔力までそっくりか……調子に乗るなよ！」

そう眩き、三つの魔力の近くまで行った幸人が見たのは、リアラに何かを話しながら、攻撃をする準備をする“自分”と、青ざめた顔でフラついているリアラだった。

迷わず幸人は加速する。

体が軋むが関係ない。あの“自分”が取っている構えはマズい。

聞こえてくる“自分”の声が、自分の考えが正しい事を認識させる。

「久我心明流・奥義の言」

幸人はソフィアに引つ張られても全く動かずにいるリアラにイラつきながらも、技が放たれる瞬間、リアラに向かって飛び込んだ。

今より3分ほど前。

幸人達以降、全く生徒たちが来ない為、考え事をしていたリアラは、一つの物音に反応する。

小枝が折れたような音を立てつつ、誰かがこちらに向かってくる。

リアラは顔を歪める。

生徒と対面してしまった場合は、立場上、試験官の一人であるリアラは規定上、ライフを削らなければならない。

その規定を作ったレオンハートを恨めしく思いつつ、リアラは近くの木に止まっていたソフィアを呼び寄せる。

「ソフィア。変化を解いて」

「わかったよ」

ソフィアの姿が白い鳥から、幸人と初めて会った時の子供姿に戻る。

ソフィアはリアラの横から、顔を覗き込むように言う。

「リアラ。大丈夫？」

「大丈夫よ。心配しないで」

ソフィアを安心させるように柔らかく微笑むと、リアラはソフィアの手を握る。

来てしまった人間には申し訳ないと思いつつ、リアラは手に魔力を込めて、身構える。

「うん？ リアラ？」

リアラは目を見開く。

何故なら、リアラの前に姿を現したのが幸人だったからだ。

「ユキ……ト？」

「ああ。何でリアラがここに居るんだ？」

リアラは自分の不運を呪った。

リアラが自分の不運を呪ったのは、人生で三度。

誰もが自分を“癒やしの神子”としか見ない事に気付いた時と、近づいてくる人達が“裏”を持って近づいてくる事に気付いた時。そして今である。

「なん……で」

「森の中に入っちゃってさ。リアラが居て助かったよ。ちょっと道案内してくれる？」

幸人はニコニコと笑いながらリアラにそう言うが、リアラは端正な顔を歪めて幸人の言葉に首を振る。

「ごめんなさい……私は……この試験の試験官の一人なんです」

「試験官？　じゃリアラは……オレを助けてはくれないわけ、か」

泣きそうなリアラを見て、幸人は右手で頭を掻きつつ、リアラに言う。

「道くらい教えてくれるだろ？」

「……ごめんなさい」

「あっそ……じゃあ、リアラは“オレをどうする”の？」

「う、あ……」

「試験官何でしょ？　オレの“邪魔”をするのが仕事なら……リアラはオレをどうするの？」

幸人はリアラへ“禁止ワード”を浴びせつつ、ゆっくり近付く。

ソフィアが心配そうにリアラの袖を掴んでいるが、リアラは下を向いたまま動かない。

「私は……ユキトのライフを……」

「削るんだ……けど、オレのライフは1しか無いんだけど？ 脱落させる？」

「えっ！？ でも……でも……」

「やるしか無いなら相手になるよ……リアラが見逃してくれないなら、しょうがないよね？ オレは“リアラを倒す”よ」

倒すと言う言葉を殊更強調する幸人にリアラは混乱してしまう。

こんな筈じゃなかった。

ユキトが来るなんて、思いもしなかった。

私はリアラ・マクスウェル。なら、目の前に居る人は？

ユキト・クガ。

何にも変えられない私の友達。

私を暗闇から“救ってくれた”人。

嫌われたくない。

力になりたい。

失いたくない。

もう二度と、一人にはなりたくない。

なら。

「ユキト……ト」

「何？」

「私を……倒せば……評価が上がると、思います」
「倒されてくれるの？ オレの為に？ 自分の成績を犠牲にして？」
「……はい」

もはや混乱し過ぎて、冷静な判断が出来ないリアラは、目の前の“幸人”の異常さや、浮かべた笑みの裏を読むことが出来なかった。

「じゃあ“眠らせる”から、技を受けて」

「ユキト！ 待ってくれよ！ リアラも大変なんだ！」

「ソフィア。オレは“友達”の好意を無にする気はサラサラないよ」

「そんな……！ リアラ！」

「大丈夫……大丈夫よ。これで、これで良いの……」

幸人はリアラのすぐ近くまで行くと、両足を前後に出し、斜に構え、左手を前に出す。

久我心明流の基本の構え。

狼ろうの構え。

バランスが良く、敵の攻撃を捌いたり、瞬時の攻撃などに優れている。

そんな狼の構えから繰り出される奥義がある。

唯一、狼の構えから繰り出される“それ”は、威力が高く、何より、内臓に深いダメージを与えてしまうため“幸人”はめったに使わない。

幸人はリアラに見えない角度でニヤリと笑うと、ソフィアに引つ張られても全く反応しないリアラに向かって、一つの技を繰り出す。

「久我心明流・奥義の壱」

「リアラ！ 駄目だよ！」

「ごめんなさい……」

「ひらめき
閃」

尋常じゃない魔力を使つての魔力強化で、強化した体の関節を使い、威力を上乗せし、筋肉を限界まで振動させた右腕がリアラの心臓部分に向かって放たれる。

名前に恥じない高速の突きは、リアラの横を掠め、後ろの森を破壊するに留まった。

“幸人”は、自分の腕が誰かに掴まれている事を認識した時に、腹部に衝撃を受ける。

「調子にのるなっ……！」

幸人は“自分”を殴ると言う貴重な体験をしつつ、直ぐにリアラを連れて“逃げ”の一手を打った。

「ソファイア！」

「えっ！？ あっ！ ちよっ！」

ソフィアが直ぐに白い鳥になり、幸人の肩に乗る。

「……ユキト？」

「ああ！ 真正銘の本物！ あれは偽物！ 何を言われたかは知らないけど、気にしない！」

「どうなっただい！？」

「話すと長い！ 今、余裕が無いから手短に言うけど、オレの姿と能力が死霊に奪われて、しかも、向こうは術者とリンクしてて、魔力は校長クラス……質問は？」

「ありすぎるけど、とりあえずヤバいって事は分かったよ！」

幸人はソフィアの返事を聞くと、自分の腕の中に居るリアラを見て言う。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

そう優しく声を掛けると、リアラの瞳が揺れたのを幸人は見逃さなかった。

「ユキト……私は……」

「話しは後でしょう。幾らでも話すし聞くよ。だから、今は誰でも良いから先生を呼んできて！」

幸人はリアラを適当な所で降ろすと、ソフィアと共に走らせる。

「ユキト！」

「早く行くんだ！ 大丈夫だから」

リアラの胸に嫌な予感が走る。

混乱した頭でも分かるほどに、同じ姿と能力であっても、偽物の

幸人と本物では絶望的な力の差がある。

「リアラ！ 行かないと」

「ユキト！ 約束して下さい！」

「うん？」

「必ず、必ず私と話しをしてくれると……！」

「……約束するよ。後で話そうね」

幸人はそう言うと、ソフィアを肩に乗せた状態でリアラを走らせる。
る。

リアラが見えなくなる頃に、後ろから偽物が姿を現す。
「ヒ」

「足止めくらいは出来ると思う？」

『友と叶わぬ約束をする主ではあるまい。勝算があるのだから？』

「全く無いよ。さっきのは女の子の前でカツコついただけさ」

幸人はそう絶無に言うと、狼の構えを取る。

それを見て、偽物が幸人に笑いながら言う。

「何でオレが居るんだ？」

「オレの声で喋るな。オレの口調を使うな。あと……その胡散臭い
笑い方は止める」

「あ……分かったよ。君は冗談が通じないね」

偽物の声が変わる。

男にしては高く、女にしては低い。そんな中途半端な声だ。

偽物はゆっくり顔を上げて幸人に言う。

「神子を逃がしたのは賢明だけど、僕とやろうと言うのは無謀だよ？」
「黙れ。お前の目的は達成させなければオレの勝ちだ」
「いいや。僕の目的は達したさ。神子を狙えば、自然と僕らの“目的”は達成されるからね」

偽物は幸人の顔で人懐っこい笑みを浮かべながら言う。

幸人はその偽物を冷めた目で見つっ、偽物から言葉を引き出す。

「目的？」

「そう、目的だよ。僕らは“聖クリスティーナ教会”に用があるんだ」

「僕ら？ それに聖クリスティーナ教会に何の用だ」

「僕らは僕らさ。聖クリスティーナ教会には、そろそろ“設立時の目的”をしつかりこなしてもらわないと困るんだよ」

偽物はそう言うと、幸人の姿で体をほぐし始める。

「まあ君にもちよつとやってもらわないと駄目なことがあるし、何より君は神子の側に居るには弱すぎる」

「なに？」

「だから、少し“ゲーム”をしよう」

「ゲーム……だと？」

幸人は身構えつつ、偽物に聞き返す。

偽物は笑顔で幸人と同じ狼の構えを取ると、高らかに宣言する。

「僕が勝ったら神子を追わせてもらうよ。君はそれをさせないように、僕に勝てばいい。簡単だろ？」

「全くだ……」

「じゃあ始めようか……そう言えば名前を言ってなかったね。僕はノルン《古き魔女》の一人で“ヴェルダンディ”人は彷徨える魔女とも呼ぶけどね」

「またノルン《古き魔女》か……まともな奴は居ないのか？」

「僕は比較的まとも、さ！」

言葉と同時に、幸人の姿をしたヴェルダンディは、狼の構えから右の回し蹴りを幸人に放つ。

幸人は魔力強化されたその蹴りを受け止めずに体を逸らして避ける。

だが。

「っ！？」

「僕の魔力で強化された“君”の蹴りだ。カマイタチくらい起こせるさ」

幸人が着ていた制服の胸の部分が刃物で切られたかのように裂けており、体にも一筋、線が走り、血を滲ませている。

「ローブ・セット！」

【ローブ・アップ】

幸人はMPTに指示を送り、ローブを展開する。

試験の規定により、ローブの着用時間は10分と決められていた為、今まで使って来なかったが、ローブ無しではとてもじゃないが

やっついてられない。

「賢明だ！」

「うるさい！」

幸人は自分の体に最大限の魔力を走らせ、ヴェルダンデイが繰り出した突きを両手で受け止める。

「くっ！ この！」

腕に伝わる振動で両手が麻痺したが、幸人は構わず右足を振り上げ、ヴェルダンデイの顎を蹴り上げる。

だが、ヴェルダンデイはその蹴りを体を仰け反らしながら避ける一方、体を倒した勢いのまま、右足で幸人の顎を狙う。

同様の攻撃だが、紙一重で避ければ、幾らローブを着ていたとしても先ほどの二の舞でダメージを受けてしまう為、幸人は横に飛ぶ事で蹴りをかわす。

一瞬の攻防で、強化による接近戦では勝ち目が無い事を悟った幸人は、魔法戦に切り替える。

瞬時に自分の目の前に緑色の六紡星の魔法陣を展開させ、風のダートを五つ作り出す。

現在、幸人が作れる最大数のダートを作り出したが、幸人は忘れていた。向こうは技術や姿をまるまるコピーし、魔力は無尽蔵な“自分”である事を。

「魔法戦は……賢明じゃないな」

ヴェルダンディの目の前に数十の風のダートが生み出される。

魔法陣すら展開せずに生み出されたそれは、幸人のダートを嘲笑うかのように幸人に降り注ぐ。

【ガスト・ダート】

元々、速さが売りの魔法なだけに、幸人は避ける事を諦め、自分に当たるダートを全て拳で弾いた。

「はああー!!」

ローブを多少削られたが、ダメージはさほど無かった。だが、幸人は与えてしまった。

特大を撃たせる時間を。

ヴェルダンディの多数のダートによって巻き起こった煙に乗じて、幸人は用意しておいた五つのダートで攻撃を仕掛けようとしたが、煙の向こうから感じ取った魔力に、体がとっさに回避を選択する。

【トラスト・ゲイル】

真横に飛んだ幸人は、今まで自分が居た場所を抉り、更に直線的に全てをなぎ倒し、決る直径五メートル以上の風の玉を見て、戦慄した。

「君の強さは発想と技術。誰もが思い付かない魔力の運用。鍛え抜

かれた体から繰り出される技。だけど、それを除けば君は“凡人”だ」

とっさの回避で体勢を大きく崩し、右膝を付いていた幸人にヴェルダンディは肉迫すると、幸人の腹部に右手の平を押し付ける。

「久我心明流・貫」

超接近戦用の衝撃による内部攻撃技。

相手から発せられた衝撃が、体の内部器官を掻き回す瞬間、幸人は体中の筋肉を引き締め、内部器官への衝撃を防ぐ。

幸人はそのまま接近戦の距離から離れずに技を放つ。

「久我心明流・螺旋」

全身のバネと捻りを利用した右手の掌底がヴェルダンディの顎を跳ね上げる。

脳を揺らした手応えを感じながら、幸人は更に追撃を掛ける。

「久我心明流・奥義の式」

【雪崩】

四連続で超高速の拳がそれぞれ、顎、首、心臓、水月と、急所を打ち抜く。

だが、幸人は拳に伝わった感触に嫌な予感がした為、追撃を止めて距離を取る。

「気付かれちゃったか……僕としてはあのまま攻撃して欲しかったんだけどね」

「効いてないって訳か……」

「魔力による身体能力の強化は、肉体的な強さも向上させるからね。強化魔法よりも便利だよ。本人の身体能力が高くなければ意味ないけどね」

「知ってるよ……」

二つの技を確かに直撃させた筈だったが、全く効いてない事に幸人は歯を食いしばり、齒軋りを起こす。

「久我心明流。大したモノだよ……“人を助ける為に人を壊す”武術。矛盾だらけだけど、それを成すだけの技が確かにある」

「お褒めの言葉として受け取っておくよ」

「さつき君に食らわした“貫”、あれを防いだのは“金剛”かな？」

久我心明流の防御術で、筋肉を瞬間に引き締め、ダメージを軽減する技であるが、それをヴェルダンデイが知っていると云う事は。

「やっぱりお前も使ってたか……感触がおかしいハズだ」

閃を使った時点で、久我心明流の技を全てコピーされたと思っていた幸人は、そこまでうるたえなかったが、流星に打つ手が無くなってしまった。

「君の技術は有効活用させてもらっよ」

ヴェルダンデイがそう言った瞬間、幸人は近くの木を蹴って、木の上に登る。

「ゼツ！」

『奴に魔法を使わせ、我を使って吸収しろ』

「アイツは久我心明流でヤル気満々だよ？」

『奴に使えぬ魔法を使えばよい。主が使える魔法しか奴は使えぬ。』

それが分かれば充分。集中しろ。そして“あれ”を使え』

「成功率はほぼゼロなの？」

『だからこそ奴には使えぬ』

絶無のアドバイスに従い、幸人は、木から木へと飛び移り、ヴェルダンデイの隙を探す“振り”をする

「僕の間なんてないよ」

「うるさい！」

会話に乗りつつ、ブレンドを使って、自分の魔力をどんどん空気と混ぜて行く。

「君も諦めが悪いね。君の手の内は知ってるよ。もう君には打つ手はない」

「オレの事を知ってるなら、オレが何をしようとしてるか当ててみる！」

「時間稼ぎ？ 止めようよ。みつともない」

自分の周りの空気が全て魔力と混ぜり合ったのを確認し、幸人は空気を自分の体に“纏う”。

魔力と混ぜり合った空気は風となり、幸人の体に服のように身に付いて行く。

幸人は首から下が全て風に覆われた事を確認すると、木から木に飛び移るのを止め、ヴェルダンディの前に着地する。

「なんだい？ ブレンドされた空気を纏ってどうするつもり？」

「こつするのさ」

幸人は今まで一度も成功した事の無い魔法のトリガーワードを咳く。

一度も成功した事が無く、諦めた魔法。

守る力が欲しくて、先に行く友人達に追い付きたくて。魔導書を読み漁っていた時に見つけた高度な魔法。

自分にはピッタリで、けど難易度が高過ぎて、試験までには覚えられそうも無いと思った魔法。

けれど、今は成功させなくてはならない。

魔力がこつそりと持っていかれ、風の制御が難しくなっていくが、力を抜く訳には行かない。

ここで敵を逃したら、後悔以外の何も残らないから。

後悔はしたくない。

何より、大切な友人を守りたい。

自分よりも強く、けれど脆い少女を。

久我の名に掛けて守ると決めたから。

【リジエクト・ストーム アーマフォーム】

幸人がトリガーワードを呟くと、幸人の体を覆っていた風が徐々に変化し、幸人を取り巻く鎧となる。

手や足には竜巻のように渦巻く風を纏い、体には様々な方向に流れる“風の鎧”を纏う。

リジエクト・ストーム アーマフォーム は、その名の通り、相手の攻撃を一切拒絶する絶対鉄壁の風の鎧。

全ての攻撃はいくつもの風の流れによって形成された鎧に受け流され、手や足に渦巻く竜巻は、相手の防御を削り砕く。

通常ならば学生が使える事以前に、覚える事すら有り得ない“純戦闘魔法”。

近接戦闘を得意とする風属性の魔導士が使う魔法で、近接戦で無類の強さを誇る風属性の魔導士達の代名詞。

そんな魔法を使った幸人に、ヴェルダンディは賞賛を送った。

「いや、大したものだね。まさか“それ”を使うなんて、コピーした時点の君に使えない魔法は確かに使えない。けれど、一度も成功していない魔法を成功させたね？」

「オレの後ろに守りたい人が居るんだ……だったら、お前を通す訳には行かない！」

「友達を思う心と言うか、極限状態での集中力が可能にしたのか……面白い。それで僕を止められるかな？」

「意地でも……通しはしない！」

幸人はヴェルダンディに向かって走るが、そのスピードは今の比では無かった。

体に纏った風に乗って走る為、走ると言うよりは、滑るに近い移動だった。

「スピードが上がった？　なら！」

幸人のスピードが上がった事を確認したヴェルダンディは、魔力を更に強化に回し、スピードを上げる。

二人の移動速度は最早、普通の人間では、何かが走っている程度にしか認識出来ない程のスピードまでになっていた。

勢いを付けたすれ違い様での攻防は、双方にダメージを与えるが、決定的なダメージは与えられなかった。

何度目かのすれ違い様で、ヴェルダンディの蹴りをしゃがんで避けた幸人は、ヴェルダンディの背後を取った。

好機と見た幸人は、竜巻によって強化された両手でヴェルダンディの背中に技を放つ。

「久我心明流・追牙」

体重を乗せた突きを連続で背中に入れられたヴェルダンディは、吹き飛ばされ、木に叩き付けられる。

「……なかなかだね。けど、これならどうだい？」

木に叩きつけられたヴェルダンディは木を蹴り飛ばし、幸人に向かってくる。

そのスピードは最早弾丸で、幸人はとつさに体を反らす事で何とか避けたが、ヴェルダンディはあちこちの木を踏み台にして向かってくる為、軌道が予測出来ず、幸人は一気に形勢を逆転させられた。

スピードと言うアドバンテージを失った幸人は、ヴェルダンディと同じように木を踏み台にするが、基本的な身体能力は魔力で強化しているヴェルダンディの方が高い為、同じ動きをしても追い付け無かった。

「はっはっはっ！ 守るんじゃないのかい？」

何度も攻撃を食らい、体にはダメージは無いが、リジェクト・ストームは大幅に削られてしまっている。

再生させた所で、また削られるのが関の山である為、幸人は一つの賭けに出た。

「ゼッ。出来ると思う？」

『主がやると思うならばな。神子を“自分の手”で守りたいならばやるが良い』
「ありがとう」

幸人はそう言うと、カ一杯跳躍し、上空に上がる。
そして、リジェクト・ストームを再構築する。

先ほどのアーマフォームでは無く、相手に追いつき、倒す為のフ

オーム。

【リジェクト・ストーム レイダーフォーム】

鎧が鋭角になり、先程まで全体を覆っていた風が局所的な部分のみになる。

そして、削った部分を全て体を支える為に用いて、幸人は空中に浮かぶ事に成功した。

「はあはあ……成功だ！」

幸人は空からヴェルダンディの位置を確認すると、レイダーの名の通り、上空から急襲を掛ける。

ヴェルダンディは先程のように木を使って加速し、変則的に動くが。

「同じ目線じゃ分からないが……上からなら丸見えだ！」

幸人はヴェルダンディの背後を取ると、そのまま全力で蹴り上げる。

「くっ！」

蹴り上げられたヴェルダンディは、空で身動きが取れない状態になる。

自由落下を待つ身となったヴェルダンディを、幸人は視認する事が困難なスピードで蹴り始める。

交差した瞬間の蹴りは最早打撃では無く斬撃となり、偽物の幸人の体を切り刻んで行く。

落下し始めれば蹴り上げられ、全く反撃の糸口が掴めなかったヴェルダンディだが、突如として幸人の攻撃が止む。

どんなに強力な魔法にも弱点はある。

このレイダーフォームは魔力の消費が激しいのだ。只でさえ魔力保有量が少ない幸人が使えば、結果は目に見えている。

魔力切れ。

森の中で、リアラがなっていた症状である。

極度の魔力消費による疲労が幸人を襲い、リジェクト・ストームが空中で解除される。

「君は頑張った方だよ。だからいい加減に墜ちてもらおうよ!!」

落下状態に入ったヴェルダンディが、巨大な魔法陣を展開させ、自然落下中の幸人に向ける。

【トラスト・ゲイル】

先程よりも更に巨大な風の玉が幸人に向かって放たれる。

その巨大な風の玉を避ける事が出来ない状態で見た幸人は。

ニヤリと笑った。

「ようやく出番だ。ゼツ！」

向かってくる巨大な風の玉に幸人は絶無をはめている右の拳を叩きつける。

すると、巨大な風の玉が一気に霧散する。

「なに！？」

『時期が早い気がするが、幸人！ 我を”抜け”！』

幸人は左手で絶無を右手の人差し指から引き抜くと、左手で握り締めて、絶無から流れてくる呪文を詠唱する。

「我、力を求む者」

幸人の左手に握り締めてられた絶無が光り輝き始める。

「心に誓いを、胸には誇りを」

黒い指輪だった絶無が左手の中で形を失い、光の塊となる。

「虚無の力はこの腕に」

幸人は光の塊となった絶無を握りつぶす。すると更に光が増して行く。

「我はいざ戦わん」

光は長い棒状の形を取り始める。

「来い。絶無」

棒状の光が漆黒となり、幸人の左手に、漆黒の鞘に収められた一振りの刀が握られる。

「刀……？」

『主がイメージした武器だ。我は持ち主が求める武器になる。そう言う魔具だ』

「……最高だよ。相棒！」

『鞘から引き抜く一撃で決める！ 主が勝つにはそれしか無い！』

幸人はズボンを止めるベルトに鞘を差し、何とか着地すると、未だに着地していないヴェルダンディに向けて走り出す。

「武器を手に入れた所で！」

「オレはお前を倒す！」

「君は弱い！ 神子の側には居られない！」

「弱い事は誰かを守る事を諦める理由にはなりはしない！」

「君では守れはしない！！」

ヴェルダンディは膨大な魔力で作り出した何百ものガスト・ダクトで幸人の接近を防ごうとする。

だが。

【リジエクト・ストーム アーマフォーム】

一瞬だけ発動したりジェット・ストームにより、ガスト・ダートの弾幕を幸人はすり抜ける。

「強くなければ側に居てはいけないなら強くなる！ 例え何があるうと守ってみせる！」

幸人は着地の姿勢に入ったヴェルダンディの懐へ潜り込むと、鞘を左手で押さえて、技を繰り出す。

「久我心明流刀術・居合い・三日月」

地面スレスレの低い姿勢から、幸人は跳ね上げられるように絶無を鞘から引き抜く。

弧を描く軌道で放たれた絶無から、膨大な魔力が放出され、偽物の幸人の体を一瞬で塵に変える。

『いやいや、正直驚いたよ……今度の相手は僕じゃないと思うけど、今より強くなって居てね。また会おう』

どこからか、ヴェルダンディがそう幸人に言い、完全に存在を消す。

「ノルンってのは似たような事しか言わないな……」

『幸人。行かねばなるまい』

「そうだった！」

幸人は絶無を鞘に収めると、鞘を押さえて走りながらMPTを開く。

「残り時間は7分弱……ってロープはそろそろ時間がマズいな……
ロープ・リリース」

【ロープ・アウト】

幸人の白いロープが消え、茶色の制服に戻る。

「くそっ！ 間に合うか!？」

『トラップは最後に一つ残っているのだろ?』

「多分、それは大丈夫！ 最後のトラップの情報をサナがMPTに送ってくれてたから」

『ライフはあるのか?』

「残り1。あいつの攻撃が速すぎて、途中からMPTが認識しきれなかったみたい」

『ならば時間か……まあ頑張るが良い』

絶無の気のない応援を聞きつつ、幸人は必死に走る。

魔力切れを起こしたが、絶無が吸収した魔力の一部を自分の体に取り込んだ為、魔力は微量ながら復活している。

だが、襲ってきた疲労感は消えた訳では無く、今もまだ幸人を苛む。

「もうちょい……!？」

木に囲まれた幸人の目に飛び込んで来たのは最後のトラップと、目の前に陣取る黒い少年だった。

「カイル!?」

「済まないけれど、僕はお前を通す訳にはいかない」

「偽物を待ってた訳ね……タイミンクの悪い奴だ」

試験官のルールによりカイルは幸人のライフを削らなければならない。そうでなければ自分の成績が落ちてしまう。

「……手加減が欲しいなら先に言え」

「冗談言つなよ。オレは手加減されるのが嫌いなんだ、よ!」

そう言つと、幸人は絶無を引き抜き、カイルに切りかかる。

カイルはカード型の魔具を取り出し、黒い杖へと変化させる。

「それなら本気で行くぞ!」

絶無を受け止めたカイルは、瞬時に杖を引き、絶無を受け流す。

「マギ・キャンセル・コーティング《魔力無効付与》の刃……厄介な!」

「性質は知らないが……凄いだ、ろ!」

幸人は右手に持った絶無で、カイルに袈裟切りを放つが、カイルはバックステップで避け、一瞬で間合いに入ってくる。

「お前が威張るな!」

【マギ・エッジ・ランス】

宵闇の森で青い魔導人形をまとめて葬った魔法を使い、カイルが

突っ込んでくる。

幸人は下から絶無を振り上げ、魔力刃を受ける。すると、魔力刃が消え去る。

「本当に厄介な！」

【シューティング・バレット】

杖の先から幾つもの魔力弾が連続で発射されるが、幸人は絶無で全て吸収する。

「今度は吸収！？」

「退け！」

幸人の横薙をカイルは体を捻って避けると、杖を幸人の顔面に突き出す。

「なら零距离だ」

【シューティング・バレット】

幸人は光り出す杖の射線上から頭を退けるが、それを予測していたかのように、カイルの左手が幸人の腹に触れていた。

「終わりだ」

深紅の魔法陣が展開され、幸人に向かって弾丸を吐き出す。

【ストレート・ショット】

幸人はとつさに絶無の柄でカイルの腕を打ち、ストレート・ショットの軌道も逸らす。

「ちっ！」

「たあ！」

幸人はカイルに回し蹴りを放つと、最後のトラップへ向けて走り出す。

【シューティング・バレット】

向かってくる魔力弾を全て吸収し、幸人は構わず絶無をカイルに向けて振り抜く。

絶無から飛び出した魔力の斬撃は、カイルの体勢を少しだけ崩す。

幸人はその隙に、四つに分かれた洞窟の一番左、1と書かれた場所に入る。

このトラップは“全員の意見が一致した場所に全員で入らなければならぬ”トラップで、一人でも違う所を選んだり、みんなが納得していない場合に入ると、ライフを削られる。

幸人はサナとカイが選んだ1を真っ先に選び、入るが、そこでMPTが時間を告げる。

『時間です。試験は終了します』

単調な機械の音に幸人は頂垂れながら洞窟から出る。

近くにあつた木に寄りかかると、MPTでサナとカインに詫びのメッセージを送る。

「ちくしょう……」

『主の対応は間違つてはいなかった……誰も責めはしないだろう』
「違う……約束を守れなかった自分が情けないんだ……」

幸人はそう絶無に言うと、足を曲げて、頭を抱える。

そんな様子を見ていたカイルは、幸人が来た道から何人かが走ってくるのを確認し、幸人に伝える。

「ユキト。先生方が来た。説明を」

「ああ……」

ノロノロと立ち上がる幸人に、真っ先に声を掛けたのはリアラだった。

「ユキト！ 大丈夫ですか!？」

「うん。とりあえずね」

心底安心したかのように、息を吐くりアラの後ろからホーキンスが現れる。

「まさか倒すとはな……」

「敵は彷徨える魔女、ヴェルダンディと名乗りました」

「またノルンか……」

「姿を盗まれたオレが原因です。すみません」

幸人はそう言うと、駆けつけてきた教師達に頭を下げる。

「気にするな。気付けなかったのは私たちも一緒だ」

代表してホーキンスがそう言うと、それに続いてレオンハートが言う。

「お前は自分で解決した。それでチャラだ」

大柄なレオンハートに背中を叩かれ、幸人はよろける。

「くそ……眠い……」

「後は任せろ……今は、寝ても大丈夫だ」

カイルのその言葉に幸人はリアラに寄りかかりながら、目を閉じた。

「ユキト……カイル！ どうして」

「ユキトが望んだんだ……しょうがないだろ……」

「……先生……ユキトの試験は」

リアラは幸人を支えたまま、周りの教師に聞く。

「確かに非常事態だったが、再試験をやる訳にもいかないから……
…Bって所か」

レオンハートがかなり甘めの判定を下すが、リアラはそれに食いつがる。

「ですけど！ 私を助けに来なければ……しっかりとゴール出来た

「箒なんです……」

「箒、もし、そんなモノはこの世に存在しませんよ」

リアラは聞き慣れた声に後ろを振り向く。そこにはいつものように、装飾品を身に付けたドゥーエスが居た。

「ドゥーエス先生……」

「クガさんの対応、まずまずだったでしょう。ですが、試験の評価にそれを加える気はありません。クガさんの評価は“C+”です」

「そんな！」

「クガさんよりも低い評価の生徒も沢山居ます。文句は受け付けません」

ドゥーエスはそう言うと、寝ている幸人を抱き起こし、転移魔法を発動させながら言う。

「この子は私が連れて行きます。この場は任せましたよ？」

「はい」

「わかりました」

「マクスウェルさん」

「……はい」

ドゥーエスに呼ばれ、リアラは伏せていた顔を上げる。

「この子に感謝なさい。そして、この子が起きたらまず、何でも良いです。話しをしなさい」

「えっ？」

「この子があなたとどういう友人関係を作りたいのかを確認なさい。あなたにはそれが必要です」

「えっと……」

「いいですか？」
「は、はい」

ドゥーエスはリアラの返事を聞くと、転移魔法でその場を離れた。次にドゥーエスが現れたのはドゥーエスの執務室であつた。

そこにはクリフォードもおり、クリフォードはにこやかな笑みですやすやと眠っている幸人を見る。

「今回も頑張ってしまったようじゃな」
「はい……本当に」

ドゥーエスはソファーに幸人を寝かせると、クリフォードに向き直り、真剣な顔で言う。

「ノルンが二人も神子を襲撃し、この学園は今までに無いほどの危険に晒されています」

「そうじゃのう……」

「結界のおかげで直接乗り込んでくる事はありませんが、結界を何か“すり抜けて”来ます」

「クレタ。はつきり言つて構わんよ」

「では、この学園に“内通者”が居ます。これは間違いありません」

ドゥーエスの言葉にクリフォードは白髪を撫で、目を瞑る。

やがて、目を開けたクリフォードはドゥーエスに指示を出す。

「信用出来る教師を密かに集めて欲しい。判断は任せる」
「かしこまりました」

「それと……ユキトの事じゃが」

「何か？」

「鋭い子じゃ気付かれぬように。気付けば必ず無理をする。子供に無理をさせたくはない」

「はい。分かりました」

クリフォードは満足そうに笑い、幸人を一瞥し、更に笑みを深めてドゥーエスの部屋を出て行った。

「あなたの無理無茶は……家系なのかしらね」

眠っている幸人の髪を一撫でし、ドゥーエスは今回の幸人の対応に満足しながら微笑んだ。

第七話「終業式」(前書き)

第二章ラストですって事でこんばんは！
武道家です！

短めですが、見てください！

第七話〔終業式〕

世界間のボーダーライン

第二章〔魔法の勉強〕 第七話〔終業式〕

幸人が目を覚ますと、視界に映ったのは見慣れたとは言いが、知っている天井だった。

次に、耳が捉えた音は聞き慣れた人間達の話し声だった。

「直に目を覚ますから、あなた達は寮に戻っても大丈夫よ？」

「お断りします」

「いやよ」

「いやです」

「……俺だけ帰って意見は、無いですよ。はい。分かっ
ましたよ」

カイル、サナ、リアラの後に、カイが余計な事を言ったようだ。

カーテンで仕切られてる為、幸人にはその光景は見えないが、な
かなか簡単に想像出来た。

幸人は苦笑し、カーテンの外に居る四人に声を掛ける。

「帰っていいぞ。オレも帰るから」

「……!? ユキト!」

一番にカーテンを開けたリアラが飛び込んでくる。

続いてサナとカイルが近づいて来て、後ろでカイが小さな声で、治療室だから静かにしようぜ、と呟いていたが、何故か幸人に聞こえた声が三人には聞こえなかったらしい。

無視したとも言うが。

「大丈夫ですか? 二日も寝ていたんですよ?」

「どこか痛い所とか無い? 魔力とかしっかり扱える?」

「高難度の魔法の連発による魔力切れと、集中力の摩耗による疲労だ。治ったようでも後を引き摺るから気をつける」

「お〜い、俺の話し聞いてた? 治療室は静かにしましょうって話あれ? 俺って今、正しい事言ってるよね?」

起き抜けに四者四様の事をごちゃごちゃと言ってくる為、幸人は顔をひきつらせるが、幸人よりも早く我慢の限界を迎えた人が居た。

「あなた達! いい加減にしなさい!!」

自分の城で騒がれたアンナが大音量の声で怒鳴った為、幸人は直ぐに耳を両手で覆う。

「良い!? ここは治療室! 怪我や病氣の人が休む場所なの! 騒いだり、患者を困らせるようなことはしちゃだめなの! 分かった!?」

「先生……耳が……俺の耳が……」

真横で大音量を聞いたカイルがぶつぶつと何かを呟いているが、アンナは全く取り合わない。

「返事は？」

「……は、はい」「」

三人が微妙な顔で返事をするのを見ながら、幸人はアンナに倒れてからの事を聞く。

「二日も寝てたんですか？」

「ええ、魔力も体力も殆ど空だったから、体が強制的に睡眠を取らせたのよ」

「そうですか……でも、動くぶんには多分大丈夫ですから、寮に戻りますね」

「本当に大丈夫？　自分と戦ったんだから、あんまり無理しちゃだめよ？」

「……はい」

幸人は心配するアンナに笑顔でそう言うと、自分の近くにある新しい制服に手を伸ばし、周りの面々を見る。

「着替えも監視する気？」

「失礼しました！」

「ごめん！」

「ご、ごめんね」

幸人の言葉に女性陣が退去し、カイルも呆れたようにため息を吐いて退去した。

「さてと」

「俺には触れないのか？」

「……存在を忘れてた」

「ちくしよおおお！！」

一人佇んでいたカイも退去した為、何となく心に罪悪感が生まれながらも、カーテンを閉めて着替え始める幸人だった。

それから二週間ほどが過ぎた。

この二週間で幸人達、第一学年は筆記試験を行い、順位を廊下に張り出された。

第一学年のトップはカイルで、五百点満点で五百点を取る完璧ぶり。

二位と三位は他の寮で、四位にサナが来た。五百点満点で482点と言う好成绩だったが、本人は気に入らなかつたらしく、数日の間、カイに当たっていた。

五位と六位にまた他の寮生が来て、七位にリアラが入った。五百点満点で451点と言うもので、全ての教科で平均して高得点をマークしていた。

カイは844人中723位。

五百点満点で215点で、流石に本人もショックを受けていた。

そして。

幸人は844人中444位。

五百点満点中311点であったのだが、何より本人が気にしたのは。

「444位……ししし……いや死死死か？」

「ユキト……そんな深く考えなくても……」

順位の不吉さに落ち込み、リアラに慰めている姿が何度も見受けられた。

また試験終了後には、試験休みが週の最後に入った為、校長の許可を貰い、リアラを連れて五人で街に出掛けたりもした。

だが。

「重い……」

「いや、甘い……」

女性陣が行く場所に引きずられる男性陣は、カイが荷物持ちでダウンし、カイルが甘いデザートに撃沈した。

そして幸人は。

「気まずいんだけど……」

「文句を言わない！ あっ！ この組み合わせもきつと似合っわよ！」

流行の私服を殆ど持ってないリアラをコーデイナーとするサナのアシスタント代わりにされ、女性用の服を大量に持つ怪しい人間になっっていた。

「サナ……選ぶ服が過激すぎじゃありませんか……？」

「綺麗な足なんだから出した方が良くいわよ！ ね？」

「ノーコメント」

「そうよね？」

「イエス、ママ……」

短いスカートをリアラに身に付けさせるサナの意見に、恥ずかしさと気まずさでノーコメントを貫いたのだが、色を無くした目につかのクレアを思い出した幸人は反射的に同意してしまう。

そんなこんなで、試験休みはリアラとサナの買い物で潰された三人は普通の日以上に疲れて寮に帰宅した。

色々な事があった二週間ではあったが、嵐のように過ぎ去り、遂に一学期は終了してしまう日が来た。

終業式。

一学期の終わりを告げ、同時に長い夏休みの始まりを告げる日である。

多くの生徒は長期休暇に喜び、一部の生徒は落ち込んだ。

ドゥーエスの長い話を右から左に受け流しつつ、幸人は自分の右側に座っているリアラの顔が曇っている事に気付く。

こう言う場で念話を使うと教師席に座る面々にバレてしまう為、幸人は仕方無しにその場の解決を諦め、左横に座るカイルに視線を向ける。

カイルは非常に微妙な顔をしていた。

幸人はその理由を直ぐに察知した。

先ほどからクレアがカイルをジッと見ているのだ。

夏休みの事でも聞く気なのであるが、あいにくカイルにはセイバースの任務《リアラの監視》がある。

幼なじみとは言え、無理矢理連れて帰る事は出来ないだろう。

それを考えると、夏休みはこのただっ広い校舎の探検も面白いかも知れない。

そんな事を考えていると、ドゥーエスの話が終わり、クリフォードが立ち上がる。

「注意点など先ほどドゥーエス先生が言った通りじゃ。学園に残る者はこれが終わったらわしに言いにくるように。以上じゃ。良い夏休みを、解散！」

クリフォードの声に、大ホールの生徒達が寮監に従ってホールを出て行く。

だが、先ほどクリフォードが言った“学園に残る生徒”は大ホー

ルに残っており、当然、幸人も残っていたのだが。

「ユキト……帰らないんですか？」

「何で？ 帰らなくてもいいんでしょ？」

「いえ、その……帰るものだと思ってたので」

リアラの顔に明るい笑顔が浮かんだのを見て、幸人は先ほどの暗い表情の理由に気付く。

リアラは自分から話さないが、ソフィアやカイルによれば、かなり政治的な理由も絡んでのアルカーディアへの入学らしく、危険も去っていない為、リアラは帰省する事が出来ないのだ。

（まあ、帰省じゃなくて、一人になるのが嫌だったんだろうけど……）

リアラ的心情に気付きながら、幸人は口には出さない。

心配させた事を知れば、今度からはそれを表に出さなくなってしまうからだ。

難儀な性格だと思いながらも、だからこそ側に居ようとも思う。

「じゃあ、校長に報告をしようか」

「はい……あれは？」

リアラと立ち上がり、クリフォードが座る教師卓へ向かおうとした時に、リアラが首を傾げながら声を上げる。

幸人はその方向を見て、顔をひきつらせた。

「クレアさんですよな?」

「……そうだね」

「なにしてるんでしょうか?」

「カイルをイジメて楽しんでるんじゃないか?」

「人聞きの悪い事言わないで! イジメてるんじゃないくて、貶めてるのよ」

(その方が数倍、人聞きの悪い言い方だ……)

何故か近付いて来ていたクレアの反論に心の中で、断じて声には出さずにツツコミを入れつつ、幸人は襟を掴まれて引きずられる治セイバース安維持組織の士官を見る。

「良い様だな」

「うるさい! とりあえず何とかクレアを説得してくれ!」

襟を掴まれ、引きずられたまま怒鳴るカイルの姿が余りにも迫力に掛けた為、少し哀れみの目を向けながら、幸人はその頼みに応じる。

「下から上目線で頼まれたのが気になるけど、まあいいや。で? 帰省するかしないかですか?」

「ええ、この子、帰省しないって言い張るのよ」

「まあ、たまには帰りたくない時もありますよ」

幸人はクレアに目でリアラの事を気付かせる。

クレアは合点いったように首を縦に振ると、襟を掴まれたまま立ち上がったカイルに言う。

「カイルはリアラが好きなのね」

「なっ!?!」

「ふえ！？」

訂正。間違った解釈をしたようだ。

伝わらずに、事態がややこしくなった事のため息を吐きつつ、幸人はクレアに言う。

「ちがうと思いますよ。カイルは残るオレやリアラに気を使って」

「なら、二人も来ればいいのよ」

「……はい？」

クレアの提案に幸人は思わずまばたきを何度かし、たっぷり間を取って聞き返す。

「だ・か・ら！ 二人もカイルの家に来なさい！ 私の家も近くだから大丈夫よ！」

「クレアさん。その……私は学園から出る訳には……」

リアラがそう言うと、クレアは近くまで来ていたクリフォードに声を掛ける。

「校長先生！ リアラをカイルと私の家に連れて行きます。許可を下さい！」

「ふむう。しかしのう〜」

「三日間だけです！ そしたらセイバーズの転送ポートでここまで送ります！」

クレアはクリフォードの前に三本の指を立てて訴える。

そんなクレアにクリフォードは少し考えた後に、告げる。

「ふむ…… よろしい。許可するから行って来なさい」

「やったあ！」

「なっ！？」

「えっ！？」

「…… はあああ！？」

まさかのクリフォードの許可に四人は四者四様の反応をする。

幸人は口を開けたままクリフォードを見る。

小さくウイングをしてさるクリフォードを信じられないモノを見るような目で見送り、幸人はリアラに視線を移す。

リアラは驚いていたが、幸人はその表情の中に混じった微かな喜びを見逃さなかった。

それを見て、幸人は肩を落とす。

当人が喜んでいるのだ。自分が反対するのは筋違いだろう。

かくして、夏休み最初の三日間はグランディオ邸に向かう事になった三人だったが、幸人もリアラも、当然カイルも準備などしていなかった為、直ぐに寮に向かった。

適当に服をバッグに詰め込んだ幸人は、財布とMP Tを服のポケットに入れると、誰も居ない事を確認して、右手の絶無に問い掛ける。

「ゼツ……聞きたい事がある」

『どうした？』

「監視は無い？」

『……無い』

調べたのだろう。少しの間を置いて、絶無が幸人にそう言う。

幸人はそれを聞くと、絶無に事件の事への自分の疑問を話し始める。

「リアラを狙ったノルンは聖クリスティーナ教会に用があるって言うてたよな？」

『確かに、彷徨える魔女はそう言った』

「なら何で教会に向かわないんだろ？ この“侵入が困難な学園”にわざわざ侵入してまでリアラを襲うメリットが分からない」

『確かにな。それを知るには、彷徨える魔女が言った“設立時の目的”を調べた方が良さだろう』

幸人はあの時の会話を思い出す。

教会の設立時の目的。

それは“今”の教会が設立時の目的を果たせない、または果たせてないと言っ意味である。

「調べて見るか……それと、ゼツから見てもアイツ等はリアラを殺す気はない”よな？」

『ああ。我も長い事、戦場に出ているが、奴らに殺気を感じたのは最初の一撃のみだ。脅しのつもりだろう』

「何でだろう……鉄壁の筈の学園の守りが容易く破るのに、リアラは本気で殺す気はない。聖クリスティーナ教会の設立時の目的……」

「ややこしい」

『救いにはならんが、一つだけ分かる事がある』

絶無の言葉に幸人は驚きながら聞く。

「何かわかつてるの？」

『この学園の守りを破り、何ヶ月も教師や我にバレずに主の影に死霊を入れ続けるなど、幾ら古き魔女でも不可能だ』

「えっ？ どう言う事？」

『死霊を保つには魔力が必要不可欠だが、強化された結界と教師達の目。更に我や主に感じさせず魔力を供給させ続ける事は不可能。ならば答えは一つ。内部に奴らの協力者がいる』

「内部って……アルカーディアの？ 誰かが裏切ってるって事？」

幸人の言葉に絶無はうんざりしたように言葉を返す。

『最初から仲間だったかも知れん……少なくとも、外には教師達が目を光らせている。主は内部に目を向けて、神子への襲撃に備えるのだ。魔女に殺す気が無くても、内部の者はそうとは限らん』

遠回しに気を抜くなと言ってきた絶無に感謝しつつ、幸人は自分に喝を入れる。

この前のような無様な醜態は二度と晒さない。

例え何があっても、意地でも守り抜いてみせる。

そう決意した幸人は寮の部屋を出た。

閑話 〔二人の話〕（前書き）

第三章の前に閑話です！

約束していた幸人とリアラの話です！

閑話 「二人の話」

世界間のボーダーライン

閑話

「二人の話」

幸人は目を覚まし、治療室を出た後すぐに、リアラに呼び止められた。

カイル達が気を利かせて先に行った為、幸人はリアラに近づいて聞く。

「どこで話をする？」

リアラの顔が明るくなったのを見た幸人は、軽く笑う。

「時計塔で話をしませんか？」

「いいよ。行こっか」

幸人とリアラは笑い合っていると、最初に話をした時計塔へと向かう。

二人は気付かなかった。

気を利かせて立ち去った三人が付いてきている事に。

「ふふ、ラブな予感がするわ」

「なあ……止めようぜ。後が恐えよ」

「僕もそれには同意だ」

物陰から楽しそうに二人を見るサナとは反対に、まるつきりやる気の無いカイとカイルは、自分達に回ってくるであろう幸人の攻撃に背筋に冷たい汗を流していた。

「いいから来なさい！ こんな楽しい事はめったに無いんだから」

「どうして、女はこういう事が好きかねえ」

「女と言っか、僕はサナの性格の問題な気がするけどな」

「ごちゃごちゃうるさいわね？」

目に色が無くなったサナに二人は顔をひきつらせる。

こう言う時は逆らわずについて行った方が身のためと言う事を分かっている二人は、サナに黙ってついて行くしかなかった。

時計塔に向かう間、幸人はリアラに様々な話題を振った。

エル・ドラドで有名な物。エル・ドラドにある国などの常識的な事から、リアラの両親の事やソフィアとの出会いなどのプライベートルな事まで、幸人はリアラに話しをさせた。

「ユキトのご両親はどんな方ですか？」

それは何気ない一言だった。

興味本位、ただそれだけの、他に他意の無い質問だった。

だから幸人は正直に答えた。

「父さんは強く、友達思いな人で、オレの“こうありたい”って目標で、母さんはオレのどんな些細な質問にも真面目に答えてくれる聡明な人で、何より二人とも優し“かった”」

「かった……？」

「交通事故でね。亡くなったんだ。俺が9歳ぐらいの時に」

その幸人の言葉にリアラは顔を歪め、俯く。

そんなリアラに幸人は笑みを浮かべて言う。

「悲しんでくれてありがとう。でも、もう気持ちの整理はついているから大丈夫だよ」

「ユキト……ごめんなさい」

「リアラの“人の気持ちを自分の事のように感じれる”ってのは長所だけど短所だね。今はそんな顔しなくて良いから、ここ最近“ずっとそんな顔”してるよ？」

「えっ……？ そんな顔してました？」

幸人はしょうがないとばかりに立ち止まったリアラを残して、さっさと歩き始める。

「本人に自覚が無いとは思わなかったよ」

「ユキト！ ちょっと早いです！」

「ははは、運動が苦手なリアラにはちょっと早かった？」

「苦手じゃありません！」

「じゃあ捕まえてみな」

幸人は後ろのリアラを振り返り、両手を広げて見せる。

リアラはその幸人の挑発を受け、少しスピードを速めて幸人を追って来る。

「やっぱり苦手じゃないか」

「ユキトが速いんです！ も〜」

何度か捕まえようとするリアラを紙一重で避けていると、リアラが立ち止まり、何かを小さく呟く。

「強化魔法はズルいでしょ。それに、強化魔法を使うのは運動が出来ませんって言うてるようなものだよ？」

「ユキトは一言多いです！」

強化魔法。

魔力強化が内部からの強化ならば、強化魔法は外部からの強化。

魔力強化は一種のドーピングで、元々の能力を倍増させるのに対して、強化魔法は外装、つまり強化魔法と言う“強化服”を着ての能力上昇である。

当然、強化服である強化魔法には様々な種類があり、筋力を増加させたり、速度を上げたりと、様々である。

強化魔法は込めた魔力の分だけの効果が誰にでも得られるが、魔

力強化は元々の身体能力が低いと、大して効果が得られない為、広く使われるのは強化魔法である。

今回、リアラが使ったのはベターな身体能力を強化するタイプ。リアラほどの魔力があればかなりの力を発揮するのだが。

「身体能力を上げたくらいじゃ捕まらないよ」

「嘘……何で……？」

幸人は先ほどと同じようにリアラを紙一重でかわす。

幸人はヘラヘラ笑いながらリアラに言う。

「リアラは体の動かし方がなってないから、どれだけ速くても次の動きが分かるんだよね」

「うゝイジワル」

「ありゃゝ拗ねちゃった」

幸人はからかい過ぎた為に、拗ねてしまったリアラの近くまで行くが、リアラが直ぐに幸人を捕まえようとする。

「隙あり！」

「ないよゝ」

伸ばして来た手を掴み、幸人はヘラヘラ笑う。

リアラはもう片方の手も出してくるが、幸人は先ほどと同じように掴む。

「残念でしたゝリアラは運動が苦手って事で決定ゝ」

「うゝうゝ」

放された手をパタパタと動かすが、悔しそうには見えなかった為、幸人は笑う。

「何で笑うんですか……」

「小動物みたいでつい」

「小動物って……私を何だと思ってるんですか!？」

「大切な友人だと思ってるよ。さあ行こうか」

「ごまかされた……」

納得の行かなそうなりアラの背中を押して、幸人は近くまで来ていた時計塔に向かう。

後をつけていた三人は、幸人とリアラが遊んでいる間、ずっと木の後ろに隠れていた。

「ふふ、大分いちゃつくようになってきたわね」

「サナ……キャラが違うぞキャラが」

「なあ〜もう帰ろうぜ」

サナの豹変ぶりにカイルがツッコミを入れ、カイが面倒そうな顔で二人にそう言うが、サナは両方無視して、二人に言う。

「動くわよ。時計塔に登るのはちょっと根気があるから覚悟しなさい」

「登るのか……」

サナは二人を引き連れ、幸人達が入った時計塔を覗く。

そこではリアラが何かを使い、生徒の校章では発動出来ない転移魔法陣を発動させていた。

「うそっ！？ 何で？」

「リアラは寮に入れない代わりに、校舎を自由に行き来出来るカードを持つてる筈だ」

「って事は」

仲良く話しながら上へ転移する一人を見送り、三人は時計塔を見上げる。

「帰ろうぜ」

「確かに、上に行った頃には居ない可能性もあるしな」

「行くわよ」

「「はあ」」

もはや反論もせずのため息を吐く二人を従え、サナは校舎で一番高い建物を階段で登り始めた。

時計塔の観覧室に来た幸人とリアラは、置いてある椅子に座る。

「最初に話した時の事、覚えてますか？」

幸人が座った椅子とは反対、つまり背中合わせに座ったリアラは、

校舎を一望しながら幸人にそう言った。

「そりゃあ、ね。衝撃的だったし」

「あの頃から幸人はイジワルでした」

「イジワルなんてしてないよ。からかっただけだ」

「それをイジワルって言うんです」

背中合わせで表情は見えないが、何となくリアラが笑った気がした為、幸人は自然と笑顔になりながら話しを続ける。

「イジワルね……今度から気をつけるよ」

「幸人の気をつけるは当てになりません」

「誠意を込めて言ってるつもりなだけど？」

「危ない事をしないで下さいっていつも言ってるのに、危ない事するじゃないですか」

リアラの言葉に幸人は自分の行動を振り返る。

舞踏会でのリアラの救出。

宵闇の森での無謀な突撃。

ミズモリへの攻撃。

試験でのノルンとの交戦。

「良く無事だったなあ……」

「感慨に耽らないで下さい……私はその度に心配するんですから」

「でも、いつもリアラをしっかりと助けてるし、オレも無事だし、結果オーライじゃない？」

幸人は軽く笑いながら言うが、リアラは少し沈んだ声で言う。

「ユキト……自惚れじゃなければ、ユキトは私の為に無理をしてるんですよね？」

「……オレがやりたいからってのが一番だけど……“リアラを助きたい”とは毎回思ってるよ」

「ありがとうございます……でも、今度からは止めてもらえませんか……」

その言葉に幸人は黙る。

リアラは泣きそうな自分を必死に堪える。

幸人の無理無茶が自分のせいであるならば、止めてもらわなければならぬ。

自分の問題に幸人を巻き込みたくはなかった。
けれど。

「うん、イヤだ」

「えっ？」

「イヤだよ。さっきも言っただろ？ オレは自分がやりたいから……オレが“リアラを助きたい”って思ったから、行動するんだ」

「でも！ その度に無理や無茶をして、今回だって……試験をダメにして……」

リアラの声に余裕が無くなってきたのを感じて、幸人はリアラの右手を左手で掴む。

「試験の事は気にしないで……試験は幾らでもあるから良いんだ」
「私はいつも迷惑を掛けます……私のせいで傷つくユキトを見たくない……ユキトが傷付けば……多くの人が心配するんです」

まるで自分が傷付いても心配する人が居ないかのような言い方に、幸人は顔をしかめる。

リアラが傷付けば大勢の人、それこそ世界中が心配するだろう。

それ以上に。

「リアラ……リアラがオレに傷付いて欲しくないって思うのと同じくらいに、オレはリアラに傷付いて欲しくない。体も心も……リアラが悲しそうな顔をすれば、オレも、カイルも、サナも、カイも、先生達も……みんな心配するんだよ？」

「でも……！ 私は誰も心配させたくない！ ユキトにも迷惑を掛けたくない！」

リアラの訴えに幸人はリアラの方に体重を掛けて、肩を触れあわせる。

「誰にも心配させない、誰にも迷惑を掛けない……そんな人間はこの世には居ないよ」

「それでも……私は……！」

「癒やしの神子である“リアラ”は確かに完璧な存在じゃなくちゃいけないかも知れないけど、オレが友達になつた“リアラ”はアリック・ディアの生徒で、ちょっと特殊なだけの女の子だから、完璧なんかじゃなくて良いんだよ？」

「私は……誰かに心配や迷惑を掛けて良い人間じゃないんです」

「オレは言つたよね？ 友達は一緒に居て楽しければ友達で、友達に迷惑を掛け合うモノだつて……オレを友達だと思うなら、迷惑を掛けてよ」

幸人の言葉にリアラは押し黙る。

自分の中で答えが見つからないのだろう。

そんなリアラを背中に感じながら、幸人は言う。

「言い方を変えようか……オレを“頼って”よ」

「私は……誰かに寄りかかったら甘えてしまうから……」

「リアラは自分に厳しすぎるんだね。それに、頼るんだよ。甘えるんじゃない」

「分からない……何が違うんですか？」

リアラがそう呟くと、幸人はリアラの手にも自分の手を絡ませて言う。

「ラインの問題でしょ。頼りすぎは甘えかも知れないけど……少ないくとも多少の迷惑や心配は許容範囲内だと思うよ」

「ラインの……問題？」

「そうだよ。リアラは優しいから、心配も迷惑も掛けたくないんだろうけど、友達なら心配も迷惑も“友情”の内だから問題ない」

「でも……私は頼り方が分からない……」

リアラは泣きそうな声で幸人にそう言った。

幸人はそんなリアラの声を聞いて、リアラの細い手を握り締めて言う。

「リアラは悩み事をオレには相談しないでしょ？」

「……はい……」

「まずは悩み事を相談しよう。それから色々話そう……友達初心者はそのれから始めようか」

幸人がそう言うと、リアラは恐る恐る、震えた声で聞いてくる。

「何でも話して良いんですか……？ 嫌がらずに聞いてくれますか？」

「ああ」

「辛かったり、悲しかったりしたら……近くに行っても良いですか？」

「ああ」

「……泣きなくなったら……そばで泣いても良いですか？」

「ああ」

幸人の返事を聞くと、リアラは声を殺して泣いた。

触れ合った肩が時折震えたが、リアラが声を掛けてくるまで、幸人はリアラの手を握るだけしかしなかった。

少ししてからリアラの震えが止まり、リアラは幸人に言う。

「もう、大丈夫です……」

「そっか……じゃあオレから質問するけど、良いかな？」

「はい……」

幸人はそつと息を吸い込んで、これからリアラに言う事が、どれだけリアラに負担になるかを考えて、ゆっくり目を閉じる。

例え、負担になろうと、言わなければならない。

幸人は自分にそう言い聞かせて、リアラに言う。

「どうして……試験の時に“あんな願い”を聞こうとしたの？」
「っ!？」

「辛いかも知れないけど……話して」

幸人の言葉にリアラは体を震わせ、そして、小さく沈んだ声でポツリポツリと話し始める。

「ユキトの……力になりたかったんです……」
「力？」

「試験の準備の時から……何も協力出来ない自分が嫌で……それで、おかしいとは思ったんです……けど、体が言う事聞かなくて……」

徐々に小さくなる声を聞きながら、幸人は少し離れたところから見ていた、この前の状況を思い返す。だれがどう見ても、おかしい状況だった。けれどリアラは従った。幸人は目を瞑って、その事実を受け止める。

この話を切り出した時点で、言わなければならない事だった。

幸人は黙っているリアラに向かって、意を決して言う。

「……騙すほうが一番悪い。けど、今回、二番目に悪いのは騙されたりアラだよ」

「……えっ？」

「オレのお願いならなんでも聞くの？ オレが頼んだことをしなくちゃ嫌われるの？ だれがそんな事を言った？ 自分で”思い込んでいた”だけでしょ？」

幸人の思いがけない言葉に、リアラは声を失う。そんなリアラを無視して、幸人は言葉を続ける。

「あの時、リアラはオレを見ようとはしなかった。自分の中で完結

して、馬鹿みたいな行動をして危ない目にあつた……言いたいこと、わかる?」

幸人の言葉に、小さく頷くと、リアラは握っている幸人の手を強く握る。

まるでその存在を確かめるように。

それから少しして、リアラが口を開く。

「ユキトが……私のそばから離れてしまいそうで怖かったです…

…」

「どうして?」

「サナやカイと仲良くなつて……楽しそうで……私は二人ほど人当たりの良い性格では無いから……」

「友達じゃなくなつちゃうかと思つた?」

幸人の言葉にリアラは体をビクつかせ、小さく頷いた。

肩の震えを感じながら、幸人はリアラに言う。

「オレはそんなで友人関係はやめないよ。それにリアラにはリアラの良いところがあつて、カイやサナにはカイやサナの良いところがある。比べる方が間違つてるんだよ」

「でも……次の試験の時に……」

「二人と居るのは楽しいけど、二人とは一度試験を乗り越えたから、また今度……今度はリアラやカイルと組むよ。先生が許してくれるならだけどね」

「本当ですか……?」

「ああ、もちろん」

リアラが強く手を握ってきた為、幸人はその手を握り返した。

「もしかして……私……つまらない事で悩んでました?」
「そうだね。でも、それは本人の価値観だから……つまらないって事はないと思うよ?」
「……ありがとうございます」

リアラはそう言うと、幸人の肩に頭を乗せる。

「どうしたの?」

「ちよつと甘えて見ようかと」

「そう。肩くらいならいつでも貸すよ」

幸人はそう言うと、リアラの銀の髪に触れる。

「綺麗な髪だよね」

「私の数少ない自慢の一つですから」

「謙遜しなくて良いよ。人に自慢出来る事は幾らでもあるでしょ?」

「私は自分で手に入れたものじゃないと自慢出来ないんです。髪はずっと昔から丁寧に手入れしてきたから自慢の一つです」

「そっか」

そんなたわいの無い話をしながら、二人はずっと笑い合っていた。

リアラと幸人の話が和やかなモノに変わった時に、ようやくサナ達は観覧室にたどり着いた。

「何で、時計塔に観覧室があるんだ?」

「アルカーディアだからじゃないか?」

「納得」

カイの疑問にカイルが答え、カイは首を縦に振って納得した。

「で？ グランディオ、“あれ” どうする？」

「“あれ”か……どうするべきかな」

二人の視線の先には、ようやくたどり着いた観覧室での幸人とリアラの会話に燃え尽きたサナが居た。

「まあ、重要な話は終わった後みたいではあるけど」

「燃え尽きるほどに何かを掛けていた事にびっくりするな」

幸人とリアラの会話が和やかになった瞬間にたどり着いたサナは、重要な話を聞き逃した事に気づき、白く燃え尽きてしまったのだ。

「まだ色恋ではないけれど、馬じゃなく、階段に邪魔されたな」

「付き合わされた俺たちは笑えねーな」

「全くだ」

そんな二人の会話に気付かず、幸人とリアラは和やかな雰囲気では話を続けた。

主人公設定 2 (前書き)

第三章を始める前に、幸人の現在の設定です。

主人公設定 2

久我幸人・ユキト・クガ・15歳

地球の日本からアルカーディアに来た少年。

癒やしの神子・リアラや、学年でトップを取るカイルと共に居る人間の割に能力は凡庸。

その友人思いな性格は父親譲りで、友人の為に自ら危険に飛び込み、他の友人や学園の教師から無謀な行動を注意される事もしばしば。

久我心明流と言う古武術を幼い頃から祖父に習っており、その身体能力は高く、学園の教師陣も驚くほど“戦闘者”として、技や心構えは完成している。

その一方で、魔力というモノに触れて来なかったせいか、魔力の操作には不慣れで、学園の生徒の中では一番最後に魔法を覚えた。“魔導士”としてはおちこぼれ。

ドゥーエスのナイフと魔法の違いに、どちらも変わらないと答えるなど、力は使い方、使い道次第と思っている。

度々戦闘に遭遇するが、持ち前の久我心明流の技と覚えた魔法などで何とかしてしまう為、学園の教師陣の頭痛の種となっている。

奇抜な魔力の運用を思い付く発想力と、祖父と共に強者と戦ってきた為に養われた観察力から来る勘が鋭く、魔導士としては何ランクも上の相手と戦う事が出来る。

また、魔力強化の性質上、強化魔法で戦う人間よりもワンランク上の身体能力を持っている。

魔力はあまり高くはないが、魔法の効率的運用と魔法のコントロールの良さ、更にトリガーワードのみの詠唱破棄の安定さから、接近での高速戦闘を得意としている。

魔力数値

魔力保有総量・52万・評価B

瞬間最大放出量・5万・評価C

魔力回復量・毎時・1万3千・評価B

魔力維持時間・20秒・評価B

魔力反応速度・2秒・評価A

魔法適性

属性・風・

魔力光・緑

魔法性質・鋭く脆い

技能適性

マルチ・シンク・2・評価C

圧縮系・評価A

縮小系・評価C+

収束系・評価B+

放出系・評価C

固定系・評価C

制御系・評価B+

魔力数値は比較的平均で、瞬間的な放出量は低いが、魔力への反応は早い。

技能の方はマルチ・シンクが最低数の2で、各技能の素質も接近戦や高速戦に必要なモノ以外はこと言う典型的な特化型である。

魔具

絶無

待機・指輪型

戦闘時・日本刀型

幸人が幼い頃に黒い異形に受け取った魔具で、推定で千年以上前の古代文明に作られた魔具らしく、その人格は人工物とは思えない知識と知恵を持ち、幸人もゼツと呼び、友人として扱っている。人格が認められた者以外は扱えないらしい。

能力は魔法の吸収・増幅放出で、純粹な魔力を吸い取る為、魔力によって形成された風の玉などは霧散するが、魔力によって生じさせられた自然現象などにはあまり効果は無い。

強力な能力を持っている為、絶無自身は成長段階の幸人に頼って欲

しいとは思っておらず、危険な状況になるまで能力を明かして
いなかった。

第三章「夏休み」 第一話「グランディオ」（前書き）

だんだん忙しくなってきた今日この頃、皆さんどうお過ごしでしょうか？つて事で、こんにちは。武道家です。

大学の事で色々忙しくなってきましたが、頑張って執筆していきます！

ではお楽しみ下さい！

第三章〔夏休み〕 第一話〔グランディオ〕

世界間のボーダーライン

第三章〔夏休み〕

第一話〔グランディオ〕

幸人はセイバース本部の一室で日課の筋トレをしていた。

その部屋は幸人からすると近未来的で、横開きの自動ドアに、テレビ電話のように、リアルタイムで相手の顔を見ながらの対話が可能で、備え付けのモニター、更にMP Tをスケールアップさせた機器などがあり、まるでSFの世界に来たかのような気分させた。

だが、この部屋に連れて来られた理由が問題だった。

遡る事一時間前。

学園にあるセイバース本部直通の転移魔法陣を使い、世界と世界の間にある異空間に常に浮かぶ小さな陸地を改造したセイバースの拠点、通称“ミッドガルド”にある本部施設に転移した幸人達は、そこで緊急事態を知らせるアラームを聞く事になった。

いきなりの事でびっくりしつつも、カイルとクレアの案内でたどり着いた司令部で。

幸人はセイバーズの隊員たちに拘束された。

拘束された理由は強力なエンシエント・レリック・絶無の不正所持で、先ほどのアラームは、突然現れたエンシエント・レリックへの警戒アラームだった。

暴走する危険すらあるエンシエント・レリックを確保しようとするセイバーズの隊員に絶無は無言を突き通し、幸人の指から離れようとしなかった。

否、離れようとしなかったと言うよりは、持ち主を自ら判断する絶無は“持ち主にしか動かす”事が出来ないのだが、幸人はこれ幸いとばかりに指から外れない指輪だと偽った。

外した所を見せた事があるのはリアラだけなので、リアラ次第の賭けだったが、リアラは何も言わずに黙っていてくれ、カイルやクレアも幸人の言葉の信憑性を主張してくれた為、とりあえず部屋に“保護”と言う名目で“軟禁”されるだけで済んだ。

「夏休みの最初から軟禁ってどんだけ〜」

筋トレを終え、やる事が無くなった幸人はベッドに身を投げて、そう呟いた。

部屋が監視されてる為、絶無からの返答は無く、先ほどから一時間ほど誰とも喋らずに居た為、幸人はストレスが溜まっていた。

人と喋る事が半ば趣味な幸人にとって、一時間以上の沈黙は苦痛以外の何ものでは無いのだ。

監視しているだろう人間に話し掛けようと思っていた頃に、部屋のドアがシュツツと小さな音を立てて開いた。

「やっとお迎え……だと思ったんだけど違うみたいだね」

部屋に入ってきたのは白い服を着た幸人よりも少し年下に見える綺麗な金髪に紅い目を持つ少女だった。

多分、セイバーズの職員なのだろう。先ほど幸人を拘束した隊員たちが着ていた青の制服とは色は違うが、デザインは似ていた。

「申し訳ありません。まだ警戒が解かれた訳ではないので」

申し訳なさそうに微笑んだ少女は姿勢を正すと、幸人に敬礼をして自分の自己紹介をする。

「申しおくれました。私は世界間独立治安維持組織・セイバーズの特殊士官である“ルチャ・D・グランディオ”特尉であります」

ややこしいセイバーズの正式名称や、特尉と言う階級よりも、幸人が驚いたのは。

「グランディオ……？」

「はい。いつも“兄”がお世話になっております」

幸人は自分の周りに居る“グランディオ”と言う姓で、妹が居ると言っていた男を思い出す。

「つかぬことを聞くけど“カイル”の義妹？」
いもつと

「はい。“カイル・グランディオ”の義妹です」

「カイルの事は何て呼んでるの？」
「私的な場では“お兄ちゃん”呼ばせてもらっていますか？」

幸人はルチアという言葉を何とか理解すると、自分のMPTに記録されているカイルの画像を取り出して、叫んだ。

「頭が良くてイケメンで、異常に強くて綺麗な幼なじみが居て、更に可愛い妹ってどんなギャルゲーの主人公だああ！！」

柔らかいベッドに、カイルの画像が映し出された自分のMPTを投げつけ、幸人は息を荒げながら呟く。

「はあはあ……無性に殴りたくなってきた」

「あの……大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫。君が悪いんじゃない。お兄ちゃんなんて呼ばせてる変態カイルが悪いんだよ」

「お兄ちゃんはやっぱり子供っぽいですか？」

「そうだね。もうお兄ちゃんは卒業して“カイル”って呼び捨てにしたら？」

幸人は笑顔でルチアにそう言うが、ルチアは困ったように笑って爆弾を投下する。

「兄を呼び捨てにするのはちょっと……それに、最初に私が呼び方を聞いたら、お兄ちゃんと指定したのは向こうですから」

「奴め……小学生くらいから変態だったか……」

幸人はルチアに聞こえないようにカイルを毒づくと、直ぐに笑顔に戻ってルチアに目的を聞く。

「それで？ オレはどうなるの？」

「とりあえずは待機になります。私は話し相手兼護衛です」

「護衛？」

幸人の疑問に、ルチアは少し逡巡し、やがて覚悟を決めたように言う。

「そのレリックが暴走した際のです」

「暴走、ねえ……そう言えばカイルが強いつて言ってたな」

「まだ、兄には模擬戦では一度勝った事はありませんが……」

「アイツが異常なんだよ。学園でもさあ……」

幸人はとりあえずカイルの学園での行動やら何やらを“膨らませ”話す事にし、ルチア《話し相手》に話し始めた。

ルチアが来てから一時間ほどが経った頃に、ルチアのMPTに通信が入る。

「はい。デオダート・グランディオです」

『提督が戻られたので、彼を連れて来てもらえますか？』

「了解しました。提督の執務室までお連れします」

ルチアはMPTの通信を切ると、椅子に座っている幸人に向かって言う。

「今から提督の所までお連れします」

「その“提督”って何？」

「歩きながら説明します」

部屋から出て、通路を歩きながらルチアは幸人にセイバースの構成を説明します。

「セイバースは独立治安維持組織な為、ここ以外に拠点を置いてないんです」

「まあ、中立組織が他の場所に拠点を置くわけにはいかないわな」

「はい。その為、セイバースは基本的に長距離転移が可能な“世界間航行艦”で現地に向かいます」

「長距離転移ってどのくらい？」

「イレギュラーさえ無ければ、ここから全ての交流世界までは、一度で行けます。それ以上の交流外世界は回数が必要ですが」

交流世界がどれほどの距離で、交流外世界がどれほどの距離に位置するのかは分からなかったが、とりあえず遠いと凄いと言う事を幸人は理解した。

「世界間航行艦ねえ……つまりは艦隊がある訳ね」

「はい。第一艦隊から第一三艦隊まで。艦隊行動が必要な事件が起きない限りは、それぞれ単艦行動が基本です。セイバースの隊員が全て艦に乗っている訳ではありませんが、大体の隊員には母艦があり、それが隊員の“家”^{ホーム}です」

「家？」

幸人が“家”と言う単語に首を捻ると、ルチアは笑いながら言う。

「広大な世界をパトロールしたりすると、数ヶ月掛かったりする事もあるんです。だから、隊員たちは母艦を親しみを込めて“家”と呼ぶんです」

「数ヶ月……ストレス溜まりそうで嫌だなあ」

「ふふ、ユキトさんは“本部所属”向きかも知れませんね」

「本部所属？」

「私みたいな隊員の事です。私は年も低い為、航行艦であちこちに行けないので、本部、つまりここに駐屯して、任務に応じて各艦の“助っ人”に向かったりするのが仕事です」

「……強く無いとダメじゃん。オレには無理だ」

幸人は助っ人に向かってやられる自分の姿を想像して、顔をひきつらせながら言った。

「それでもないですよ。あゝごめんなさい。話が逸れました」

「いいよ。それで？ 提督はどんな地位なの？」

「提督は一人居て、各艦隊の指揮官なんです。普段は本部に近い世界での任務に就いていますが、非常時には単独行動中の艦隊所属航行艦を集合させる権限を持ちます」

「一三人しか居ないお偉さんか……やっぱり忙しいの？」

暗に、幸人への対応に時間が掛かった事を差していた為、ルチアは慌ててフオローする。

「いつもは本部に最低、六名はいらっしゃるんですが、今日は教会との会談で指揮に必要な三名しかいらっしゃらなくて、付近におられた提督に戻って来てもらっただんです」

「ありやりや……マズい時に来ちゃった訳ね」

「侵入警戒アラームが鳴った時は驚きました。本部に侵入者が入るとは思ってませんでしたから」

「普通に、転送ポートだっけか？　そこから来たけどね」

幸人は笑いながら両手を頭の後ろで組んでルチアの横を歩く。

ルチアは腰まである金髪を揺らしながら、幸人に尋ねる。

「そう言えば、神子さまと親しいと聞きましたけど、本当ですか？」
「うん。友達だけど、やっぱりおかしいのかなあ？」

「いえ！　ただ、世界間の交流がある世界ではおとぎ話の英雄ですから……その」

「偶像崇拜はどうかと思うんだけどね」

民衆が英雄に抱く幻想と期待は英雄を苦しめる。

幾度かその幻想と期待に耐えきれずに潰れ、立ち上がれなくなった者達がそれを証明している。

そして幸人はその実例をこの目で見て、立ち上がる際に手を貸している。

リアラは自分の力以外の事は誇る事が出来ない性格故、自身とは能力以外で全く共通点の無い先人の偉業を背負わされたのは辛かっただろう。

それを知っている為、幸人の言葉は若干鋭くなる。

「すみません……」

「君を責めた訳じゃないよ。ただ、人は人だから、さ」

「はい……わかってはいるんですけど」

「君も期待を受ける側だろ？　その内、カイルとかに相談する事に

なるよ」

幸人はそう言うと、通路に突き当たりに見えた大きなドアを見る。

「あれか」

「はい」

ドアの近くまで行き、ルチアが横に備え付けられている装置にカードを通した後、音声のみの通信を開いて、向こうに来訪を告げる。

「ルチア・D・グランディオ特尉です。ユキト・クガ氏をお連れしました」

『どうぞ』

通信機器から若々しい女性の声が聞こえる。

提督と言うから初老のお爺さんを想像していた幸人は首を捻る。

(まあ、受け答えした人が提督って訳じゃないか)

そう納得し、開かれた巨大なドアの中に入ると、大きな執務机の前に上質そうなソファアールが二つ、向かい合わせに置かれ、一つにカイルとクレアが座っており、もう片方にダークブラウンの髪を腰まで伸ばした若い女性が居た。

「あなたがユキト君ね。話は聞いているわ」

「初めまして。ユキト・クガです」

「ああ、そんなに堅くならないで。私としては“息子の友達”を招いたつもりだから」

幸人は女性の発言にフリーズする。
どう頑張っても20代後半にしか見えない人が一児の母。しかも自分の友達の母親。

幸人はまさかとはかりに顔を引きつらせてソファアのカイルと目の前の女性を見比べる。

ダークブラウンの髪や青い目などが共通している。

幸人は心の中で有り得ないと繰り返しながら、目の前の女性がカイルの母親と仮定して計算を始める。

カイル・15歳。 母親・28歳。

有り得ない。

カイル・15歳。 母親・35歳。

全然見えない。

カイル・15歳。 母親・31歳。

16で生んでれば有り得る。かなり童顔なのだろう。

「自己紹介がまだだったわね。リディア・グランディオよ。セイバーズでは提督と呼ばれるけど、階級は特将よ」

「お若いのに凄いですね」

「あら、お上手ね。でも私がカイルを生んだのは25の時よ?」

「はっ? 25……? 15で……嘘だああ!」

ドン引きしながら幸人は目の前のリディアと言う女性を見る。

どうやらリディアはこう言う反応に慣れてるらしく、面白そうにこちらを見ている。

幸人は信じられないモノを見るかのような目のまま、実の息子に視線を向ける。

目が合った瞬間、カイルは神妙な顔で頷いた。

「マジ、か……地球とは色々違うんだな……」

地球との違いについて確かめると、立ち上がれなくなりそうだった為、幸人はそう呟きながらソファーにフラフラと向かい、クレアの横に腰を落とした。

「大丈夫？」

「人生で三本の指には入るくらい衝撃的でした」

「リディアさんは恐ろしく若く見えるからね」

クレアが心配そうに声をかけて来て、幸人の言葉に空笑いをしながら言う。

幼なじみの母親の容姿が昔から変わらないのは、確かに恐ろしいかも知れない。

グランディオの恐ろしさに身を震わせついていると、リディアが立ったままのルチアに声を掛ける。

「何をしてる？ ルチアも来なさいな」

「いえ、その提督……」

「今は私的な場ですよ」

「あの、母さん……ここはとりあえずセイバーズの本部だから」

「許可します。久しぶりにカイルも戻って来たし、ユキト君やクレアちゃんも居るんだから」

リディアは自分が座るソファアを叩いてルチアを呼び寄せる。

ルチアは困ったような顔でカイルを見るが、カイルも似たように困った顔をしている為、意味は無い。

仕方なしにルチアはおずおずとリディアの横に座る。

「そう言えばリアラは？」

「リアラさんは申し訳ないけど各部署を激励に回ってもらってるわ。さっき呼んだからもうじき来るはずよ」

「……………そうですか……………」

幸人の疑問にリディアが申し訳なさそうに答える。

実際はリディアがリアラに頼んだ訳では無いのだが、幸人は自分の剣呑な雰囲気を抑えられなかった。

幸人が纏った空気が一瞬変わった事に、クレアとルチアはビクッと体を反応させた。

「ユキト。そう怒るな。リアラの存在はお前が思っている以上に影響があるんだ」

「わかってるさ。だから何も言っていないだろ？ それとも言っていないか？ なら言つてやろう。お前は何をしていた？ その影響力ある立場を関係なく息抜きの為に連れて来たんだ。激励を頼まれた時にお前は何をしていた？」

「僕じゃどうにも出来なかつたんだ」

「じゃあ一緒についてく事もできただろ？ それなのにお前は人が軟禁されてる間中、ずっと喋ってたんだろ？ 何のために連れていかれる時に、後は任せたって言っただと思ってるんだ？」

最初は幸人の雰囲気の変わりように驚いてカイルの方に身を寄せていたクレアも、幸人に凶星を突かれて追いつめられてカイルから離れる。

今の幸人ならば、近くに居るだけで何を言われるか分からないと判断した為だ。

「何か文句あるか？」

「くっ！ 文句は無い！ 僕の判断ミスだ！」

「最初からそうやって認めれば良いんだ。そんなんだから学園で“ヘタレ疑惑”が流れるんだ」

幸人の言葉にグランディオ家の三人が固まる。

「待て。僕はそんな噂は知らないぞ？」

「本人の知らない所で流れるから“噂”なんだよ」

「少し気になるわね。聞かせてもらえる？」

リディアとルチアが身を乗り出してくる。

幸人はつまらなそうに自分の耳に入ってきたヘタレ疑惑を語る。

「最初は宵闇の森の事件の際に、実力があるにも関わらず、生徒の護衛を“自分から”進んで申し出た所から始まり、生徒会長に頭が上がらない姿が目撃され、試験の時は“格上”との戦いに参加していなかった上級生が目撃した為、総合してこの疑惑が流れたと……以上だが？ 全て事実だろ？」

「くそっ！ 僕はその場での“ベター”な判断を」

「ベストをこなせる実力があるのに、無難に済ませるから“決断力”が無いって事でヘタレ疑惑が流れるんだよ」

幸人は冷めた目でカイルを見る。

カイルは口を開こうとするが、どうやら上手い反論が思い付かないらしい。

「カイル……あなた」

「お兄ちゃん……」

「待て！ 二人ともそんな目で見るな！ しかも一部はクレアの責任だろ！？」

「女の子に責任をなすりつけるのは止めなさい。これは言われても仕方ないわね」

カイルの言葉をたしなめた後、リディアはため息を吐きながらそう呟いた。

「か、母さん！？」

「ざまあ」

味方が居なくなつたカイルに幸人がそう言うと、カイルは幸人に言う。

「噂を広げたのは誰だ！ お前か！？」

「知らないさ。大体オレはお前の凄さくらいしか語ってない」

「凄さだと？」

「宵闇の森では一人だけ無傷とか、試験の時はまるでラスボスの様に立ちはだかつたとか」

「それだあああ！！」

その場に居た人間は全員、耳を両手で押さえる。

「いきなりどうした」

「お前のその発言が諸悪の根源だ！」

「オレは人は正当な評価を受けるべきだと思っただけだ」

「僕は今、不当な評価を受けてるんだ！」

カイルは今にも立ち上がりそうな勢いで幸人に迫る。

間に挟まれたクレアはカイルを押し返して、落ち着くように言う。

「落ち着きなさい！ 噂は噂よ」

「くっ！ 確かに」

「火のない所には煙はたたないって言うけどな」

カイルはその幸人の発言に顔をひきつらせながら立ち上がり、幸人の前まで来る。

「ユキト。どうやらお前は痛い目を見たいらしいな」

「怖い顔してどうした？ “お兄ちゃん”」

カイルは手に持っていたカードを黒い杖に変え、ユキトの喉元に突きつけるが、幸人は直ぐに反応して杖を掴む。

「だ・れ・が、お兄ちゃんだ？」

「お・ま・え、だ！ いやなら“変態”でも良いぞ？」

「僕のどこが変態だ！？」

「血の繋がらない可愛い女の子に“お兄ちゃん”なんて呼ばせてる奴には相応しい呼び名だろうが！」

幸人のその言葉で、カイルの中の何かギレたらしく、カイルは

笑いながら言う。

「ふっふっふ……お前とは決着を付けなきゃいけないらしいなあ……」

「クロスレンジでオレにかなうと思ってんのか？ 変態」

カイルは腕に魔力を通して杖を押し付ける力を強めるが、幸人も同じように腕に魔力を通して杖を掴む力を強める。

双方の力が互角になった為、杖がギリギリと音を立てる。

「ふっ、僕にかなうと思ってる時点でお前の負けだ！」

「冷静さが無いお前に負けるかよ。とにかく落ち着いたらどうだ？」

「それもそうね。クレアちゃん」

「はい」

幸人の言葉にリディアが頷き、クレアがカイルを取り押さえる。

「くっ！ 何をするクレア！？ 待て！ 僕だけ押さえたら」

「お・ち・つ・け！」

「ごお！？」

幸人は渾身の右の突きをカイルの水月へ叩き込む。

クレアに押さえられたまま、カイルはグッタリとする。

「お、おぼえている……」

「ふっ、まるでやられ役のセリフだな」

その言葉を最後にカイルが言葉を発しなくなった為、クレアはカイルを引きずり、ソファアの端に座らせる。

クレアに引きずられ、ソファアの端に座らされたカイルは、ダメージが消えないため、一人で悶絶する。

「さてと、ヘタレ《カイル》は沈みましたから、今後の予定を立てましょうか」

「あの、良いですか？」

「何かな？」

「ユキトさんのレリックは安全なんですか？」

ルチアの言葉に幸人は右手にはめた絶無を見て、少し間を置いてから呟く。

「……大丈夫でしょ。多分」

「今の間は何ですか!？」

「ルチア。大丈夫よ。検査の結果。暴走の危険性は無いらしいから」

リディアはそう言うと、一枚の紙を幸人に渡す。

「搜索指定は掛かってないけど、過去に英雄と呼ばれる人達が使った事が報告されてる魔具型のエンシエント・レリックよ。確か……人格があると思うけど?」

『如何にも。我には自我があるが、何か問題があるか?』

「おわっ!?! いきなり喋るなよ」

『この女に嘘は通じん。魔法で心を読まれるくらいなら喋った方が早いだろう。それとも……読まれたかった?』

「いいえ……」

自分だけが知っている筈の考えを読まれるのは御免被りたい為、
幸人は首を横に振って、そう答える。

『さて、私の資料が残っているのは驚きではあるが、どこまで知っている？』

『少なくとも五百年前の“独立紛争”時に、使用が確認されてます』
『当たり前か。我が当時、認めた所持者は後のセイバースの原型組織の人間だったからな』

『覚えてるのか？』

『千年ほど前までなら何とか。まあ、所持者が居た時期以外は寝ているのと変わらないがな』

絶無の言葉に寂しさが混じったのを幸人を感じ取った。

悠久に存在する絶無と限りある人間では時間軸が違い過ぎる。

自我があるならば辛いだろう。

「その人は強かったのか？」

『強かった。何よりも、心が折れない男だった。大きな世界を救うよりも、小さな命を助ける事を良しとしていた』

「他には誰が居た？」

『大勢居るが、力は主よりもカイル・グランディオよりも強い者ばかりだった。嘆かわしい』

絶無の言葉に幸人は顔をひきつらせる。

どう言う基準で選んでいるか分からないが、どうやら絶無の中では今回はハズレらしい。

「お前が選んだんだろうが……！」

『今となつては主を選んだのは“謎”だ』
「この野郎……」

幸人は右手から絶無を外して、財布を取り出そうとするが、一つの通信で手を止める。

『神子さまをお連れしました』

「ご苦労様。どうぞ」

通信にリディアが答えると、ドアが開き、リアラが入ってくる。

「ユキト!?!」

「お疲れ様。バカ《カイル》のせいで大変だったね」

幸人はソファーから立ち上がり、リアラを労う。

「あの子を選んだ理由はあれかしら?」

『さあな。まあ幸人が変わっているのは確かだが』

「それだけでああなたが選ぶかしら。“英雄の盟友”さん」

『懐かしい名だ。だが、幸人は英雄では無い。故に良い』

リディアと絶無の間で交わされる会話の内容について行けず、ルチアは可愛らしく小首を傾げる。

リディアはそんなルチアの頭を撫でると、立ち上がってリアラに挨拶をする。

「初めまして。リアラちゃんね。カイルから良く話を聞いているわ」

その後、リディアがカイルの母親である事に驚かないリアラを不

思議に思い、理由を尋ねた幸人にリアラが、自分の母親も同じくらいと言う発言をした為、幸人の中でエル・ドラド人への疑惑が広がったのはご愛嬌である。

第二話「格蘭ディオ家での朝」(前書き)

大学が始まりなかなか更新出来ない武道家です。

緋桜さまからの批評を頂き、一話分の長さを短くしました。

忙しいですが、合間を縫って、更新をしていきたいと思います。

第二話〔グランディオ家での朝〕

世界間のボーダーライン

第三章〔夏休み〕

第二話〔グランディオ家での朝〕

様々な交流、交流外世界が乱雑に存在するこの広い世界で、交流世界達の中心世界であるエル・ドラドの更に中心。首都・イシユタル。

そのイシユタルの市街地にグランディオ家の邸宅はあった。

白を基調とした清潔感ある普通の一軒家ではあるが、リディアの役職を考えれば、質素といっても問題ないだろう。

そんなグランディオ家の庭で、幸人は黒いジャージを着て、朝の日課である技の練習をしていた。

狼の構えで深く息を吸い、その吸った息を吐ききると同時に幸人は左右の回し蹴りを交互に放つ。

最初に放った右足を戻す勢いを使い、左足を跳ね上げ、そのまま左足を前に落とし、右の拳を腰から突き出す。

一連の三連技を一瞬で終わらせると、幸人は構えを解いて、呼吸を吐ききり、苦笑しながら庭の端を見る。

「ごめん。起こしちゃったかな？」

庭の端に居る金色の少女が声を掛けられた事にびっくりしたように体をビクつかせる。

庭の端に居たのはルチアだった。

ルチアは青色の寝間着の上に白いシヨールを巻き付けた格好で、幸人が庭で行っている動きを物珍しそうに見ていた。

「いえ、いつもこのくらいに起きてるので大丈夫です」

幸人は左手に付けている腕時計を見る。銀色の短針は6時を、長針は10分を示していた。

「もうこんな時間か……」

「何時頃からやっていたんですか？」

「5時頃かな。日課だから目が覚めちゃうんだ」

幸人はそう言うと、ルチアと共に玄関に回って、家の中に入る。

「寒くなかった？」

「大丈夫です。それにそんなに長い時間居た訳ではありませんから」「そうなんだ。あんまり見てて面白いモノじゃないと思うんだけど」

幸人はリビングで汗を拭いながら、苦笑してそう言った。

そんな幸人にルチアは首を振って、笑顔で言う。

「動きが早くて、出所が分かりづらい技、呼吸によるタイミングの取り方。どれも見ていて凄く勉強になりました」

「……そう言う所を見てたのか……大した観察力だね」

幸人はルチアの年不相応なコメントに微妙に顔をしかめながらも、直ぐに笑ってルチアを誉める。

だが、それをルチアが見逃す筈も無く、ルチアは目を伏せて咳く。

「やっぱりおかしいですか？」

「いや、ただ……自分より年下な子が戦ってる現実が嫌になっただけさ」

幸人は自分が居た地球の各地で起きていた紛争を思い出す。

テレビを通して見た、異国の銃を持った少年兵たちには何らかの感情を抱いた事は一度もなかった。

しかし、こうして目の前で、年不相応な観察力や感想を口にするルチアを見ると、どうしようもない悔しさが込み上げてくる。

「ユキトさん？」

ルチアが心配そうに幸人の顔をのぞき込んでくる。

ルチアの曇りの無い紅い目を見て、幸人は更に顔をしかめる。

「ルチアは……どうしてセイバースに入ったの？」

「????……セイバースに入った理由ですか？」

「ああ」

「ユキトさんはお兄ちゃんから私の過去を聞いてますか？」

「少し……なら」

幸人は苦々しげに咳く。

誰しも自分の過去を知らない人間に知られるのは嫌であろう。

例え、それが信頼する兄の友人であったとしても。

幸人の心情を知ってか知らずか、ルチアは笑顔で明るく幸人に理

由を言う。

「なら、簡単になりますけど……もう私のような子を出したくないんです」

「ルチアのような子？」

「クローン技術や遺伝子操作を利用した人造魔導士の子供たちは、技術の進歩と共に年々増え続けています。そして、被害にあった子供たちには……帰る場所が無いんです」

幸人は目を伏せて、悲しげな表情をして呟いたルチアの言葉に、申し訳ないと言う気持ちを感じ取った。

クローン技術や遺伝子操作で生まれた子供たちには確かに帰る場所は無いだろう。

その子供たちには母親がおらず、生まれたのは試験管の中である。生まれた施設がまともな場所であれば、まだ多少なりとも救いはあるだろうが、クローン技術や遺伝子操作を悪用し、人造魔導士を作り出す人間たちの施設がまともである事の方が珍しいだろう。

それを考えれば、確かにルチアは“幸運”だったのかも知れない。たまたまりディアのように社会的地位があり、人格的にも優れた人間の養子となり、カイルのように大事にしてくれる兄が出来た。一般的な人間から見れば、ルチアは“不幸”かも知れないが、こゝと人造魔導士の子供たちから見れば、とても“幸運”なのだろう。

それ故の“申し訳なさ”なのだ。

自分の存在を軽く見る人間は、自分が幸せになってはいけなさと思い込む。

リアラがそうであったように、ルチアもまたそうなのだ。

「だから、私はその子たちの“帰る場所”になつてあげたい。それがダメなら作つてあげたい」

「帰る場所……」

「私一人じゃ、技術の悪用を止める事は出来ません。けど、それくらいなら出来るから……お母さんとお兄ちゃんに貰つた“幸せ”を今度は私がその子たちにあげたい」

ルチアはそう語り終えると、綺麗な顔に明るい笑顔を浮かべて幸人を見上げる。

「それが……ルチアのセイバースに入った理由か……」

「はい。あと、最後のは私の“戦う理由”でもあります」

「幸せをあげたいって言うヤツ？」

「はい。私は、私の本当のお母さんに生きる事を託されました。でも……どうしていいか分からずに、途方に暮れていたら、お兄ちゃんが頭を撫でてくれた。お母さんが抱き締めてくれた。その暖かさは今でも忘れません。だから……私は戦えるんです。この暖かさを今度はみんなに味わせてあげたいから」

本当にルチアはその暖かさを思い出すかのように、胸に両手を当ててそう呟いた。

そんなルチアに幸人は、困惑の表情を浮かべながらルチアに聞く。

「聞いておいてなんだけど……何で話してくれたの？ 無闇に話す話題じゃないよね？」

「そうですね。私にとって、自分が人造魔導士って伝えるのは一種の選別です。この話しをして離れて行った人もいますし、そばに居てくれる人もいます。いつだって慣れません……けど」

「けど？」

「ユキトさんは別です。だってお兄ちゃんが信頼して、私の事を教えたくらいですから」

疑いの欠片が全く無いルチアの言葉に幸人は呆れる。
ルチアの中ではカイルの信頼出来る相手は信頼出来ると言つ構図が出来ていたからだ。

ため息を吐きたい衝動に幸人が駆られていると、ニコニコと笑顔を浮かべるルチアが更に笑顔を強める。

どうやら階段を下りる音で、カイルが起きた事を察知したらしい。

「おはよう。ルチア」

「おはよう。お兄ちゃん」

リビングに入って来たカイルは、客である筈の幸人に挨拶するよりも、まずルチアに笑顔で朝の挨拶をする。

カイルに挨拶されたルチアも嬉しそうに挨拶を返す。

そんなグランディオ兄妹を見て、幸人は心の中で、シスコンの妹はブラコンと呟いた。

そんな事を考えていると、階段を下りてくる音が聞こえて、直ぐにリビングのドアがまた開かれる。

「もしかして、寝坊してしまいましたか？」

「リアラが居るのが唯一の救いだよ」

「朝からどうしたんですか？」

二人で甘つたるい雰囲気醸し出すグランディオ兄妹から離れて話しをするために、幸人は怪訝そうな顔をするリアラを誰もいないであろうキッチンに連れて行く。

「あら、おはよう。ユキト君にリアラさん」

「おわっ!?!?」

「おはようございます。リディアさん。どうしたんですかユキト?」

何食わぬ顔で料理をしていたリディアに心底驚き、近くの壁際まで下がった幸人を見て、リアラは不思議そうに首を傾げる。

そんなリアラの質問に答えずに、幸人は引きつった顔でリディアに恐る恐る尋ねる。

「リディアさん……あの、いつからここに?」

「あなたが朝練を始めるくらいからかしら」

リディアの答えに幸人は更に顔を引きつらせる。

リディアの言う事が事実ならば、ルチアと話している最中、ずっとリディアは隣のキッチンにおり、尚且つ料理をしていた事になる。

「気配がしなかった……」

「今日は何だかおかしいですよ? ユキト」

「おかしいのはグランディオ家の方だ……」

リアラにそう言いつつ、これからの三日間を心配し、思わずため息を吐いてしまった幸人だった。

第三話「模擬戦」上（前書き）

更新が遅れて、すみません。

どうぞお読み下さい。

第三話「模擬戦」上

世界間のボーダライン

第三章「夏休み」

第三話「模擬戦・上」

幸人は今、自分が置かれている状況を必死に理解しようとしていた。

目の前には準備体操をしている黒みがかった金髪と見事な光沢を放った宝石のような金髪。

グランディオ兄妹である。

カイルは黒いズボン、上半身部分を前で止めた、体全体をスツポリ覆う黒いロングコートに黒いブーツと黒い手袋と言った、いつも通りの全身真っ黒ローブ姿で屈伸をしていた。

その横では、足首近くまである黒いロングジャケットを腰の辺りでベルトで止め、白いタイトスカートを履いたルチアが手首や足首を念入りに回していた。

なぜ二人がローブを着て、尚且つ準備体操などをしているのか。話しは三時間ほど前に遡る。

グランディオ家で快適ではあるが、非常に疲れる生活を送っていた幸人は、泊まらせてもらっておいて、何もしないのは気が引けた為、家事をしているリディアに、何か手伝える事はないかと尋ねた。昼食の一品である野菜炒めを作っていたリディアは火を一旦止め、頬に手を当てて少し考えた後に、若い少女のように笑いながら幸人にこう言った。

「セイバーズの訓練室でルチアを鍛えてあげてくれないかしら」

リディアの言葉を三秒ほど掛かって理解すると、幸人はため息を吐いてリディアにもう一度尋ねた。

「……………何か手伝える事はありますか？」

「ええ、ルチアを鍛えてあげてくれないかしら」

「……………オレの魔力値とかを知ってます？」

「戦闘に関して言えば、魔力値も魔法適性も関係ないわ。戦闘に必要なのは……………覚悟と力。あなたはその二つを満たしているし、何よりルチアが今まで戦った事の無いタイプだから、訓練相手にはピッタリだわ」

リディアはそう言うと、ピンクのエプロンのポケットからMPPTを取り出し、どこかへ通信を送る。

その通信を直ぐに終わると、リディアは野菜がたっぷり入ったフライパンを火に掛けて、さっさと昼食の準備を再開してしまった。

それが三時間前の出来事

自分の安易な発言と行動に後悔しつつ、幸人は目の前で真剣な表情で準備体操に勤しむグランディオ兄妹を見る。

二人ともやる気満々である。

『主の責任だ。諦める』

「ちくしょう……」

幸人は絶無にそう言われ、小さく呟いた後、カイルに視線を移して言う。

「ところでお兄ちゃん」

「お前にルチアはやらん」

「そこまで深読みしたか……」

からかい混じりのつもりの言葉だったが、カイルは盛大に勘違いして怒り始める。

「大体、母さんも何でルチアとお前に模擬戦なんてやらせるんだ。僕と言う兄がいるのに……」

ブツブツと何かを呟きながら、自分の世界に入ってしまったカイルに呆れつつ、幸人はルチアに声を掛ける。

「準備はいい？」

「……はい……」

「何の準備だあ!!」

ルチアは自分の体の調子を確認した後に、幸人に返事をするが、
どうやら、その間がカイルにはNGだったらしい。

「僕は認めないぞ！ ユキトが僕の弟になるなんて！」

「弟？ 私はユキトさんがお兄ちゃんになってくれるなら嬉しいですよ」

カイルの発言を勘違いしたルチアが幸人にそう笑いかける。だが、そのルチアの後ろで絶望にまみれたカイルの姿を見てしまった幸人は、上手く笑えずに引きつった笑いを浮かべる。

「そんな……僕はお兄ちゃんなのに……ルチアのお兄ちゃんは僕だけの筈なのに……」

「気持ち悪い発言してないで、早くここから出なさい」

どこからともなく現れたクレアが、両手を地面に付いてうなだれていたカイルの首根っこを掴んでそう言う。

「この訓練室にユキトとルチアを2人つきりにするなんて！ 僕には出来ないいいいいい！」

「いいいから来なさい！」

クレアに訓練室の出入り口まで引きずられて行くカイルを見送った後、幸人は訓練室を見渡す。

リディアの説明によれば、セイバーズのエースが使う訓練室で、高性能なシュミレーターが導入されてるらしい。

「ルチアはここを使った事はあるの？」

「はい。この訓練室だと存分に動けるので」
「存分にねえ……」

幸人はルチアの言葉に辺りをざっと見渡す。幸人とルチアが立っているのは出入り口付近で、少なくとも、ざっと見でここから端までは一キロほどの距離はある。

「どれだけ動くんだよ……」
「いっぱいです」

ルチアの笑顔の返答に幸人は何とも微妙な顔を浮かべる。
そんな幸人を見ながら、ルチアはMPTで管制室に連絡を入れる。

「シュミレーターをお願いします」
『分かりました。市街地で宜しいですか？』
「はい。お願いします」

ルチアはそう言うと、シュミレーターの準備が出来るまでの間、
幸人に質問する。

「ユキトさん。一つ質問です」
「なに？」

辺りを見渡していた幸人がルチアに呼ばれて首だけ振り返る。
そんな幸人の仕草に、ルチアはクスリと笑いながら質問する。

「もし速すぎて“攻撃が当たらない”相手が居たら、どうします？」
「そんな相手が居るとは思えないけど、オレだったら“先読み”する」

「先読み……ですか？」

「そう。まあスピードに自信があるのは分かったよ。ただ、オレも負けず嫌いだから、やるからには勝たせてもらうよ」

ビックリしているルチアにそう言つと、幸人は不敵な笑みを浮かべながら前に進む。

既に前にあつた広大な空間には高層ビル群が再現されており、準備は整つていた。

「私も負けず嫌いですから。負けませんよ」

ルチアのその言葉を聞いた幸人は不敵な笑みを更に深めてビル群の中へと消える。

無数に存在する高層ビルの一つの屋上で、ロープを纏つた幸人はMPTで時間を見ていた。先ほど開始の合図が鳴つたルチアとの模擬戦の制限時間は三十分。ルールは簡単。墜ちた方の負け。

頭の中でルチアの行動を予測しつつ、幸人は右手の人差し指に居る相棒に声を掛ける。

「ゼツ。手伝つてくれ」

『別に良いが、我には安全用の硬質化の魔法は掛けられぬし、非殺傷系の装置はついていないぞ?』

「そこら辺は大丈夫。多分、当たらないから」

幸人はそう言いながら苦笑する。最初は嫌がっていたのに、今ではどうやって勝とうか考えていたからだ。

『しかし、主にしては珍しいな。勝敗にこだわるとは』

「まあ“意地を張りたい相手”が見てるしね」

『・・・なるほど。ならばとことん意地を張ればいい』

絶無にそう応援された幸人は、また苦笑をしてから、真剣な顔へと表情を変える。

幸人がルチアの情報を持ってないように、ルチアも幸人の情報を持っていない。こう言う場合の最良の方法は。

「やっぱり様子見と来たか……！」

幸人は自分に向かってくる複数の魔力弾を確認しながら呟く。

ルチアの髪と同じく金色の魔力弾が三つ、幸人に向かって高速で接近する。

対処法は幾らかあるが、ここで手札を晒せば、僅かながら残されている幸人の勝利の可能性は無くなる。

情報が全く無い状況では、相手にどれだけ引き出しを開かせるかが鍵となる。その点で言えば、引き出しの少ない幸人は最初から不利なのである。

幸人は真つ直ぐに飛来する金色の魔力弾を、左右のステップで避ける。魔力弾が直射弾ならば、ビルを削って終わりであるが。

「直射誘導弾か!？」

サナが幸人に使った曲線を描く誘導弾では無く、途中で方向を切り替える直射弾である事に、幸人は舌打ちをする。

この直射誘導弾は曲線の誘導弾に比べ、動きが単調である分、速いのである。

三つの誘導弾は別々の方向から別々の動きで幸人を狙ってくる。

幸人はその魔力弾を避けつつ、ルチアの制御技術とマルチ・シンクの数に舌を巻く。

一つの魔力弾を操るのに必要なマルチ・シンクは二つ。魔力の制御と魔力弾の維持の二つを同時にこなさなければならぬからだ。

これが複数を操る事になると、魔力の維持に一つのマルチ・シンク、更に魔力弾に付き一つのマルチ・シンクが求められる。つまり、少なくともルチアは現在、最低でも四つのマルチ・シンクを使用している事になる。

四つと言うマルチ・シンクの数自体は普通であるが、それを使って魔力弾を操ると言うのは普通では無い。

魔力弾を操るだけならば誰でも出来るだろうが、複雑に動く相手を複数の魔力弾を用いて的確に追い詰める事が出来る人間など、幸人はサナ以外は知らない。

魔力弾の複数操作は訓練での努力以上にセンスが必要なのだ。

「厄介だな！」

幸人はそう言うのと腕に魔力を通し、向かって来た魔力弾の一つを殴り飛ばす。

あらぬ方向に弾き飛ばされた魔力弾はビルに激突する。幸人はそれを確認すると、同様に残りの二つも片付ける。

ビルの上で三つの魔力弾を弾いた幸人は、早々に他のビルへと移

動を開始する為に、屋上の出入り口からビルの中に入る。

「初戦はイーブンか……」

『向こうは複数操作の技術、こちらは魔力強化の身体能力と強度。引き分けが続けば引き出しが少ない主が負けるぞ？』

「わかってるさ」

絶無の言葉に幸人はそう答えつつ、どこかに居るはずのルチアの気配を探す。

複数操作を遠距離でやる事はリスクが高すぎる為、そこまで離れた場所には居ない筈だ。

「あんまり主導権を握られるとあっさり負けるからな」

『言ってるそばから来たぞ！』

「なっ!?!」

幸人は絶無に言われて周りを見渡す。

だが、どこにもルチアの姿は無かった。

「どこにも居ないじゃないか……」

『馬鹿者！ 外だ!』

とつさに外を見た幸人は、ビルの外側から迫る金と黒の閃光を視界に捉えた。

「空を飛ぶって、マジかよ!?!」

ビルに迫ってきていたのはルチアだった。ルチアは黒いロングジヤケットをはためかせながら空を駆けて、幸人が居るビルのフロアに突っ込んでくる。

幸人は全面ガラス張りで外が良く見えるこのフロアに激突する気なのかと慌てるが、ルチアが放った魔力弾によって、違う意味で慌てる事になる。

「ガラスを壊す気が!？」

そう叫びながら、幸人は急いでルチアが迫ってきている右側から左端に移動する。

魔力を用いたシュミレーターで完全再現されたデスクの裏側に滑り込んだと同時に盛大な爆発音と共に爆風とガラスの破片が幸人の脇を通り抜ける。

「シュミレーターでも物を壊すなよ!？」

幸人はそう言いながら、直ぐにデスクの裏から飛び出し、階段に向かって走り出す。だが、それは一筋の閃光に阻まれる。

幸人の進行方向にルチアが割り込んだのだ。

「ちくしょう……ここじゃ不利なんだが、な!」

幸人は機械的な黒い杖を構えていたルチアの側頭部を狙って、右の回し蹴りを放つ。しかし、その蹴りはルチアの黒い杖で受け止められる。

「近接戦の技術、学ばせてもらいます!」

「侮るなよ!」

幸人は、黒い杖と接している右足を軸に、体を地面と平行にして、左足で蹴りを放つ。その蹴りをルチアは杖で受け止めるが、連続してやってきた右足に弾き飛ばされる。

「二段蹴り!？」

「久我心明流・巻牙^{まききは}。学びたいなら結構。学ばせてやる！」

弾き飛ばした事で開いた間合いを保ったまま、幸人はゆっくりと“変則的な構え”を取る。その構えに対して、ルチアも杖を正眼に構える事で応じる。

幸人がした構えは、久我心明流に三つある構えの内の一つで、名称は“鷹の構え”と言うものである。

様々な攻撃に対応でき、尚且つ攻めにも転じれる狼の構えとは違い、鷹の構えは攻撃に意識を置いた構えである。その証拠に、鷹の構えは足を大きく開き、体を前方に倒して斜めにし、まるでスピードスケートのスタートのような形になっている。

幸人は左手を前方に倒した顔の前で伸ばし、右手は顔の後ろ辺りで拳を作っている。

攻撃に意識を置いたこの構えの最大の特徴は、攻撃に移動する瞬間的なスピードである。

ルチアは、幸人の動きに対応出来なかった。目の前で独特の構えをしていた幸人は、いつの間にかルチアの懐に潜り込み、ルチアを蹴り上げていた。

「くっ!？」

「一気に決めさせてもらっ……」

【ワールプール】

幸人が瞬時にトリガーワードを唱えると、幸人の足に風が渦のように纏わりつく。

リジェクト・ストームの簡易発展魔法で、能力を一カ所に限定する事で魔力消費を減らし、詠唱破棄がし易くなり、更に効果自体も上がっている魔法で、ヴェルダンディとの戦闘でのリジェクト・ストームの魔力消費や発動所要時間の多さを周りと検討し、幸人が必死に取得した魔法である。

分類としては身体能力強化系の魔法に当たり、幸人との相性も良く、この魔法の習得で、幸人の戦闘能力は大幅に上がった。

幸人は空中に浮いたルチアに向かって、飛び蹴りを放つ。飛び蹴りと言っても、魔力強化をした身体能力にワールプールの攻撃力を上乗せした蹴りである。その威力はどちらかと言うと兵器であり、突っ込んで行く幸人はさながら一つの砲弾であった。

瞬間的に突っ込んできた幸人の蹴りの危険性を察知したルチアは、今までのように杖で止めるのではなく、防御魔法を展開した。

【サークル・シールド】

金色の真円形の魔法の盾がルチアの前に浮かび上がり、間髪入れずに幸人の蹴りと激突する。だが、とっさに詠唱破棄でロクに魔力を込めなかったシールドは直ぐに砕け散る。

しかし、ルチアにはその数瞬で充分だった。

【サークル・エッジ】

ルチアの杖の先に円形の魔力刃が出現する。それはピザカッターのような独特な形状ではあったが、風の渦を纏った幸人の蹴りを受け止めると、高速で回転して風の渦を“切り裂いた”。

「なに!？」

右足に纏っていた風の渦がいとも簡単に切り裂かれた事に驚きながらも、幸人は空中で体を捻って、左足で蹴りを放つ。

ルチアは魔力刃とは反対側からの攻撃に全く慌てず、またトリガーワードを呟く。

【サークル・エッジ】

そのトリガーワードが呟かれた瞬間、今度は黒い杖の反対側にも同様の魔力刃が展開される。

先程と同じように、左の風の渦も紙のように切り裂かれた幸人は、一瞬で形勢を逆転させられ、劣勢に陥った。

このフロアの割と高い天井近くから、自然落下状態に入った幸人は、ルチアが杖を振りかぶった事に慌てる。

「ちっ！」

ルチアが振り下ろした黒い杖の魔力刃が発生していない柄部分を、足の裏で何とか受け止めると、幸人は杖を足場にルチアから距離を取る。

「奇特な武器だな」

「効果的ですよ」

戦闘が始まってから初めての会話であったが、幸人はルチアの言葉に納得するしかなかった。どんな人間でも“初見”のモノへの対応策は持たない。故にどのような分野でも、新しい技術や道具は有効なのである。

「全く良い杖だな……」

「はい。名前は“ハルベルト”。お母さんが私用に設計してくれた
アームズ
“ARMS”です」

「よくわからない単語が出て来たが……特注品ってのはわかったよ」

会話をしつつ、幸人はルチアの杖への対処法を模索していたが、全く良い案が浮かばなかった。しかし、それは仕方のない事だった。幸人が居た地球とエル・ドラドでは“常識”が違うのだから。

ルチアは八十センチ程度の杖をバトンのように回しながら、ゆっくりと近づいてくる。

まるで死神が近づいてくるような気分にかまれながら、幸人は魔力を体に走らせて、自分の後ろにある、ルチアが開けたフロアの穴に向かって走り始める。

ルチアが追ってくるが、気にせずに幸人は隣のビルに飛び移る。

斜めに降下しながらも、幸人は隣のビルの窓を破って、床をゴロゴロと転がりながら勢いを殺し、無事に中に入る事に成功した。

「ヤバかった……」

『我を使うか？』

「ゼツは最後だよ。とにかく接近戦は厳しい」

幸人が得意とする魔力強化はあくまで身体能力の強化なため、自体の強度は大して変わらないのである。つまり、幾ら優れた魔力強化を施した体でも人間の体であるため、魔力刃を受け止める事は出来ないのである。

幸人はルチアの魔力が近づいて来たのを察知して、このビルの階段に移動する。とりあえず閉鎖空間と上空は向こうのテリトリーだ

とわかった為、この場に居るのは危険以外の何ものでもない。

幸人は不敵な笑みを浮かべて階段を駆け降りた。

残り時間、約十七分。

第三話「模擬戦」下

ルチアはシミュレーターで構成された高層ビル群の上を飛行しながら、どこかへと消えた幸人を探していた。

右手にはワンオフ型のARMSであるハルベルトを握り、いつ幸人が攻撃して来ても大丈夫なようにしてある。

しかし、そこには僅かな思考の穴があった。ルチアは幸人の手札の中に“遠距離攻撃”が無いと思い込んでいた。

だからであろう。ルチアは突如として湧き上がった魔力の場所が自分から離れている事に、僅かながら考えてしまった。

そして、その隙を逃す程、幸人は甘くはなかった。

【トラスト・ゲイル】

巨大な風の螺旋球がやや遠方のビルの屋上から放たれ、ルチアに迫り来る。僅かに呆けたルチアが行動しようとした時には、ルチアのスピードでも回避不可能な距離であった。

しかし、幼き頃から戦場に身を置いており、尚且つ努力を惜しまない天才であるルチアの経験と本能は、とっさに、この緊急事態への対処法を察して、体を動かしていた。

迫り来る風の玉に対して、ルチアはハルベルトを振りかぶりながら、トリガーワードを呟いた。

【サイズ・エッジ】

ハルベルトの片側に集中した魔力刃は、先ほどの円形の刃では無

く、大鎌の形を模していた。

ルチアはその大鎌を風の玉に向かって、上から下へ振り下ろす。瞬時に膨大な魔力が注がれた高ランク魔導士の魔力刃と、放たれてから時間が経ち、少しずつ減衰し始めている低ランク魔導士の風の玉。結果は火を見るより明らかだった。

幸人が放ったトラスト・ゲイルは、ハルベルトに展開された大鎌の魔力刃に両断され、ルチアの後ろにあった一際高いビルに激突し、ビルのフロアを一つ破壊する。

それなりの魔力を込めた一撃。攻勢を凌げば、次に待っているのは防御側にとつての好機。

ルチアは瞬間的にそう判断すると、自らの体に魔力を全開まで走らせて、魔導士でも異常なスピードで幸人に向かって飛ぶ。

そんなルチアの行動を予測していた幸人は、更にもう一つの魔法を構成していた。試験の時のような、自分よりもスピードが速い相手に対する対処法。答えは簡単だった。

魔導士に対して一般的な人間の感覚で、弾丸のスピードを持った魔法を放つ事は幸人の魔力では不可能である。幸人の最高速魔法のガスト・ダートでも魔導士からすれば、せいぜい、百三十から四十キロ程度の野球の球が飛んできたようなものだろう。

かなりの至近距離から放たない限り、当たりはしない。それは普通の人間でも変わらない。けれど、野球の球は避ける事は出来ても、膨大な量の“砂粒”を避ける事は不可能である。

幸人は魔力を込めて、貫通能力を高めた無数の小さなピンポン玉程度の魔力弾、簡単に言えば魔力の貫通弾を大きな風の膜で覆い大きな球体になると、それをルチアに向かって一直線に放った。

【ガスト・シヨットガン】

こちらに向かってくるルチアがその風の玉に近付いた瞬間、幸人は風の球体に遠方から送っていた魔力を切った。貫通弾を中に閉じ込めておくのに必要な強度を失った風の球体は、瞬時に破裂し、ラウンドで無数の小さな貫通弾が飛び出した。

幸人のこの魔法は分類的には複合魔法と言うモノに当たる。複合は二つの魔法を組み合わせる事で新しい魔法を生み出す方法ではあるが、あまりにかけ離れた二つの魔法を掛け合わせると、反発が起きて、暴発する危険性がある方法だ。

この時点で幸人は複合と言う方法を知らずに成功させていた。魔力弾を風で包むと言う簡単なモノであり、絶え間ない努力があったからこそだが、その発想とセンスは、普通の人間からすれば驚愕ものである。

そんな幸人のガスト・シヨットガンは、幸人が思い描いた通り、全体に魔力弾を散らばせていた。

ルチアの弱点と呼べるモノを幸人は一つだけ見つけていた。それはスピードタイプなら共通の弱点である、ローブの弱さである。

スピードタイプはスピードを上げようとすればするほどローブを削る。その為、高ランクの魔導士でも、ローブが脆弱である事が多いのだ。

一連の攻防で幸人はルチアも例外では無い事を察した。故に、魔力をかなり喰われる魔法を使つての短期戦を選択したのだ。魔力がある内に怒涛の攻勢で勝負を決める為に。

しかし、幸人の考えはルチアの行動で大幅に狂った。

「なにっ!?!」

確実にルチアの動きを止め、ダメージを与えるはずだった幸人の

ガスト・シヨットガンを、ルチアは上下左右に飛び回るといってデタラメな軌道で避けきったのである。

超高速で行われたその運動がどれほどの負担をルチアの体に掛けるかは幸人には分からなかったが、一つだけ幸人にわかった事があった。

それは、ルチアも“幸人と同じ考え”であると言う事だった。

「短期決戦か……上等！」

全ての貫通弾を避けきり、先程のように魔力の鎌を作り出したルチアが迫ってくる光景を見ながら、幸人は不敵に笑いながらそう言う。先程から準備をしていた魔法を発動させる。

【ラップ・スライサー】

幸人の右足に風が集まり始める。

幸人が兼ねてから考えていた、久我心明流と魔法との融合。

その一つが、この“ラップ・スライサー”である。これは薄く凝縮された風を纏わせる魔法で、幸人は自身の利き足である右足に纏わせた。

鋭い風を纏った右足を少し後ろに下げた状態で、幸人はルチアを迎え撃つ。

ルチアが超高速で近付き、魔力の大鎌を振りかぶった瞬間、幸人は前方に宙返りをする。そして、縦回転している最中、自身の右足をルチアの大鎌へと振り下ろした。

久我心明流の中でも、トップクラスの威力を誇る技、たちの断斧である。ラップ・スライサーで強化された断斧はルチアの大鎌と衝突し、激

しい魔力の奔流を巻き起こす。

空中での数秒のせめぎ合いの後、幸人の右足の風と、ルチアの大鎌は同時にかき消える。

そして幸人とルチアは無防備のまま、ビルの屋上へ落ちていく。だが幸人は落ちながらも、次の行動を始めていた。

もとより、幸人はルチアと魔法戦で勝とうとは思っていなかった。勝てる要素があるのは接近戦。勝利の為に、幸人はルチアを接近戦へと誘い込む必要があった。

そのため、幸人は自身が持てる魔法を駆使して、ルチアに危機感を与え、ルチアが得意とする超高速からの接近戦で、確実に勝ちに來させるように仕向けたのだ。

そして幸人が狙っていたのは、両者の魔法が相打ちになり、無防備となる、この数秒間。

幸人は着地と同時に、居合いの体勢になっていた。防御不可能な絶無での斬撃。最初から決めていた、幸人の“切り札”である。

着地の衝撃を殺しているルチアに向かって、幸人は必殺の一撃を放つ。

一秒にすら満たない速度で抜き放たれた絶無は、ルチアへと迫る。だが、幸人は勘違いをしていた。ルチアの切り札が先程の超高速移動だと。

しかし、それは大いなる誤りであった。何故なら、ルチアが幸人との模擬戦で使っていたのは“魔力強化”であり、断じて“移動魔法”ではなかったからだ。

【ブリッツ】

ルチアが一言、トリガーワードを呟くと、幸人の目の前からルチアは消えた。

否。速すぎて目では捉えられなかったのである。

金色の魔力を体に纏ったルチアは、一つの稲妻と化して、刀を振り切った幸人の後ろに回り込んでいた。

必殺の一撃をかわされ、何が行ったのか理解出来ずにいる幸人の首筋に、先程の魔力の大鎌を突き付けて、ルチアは一言呟く。

「切り札は最後まで残しておくものです」

「……肝に銘じておくよ」

こうして、幸人とルチアの模擬戦は、ルチアの勝利で終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2689k/>

世界間のボーダーライン

2011年2月23日09時14分発行